望月町文化財調査報告書　第16集

岩清水遺跡

―― 緊急発掘調査報告書 ――

1986

東信土地改良事務所
望月町教育委員会

序

ここに、昭和60年度県営ほ場整備事業に伴って実施した岩清水遺跡緊急発掘調査が終了し、発掘調査報告書が刊行される運びとなりました。これにより昭和53年度から開始した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は本年度で終了したことになります。

望月町では、この他、国道バイパス工事や個人住宅に伴う調査、また、学術的解明を目的とした調査がありましたが、一連の調査により、8000年前の縄文時代から平安時代までの生活跡や多量の遺物、さらに鎌倉・室町時代の施設や山城など各時代、各分野にわたってさまざまな成果をあげることができました。これらの成果に溺れず、岩清水遺跡においても、県内ではあまり例のない7000年～8000年前の土器が復元でき、また、「玉」を伴った古墳時代の住居址の発見、さらに25棟の住居址で構成する平安時代初頭の集落跡があり、大量の土器も出土しています。

これらの資料を基礎にして、今後、広範囲に、また深く調査や研究を行なっていく必要があり、その積み重ねが真の望月町の歴史を明らかにしていくことにもなり、さらに全国的視野に立った歴史の解明が成されるものと思っております。

近年、急激な開発の波の中で失なわれていく文化財は増大する一方ですが、歴史を築き上げてきた先人の足跡を守り、永く後世に伝えていくことは、私たちにとっても、また、現代社会にとっても、重要な使命であると思うわけでありますが、動きの激しい社会の中にあっては、最少限記録として保存し、活用することによって現代社会に役立てていかなくてはならないと痛感している次第です。

本調査並びに報告作成にあたり、顧問の森嶋　稔先生をはじめとして、調査員・作業員の皆様方には熱意あふれるご指導・ご協力をいただきました。衷心より敬意と感謝の意を表する次第であります。

本調査の成果が、記録保存の役目を荷って、多くの方々に利用され、郷土を再認識し、益々の歴史研究発展の足掛りとなれば幸いと存じ願うものであります。

1986年３月20日

望月町教育委員会

教育長　佐藤初雄

例　　言

調査及び報告書作成業務

1、本書は、昭和60年７月22日～24日に試掘調査を、７月25日～９月10日に発掘調査を実施した岩清水遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2、本調査は、東信土地改良事務所の委託を受け、望月町直営で実施し、望月町教育委員会及び教育委員会が組織した発掘調査団がその任に当った。

3、試掘調査及び発掘調査の表土剝ぎは、株式会社竹花組が施工した。

4、遺構の実測は、福島邦男、倉見　渡、掛川喜四郎が行ない、上野英子がその補助をした。

5、遺構及び遺物の写真は、福島邦男が行ない、倉見　渡がその補助をした。また、全景の航空写真は、共同測量株式会社から提供していただいたものである。

6、遺物の洗浄は、塩沢光子、上野英子、清水はま江、上野茂子、上野りつ、遺物の注記は、森屋よ志子、吉沢美代子が行なった。

7、遺物の分類及び実測並びにトレースは、福島邦男が行なった。

8、遺物の復元は、倉見　渡、金井重恭、土屋しのぶ、採拓は、倉見　渡、掛川喜四郎、土屋しのぶが行なった。

9、本書の挿図、表、図版の作成は、福島邦男が行なった。

10、本書の執筆は、序文…佐藤初雄、例言・目次・第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章…福島邦男が行なった。

11、発掘調査に係る書類、図面、遺物、写真等全ての資料は、望月町教育委員会が保管している。

本書の内容

1、本書は、発掘調査によって得られた遺構や遺物をできる限り掲載したが、紙数の関係上一部割愛した資料のあることを付記すると伴に、十分な説明や検討を加えることができず意を尽せないものが非常に多いことを了承されたい。

2、本文に記すものであっても、一覧表によりそれぞれ遺構・遺物を詳細にまとめた。

3、位置図及び分布図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の50000分の１、25000分の１を使用した。

なお、本書に掲載することはできなかったが、大塚壮一郎氏より岩清水遺跡でかつて耕作中に出土した石臼、五輪塔の一部など貴重な資料を提供していただいた。

本文目次

序
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… 1
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査の構成 …… 3
第３節　調査団組織 …… 3
第４節　調査の経過（調査日誌） …… 4
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 5
第１節　遺跡の立地と自然的環境 …… 5
第２節　遺跡の歴史的環境 …… 8
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 11
第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 11
１、第１号土壙　２、遺構外出土遺物
第２節　古墳時代の遺構と遺物 …… 21
１、第１号住居址　２、第４号住居址
第３節　平安時代の遺構と遺物 …… 28
１、第２号住居址　２、第３号住居址　３、第５号住居址　４、第６号住居址
５、第７号住居址　６、第８号住居址　７、第９号住居址　８、第10号住居址
９、第11号住居址　10、第12号住居址　11、第13号住居址　12、第14号住居址
13、第15号住居址　14、第16号住居址　15、第17号住居址　16、第18号住居址
17、第19号住居址　18、第20号住居址　19、第21号住居址　20、第22号住居址
21、第23号住居址　22、第24号住居址　23、第25号住居址　24、第26号住居址
25、第27号住居址　26、第１号配石址　27、第２号配石址　28、第３号配石址
29、土壙群　30、ピット群　31、製鉄関係遺物
第４節　中世以降の出土遺物 …… 92
第Ⅳ章　総括 …… 99
引用・参考文献

挿図目次

第１図　岩清水遺跡位置図（１：100,000）…… 6
第２図　岩清水遺跡周辺の遺跡分布図（１：25,000）…… 6
第３図　岩清水遺跡遺構全体図（１：400）…… 9・10
第４図　第１号土壙〔ＳＫ－01〕（１：60）…… 11
第５図　第１号土壙及び遺構外出土縄文式土器実測図〔１　１土壙、他　遺構外〕（１・２　１：５　他　１：２）…… 12
第６図　遺構外出土縄文式土器実測図（１：２）…… 13
第７図　遺構外出土縄文式土器実測図（１：３）…… 15
第８図　第１号住居址実測図〔Ｋ－１住〕（１：60）…… 22
第９図　第１号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 23
第10図　第１号住居址出土遺物実測図（１：２）…… 24
第11図　第４号住居址実測図〔Ｋ－４住〕（１：60）…… 27
第12図　第２号住居址実測図〔Ｈ－２住〕（１：60）…… 28
第13図　第２号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 29
第14図　第３号住居址実測図〔Ｈ－３住〕（１：60）…… 31
第15図　第３号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 32
第16図　第３号住居址出土遺物実測図（１～44　１：４、45　１：６）…… 33
第17図　第３号住居址出土遺物実測図（１：６）…… 34
第18図　第５号住居址実測図〔Ｈ－５住〕（１：60）…… 37
第19図　第６号住居址実測図〔Ｈ－６住〕（１：60）…… 38
第20図　第６号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 39
第21図　第７号住居址実測図〔Ｈ－７住〕（１：60）…… 41
第22図　第７号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 42
第23図　第８号住居址実測図〔Ｈ－８住〕（１：60）…… 43
第24図　第８号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 44
第25図　第９号住居址実測図〔Ｈ－９住〕（１：60）…… 46
第26図　第９号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 47
第27図　第10号住居址実測図〔Ｈ－10住〕（１：60）…… 50
第28図　第10号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 51
第29図　第11号住居址実測図〔Ｈ－11住〕（１：60）…… 53
第30図　第11号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 54
第31図　第11号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 55

第32図　第12号住居址実測図〔Ｈ－12住〕（１：60）…… 57
第33図　第12号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 58
第34図　第13号住居址実測図（１：40）…… 59
第35図　第13号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 60
第36図　第14号住居址実測図〔Ｈ－14住〕（１：60）…… 61
第37図　第14号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 62
第38図　第14号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 63
第39図　第15号住居址実測図〔Ｈ－15住〕（１：60）…… 66
第40図　第15号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 66
第41図　第16号住居址実測図〔Ｈ－16住〕（１：60）…… 67
第42図　第16号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 68
第43図　第17号住居址実測図〔Ｈ－17住〕（１：60）…… 69
第44図　第18号住居址実測図〔Ｈ－17住〕（１：60）…… 70
第45図　第18号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 71
第46図　第18号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 72
第47図　第19号住居址実測図〔Ｈ－19住〕（１：60）…… 75
第48図　第19号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 76
第49図　第19号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 77
第50図　第20号住居址実測図〔Ｈ－20住〕（１：60）…… 79
第51図　第20号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 80
第52図　第20号住居址出土遺物実測図（１：６）…… 81
第53図　第21号住居址実測図〔Ｈ－21住〕（１：60）…… 82
第54図　第21号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 83
第55図　第22号住居址実測図〔Ｈ－22住〕（１：60）…… 85
第56図　第22号住居址出土遺物実測図（１：４）…… 85
第57図　第23号住居址実測図〔Ｈ－23住〕（１：60）…… 86
第58図　第24号住居址実測図〔Ｈ－24住〕（１：60）…… 87
第59図　第25号住居址実測図〔Ｈ－25住〕（１：60）…… 88
第60図　第26号住居址実測図〔Ｈ－26住〕（１：60）…… 89
第61図　第27号住居址実測図〔Ｈ－27住〕（１：60）…… 90
第62図　第１号配石址実測図（１：60）…… 91
第63図　第２号配石址実測図（１：60）…… 91
第64図　第３号配石址実測図（１：60）…… 91
第65図　第２～４、６～13号土壙実測図〔ＳＫ－02～04、06～13〕（１：60）…… 93
第66図　第１～４、11～12、14、18～20、27、29、34、35、37、42、43、47、48、51、52、54、55、58～60、62、65、67～73号ピット実測図〔P_1、P_2…表示〕（１：60）…… 94

表目次

第１表　岩清水遺跡周辺の遺跡一覧表
第２表　縄文式土器一覧表
第３表　岩清水遺跡住居址一覧表
第４表　第１号住居址ピット・貯蔵穴計測表
第５表　第１号住居址出土遺物一覧表
第６表　第２号住居址出土遺物一覧表
第７表　第３号住居址出土遺物一覧表
第８表　第６号住居址出土遺物一覧表
第９表　第７号住居址出土遺物一覧表
第10表　第８号住居址出土遺物一覧表
第11表　第９号住居址出土遺物一覧表
第12表　第10号住居址出土遺物一覧表
第13表　第11号住居址出土遺物一覧表
第14表　第12号住居址出土遺物一覧表
第15表　第13号住居址出土遺物一覧表
第16表　第14号住居址出土遺物一覧表
第17表　第15号住居址出土遺物一覧表
第18表　第16号住居址出土遺物一覧表
第19表　第18号住居址出土遺物一覧表
第20表　第19号住居址出土遺物一覧表
第21表　第20号住居址出土遺物一覧表
第22表　第21号住居址出土遺物一覧表
第23表　第22号住居址出土遺物一覧表
第24表　岩清水遺跡土壙一覧表
第25表　岩清水遺跡ピット一覧表

図版目次

図版一　岩清水遺跡全景
図版二　第一号土壙及び縄文式土器
図版三　縄文式土器
図版四　第一号住居址
図版五　第一号住居址
図版六　第二・三号住居址
図版七　第三号住居址
図版八　第四・五・六号住居址
図版九　第七号住居址
図版十　第八・九号住居址
図版十一　第九・十号住居址
図版十二　第十・十一・十二号住居址
図版十三　第十三・十四号住居址
図版十四　第十四・十五・十六・十七号住居址
図版十五　第十八・十九号住居址
図版十六　第十九・二十号住居址
図版十七　第二十号住居址
図版十八　第二一・二二・二四号住居址
図版十九　第二五・二六・二七号住居址、第一号配石址
図版二十　第二・三号配石址、その他の遺物
図版二一　土壙・ピット
図版二二　調査過程

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

望月地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は、昭和53年度より開始され、茂田井、春日地区を中心に実施し、本年度の望月第四工区に当る岩清水遺跡の調査で終了した。その経過を見ると、昭和53年度：犬飼遺跡、昭和55年度：又久保遺跡、新水遺跡、昭和56年度：金塚遺跡、昭和57年度：後沖遺跡、春日尾崎遺跡、昭和58年度：竹之城原遺跡、浄永坊遺跡、浦谷Ｂ遺跡が実施してきた遺跡であり、岩清水遺跡で10遺跡となる。望月町では他に道路建設や住宅、老人ホーム建設などの原因による調査が14遺跡、学術調査１遺跡、試掘調査２遺跡があり、その数27遺跡に及び、さらに国庫補助による遺跡詳細分布調査１件がある。

岩清水遺跡緊急発掘調査は、本来、遺跡に影響を及ぼす工事主体者の東信土地改良事務所が実施すべきものであるが、独自の調査組織が持てないので、工事地域の望月町に委託して発掘調査を実施したものである。望月町では、教育委員会が主体になり発掘調査団を組織して直営でその逐行に努めた。予算は、県営ほ場整備事業における農家負担率が27.5％であるところから、発掘調査費総額のうち27.5％を補助対象経費とし、27.5％のうち50％が国庫補助額、15％が県費補助額、35％が町負担額である。残る72.5％は、工事主体者である東信土地改良事務所が負担し、従って、補助金と事業主体者負担の二本立てで執行したものである。

調査の事務的経過は次のとおりである。（調査中、調査後の手続も含む。「　」内公文章。）

昭和59年６月15日　「昭和60年度文化財補助金の事業計画について」（回答）　59望教第27号

７月24日　「昭和60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財について」（提出）　59望教第945号

９月１日　「昭和60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議について」（回答）　59望教第1097号

10月25日　「昭和60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議結果の報告について」　59望教第1343号

11月14日　「昭和60年度文化財補助事業計画書の提出について」　59望教第1351号

12月24日　「昭和60年度文化財関係補助事業計画について」（提出）　59望教第1619号

昭和60年４月５日　「昭和60年度文化財関係国庫補助事業の内定について」（通知）　60教文第40号

４月22日　「昭和60年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」（提出）　60望教第540号

５月10日　「昭和60年度文化財保護事業県費補助金の内示について」（通知）　60教文

第２号

５月13日　「埋蔵文化財包蔵地岩清水遺跡の発掘調査について」（通知）　60望教第40号

５月25日　「文化財保護事業補助金交付申請書について」（提出）　60望教第742号

６月14日　「岩清水遺跡の保護について」（通知）　60教文第９－12号

６月17日　「埋蔵文化財発掘調査について」（依頼）　60東土改第245号　〔委託契約〕

６月21日　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（通知）　60教文第８－34号

６月28日　「昭和60年度岩清水遺跡緊急発掘調査実施計画及び作業員の募集の有線放送について」

７月２日　「岩清水遺跡緊急発掘調査打ち合せ及び学習会の開催について」

７月４日　「岩清水遺跡緊急発掘調査顧問及び調査員の委嘱について」

７月11日　「岩清水遺跡緊急発掘調査の労働災害保険の加入について」

７月11日　「岩清水遺跡緊急発掘調査作業員の雇用について」

７月21日　「岩清水遺跡緊急発掘調査・重機の借上について」

７月21日　「岩清水遺跡緊急発掘調査における自動車の借上について」

７月25日　「昭和60年度文化財補助金の交付決定について」（通知）　60教文第１－４号

８月１日　「昭和60年度文化財保護事業補助金の交付決定について」（通知）　60教文第２号

８月３日　「岩清水遺跡緊急発掘調査における重機の再借上と借上に伴う予算の補正について」

８月３日　「親と子の歴史教室開催について」〔８月９日実施〕

９月13日　「埋蔵文化財の収得について」（届）　60望教第1840号

９月13日　「埋蔵文化財保管証」（提出）　60望教第1841号

９月24日　「埋蔵物の文化財認定について」（通知）　60教文第６－23号

12月５日　「岩清水遺跡緊急発掘調査出土資料の鑑定・検討及び分類（会議）の実施について」

12月13日　「国宝重要文化財等保存整備費補助金に係る昭和60年度国庫補助金申請書の内容確認について」（提出）60望教第2173号

昭和61年３月末日　「昭和60年度国宝重要文化財等保存整備費実績報告書」（提出）

３月末日　「昭和60年度文化財保護事業実績報告書」（提出）

以上３月末日まで

第２節　発掘調査の構成

1)、遺　跡　名　岩清水遺跡

2)、所　在　地　長野県北佐久郡望月町大字望月字岩水・唐松1272－２、1274－４、1273－１、1273－２、1273－３、1273－４、1273－５、1274－１、1275、1276、1277、1286、1287（試掘調査箇所も含む）
1285、1288－１、1288－２、1288－３、1290、1292、1338（試掘調査箇所）

3)、調 査 原 因　望月地区県営ほ場整備事業の実施に伴い、岩清水遺跡に影響が及ぶため、事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。

4)、調査委託者　東信土地改良事務所　所長　北村章三

5)、調査受託者　望月町　町長　佐藤幸男

6)、調 査 主 体　望月町教育委員会及び教育委員会が組織した発掘調査団

7)、調 査 期 間　（現場・試掘）　昭和60年７月22日～24日
（現場・発掘）　昭和60年７月25日～９月10日
（整 理 作 業）　昭和60年９月11日～昭和61年２月28日

8)、調 査 面 積　（試 掘 調 査）　1,000㎡
（発 掘 調 査）　5,112㎡

9)、調 査 方 法　東－西をＡ・Ｂ……、南－北を１・２……とする３ｍ×３ｍのグリッド方式による平面発掘　試掘調査及び発掘調査の表土剝ぎは重機が主体

第３節　調査団組織

顧　　問　森嶋　稔　（千曲川水系古代文化研究所主幹・日本考古学協会会員）
調 査 団 長　佐藤初雄　（望月町教育委員会教育長）
調査担当者　福島邦男　（望月町教育委員会学芸員・日本考古学協会会員）
調　査　員　倉見　渡　（長野県考古学会会員・佐久考古学会会員）
掛川喜四郎　（望月町文化財保護審議会委員・長野県考古学会会員）
渡辺重義　（軽井沢町文化財専門委員・長野県考古学会会員）
福沢幸一　（長野県埋蔵文化財センター嘱託・日本考古学協会会員）
調査補助員　吉沢浩矣、大森英七、篠原浩江
作　業　員　森下金一郎、小池嘉一、井出義雄、大森一尾、両沢安記、荻原袈裟吉、関嘉津武、中島友二郎、井出阿き江、大森徳太郎、桜井卯作、淀川一郎、上野英子、依田剛、真田哲也、山浦友督、片桐直行、金井重恭、塩沢光子、森屋よ志子、清水はま江、上野りつ、上野茂子、柴平美江子、吉沢美代子、土屋しのぶ

事　務　局　　教育長・佐藤初雄、教育次長・元矢　良、社会教育係長・大森睦男、
社会教育係・上野早苗、福島邦男

第４節　調査の経過（調査日誌）

７月22日　本日より試掘調査を開始する。調査箇所全体を網羅するように幅約1.5mのトレンチを東西・南北方向に任意に設定し、地山直上まで重機により掘り進める。本日は調査地域の東側中心。土師器・須恵器の破片出土。

７月23日　調査地域の鹿曲川に沿う箇所の試掘を行なう。住居址と思われる落ち込みや焼土が各所で検出する。土師器や須恵器の坏・甕の破片や内耳土器が出土する。

７月24日　重機でトレンチ掘りを進めるとともに、検出された落ち込み部の拡張と確認を行なう。午後からテントの設営等を行なう。

７月25日　午前８時30分より結団式。町長、教育長、教育次長、社会教育係長、調査団出席の元に調査現場にて挙行する。重機による表土剝ぎに併行しながらグリッドの設定と遺構検出作業を進める。

７月26日　表土剝ぎと遺構検出作業、坏、甕の破片が出土。平安時代の遺物が主体。

７月27日　表土剝ぎ、グリッドの延長設定、遺構検出作業。焼土、柱穴を検出。

７月29日　表土剝ぎ、遺構検出作業、古墳時代とみられる大規模な住居址と他に２棟の複合する住居址検出。

７月30日　新たに４棟の住居址を検出する。いづれも方形ないし長方形。

７月31日　新たに５棟の住居址を検出する。複合関係を成しているものが多い。

８月２日　夕方強い雷雨がある。本日より住居址の掘り込みを開始。新たに住居址検出。

８月３日　本日までに13棟の住居址と集石、柱穴群を検出、住居址の掘り込み続く。

８月５日～10日　２～７住、集石の掘り込みを行なう。平安時代を中心とする良好な遺物が出土。３住は深く特に保存が良い。

８月12日　１住の掘り込み開始。４住とともに古墳時代の住居址と確認する。遺物が多い。

８月13日～16日　盆休み。

８月17日　１住は一部２住との複合関係にある。完形の坏が出土する。カマドは東向き。

８月19日～24日　現在までに25棟を越える住居址を検出。１住をはじめ各住居址の掘り込み。

８月26日～31日　住居址の掘り込み、清掃、写真撮影、実測などの作業が続く。１住と４住は古墳時代、他は平安時代初頭が中心であるが奈良時代の手法の残る遺物も見られる。

９月２日～７日　各遺構の掘り込み、清掃、写真撮影、実測などの作業が続き、まとめの段階となる。

９月９日～10日　遺構、遺跡の全体測量や現場に残る遺物の取り上げを行なう。また図面の点検を行ない、10日に現場調査を終了した。

９月11日～３月末日　11日より報告書作成にむけての整理を行なう。遺物の洗浄、注記、実測、トレース、拓本どり、復元、色塗り、写真撮影、遺構図の修正、トレース、図及び図版作成、原稿執筆などを行ない３月に報告書を刊行する。

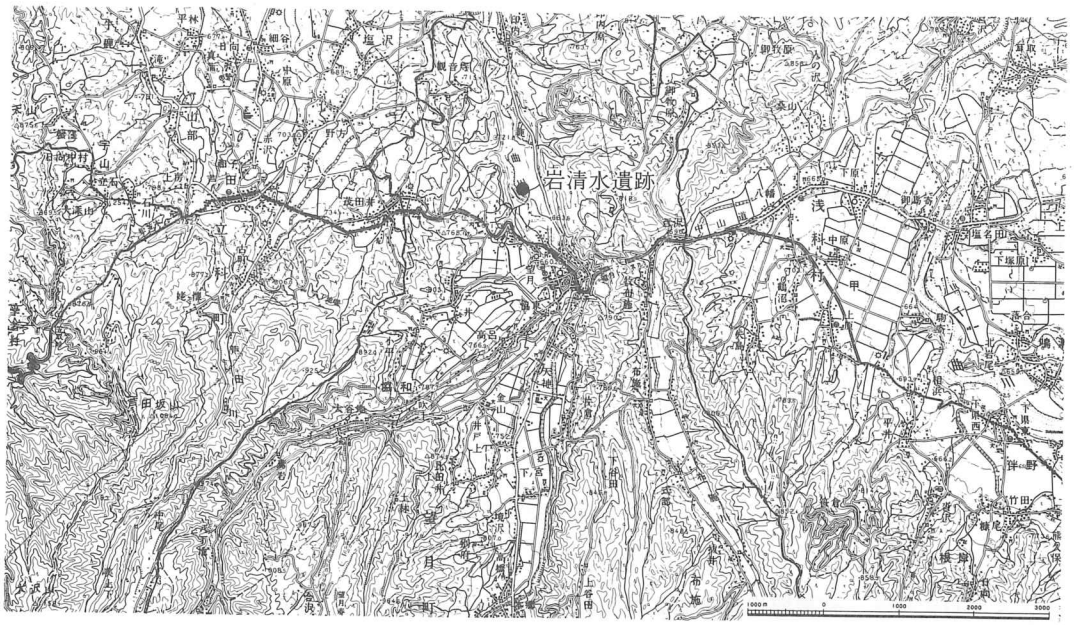
第II章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地と自然的環境

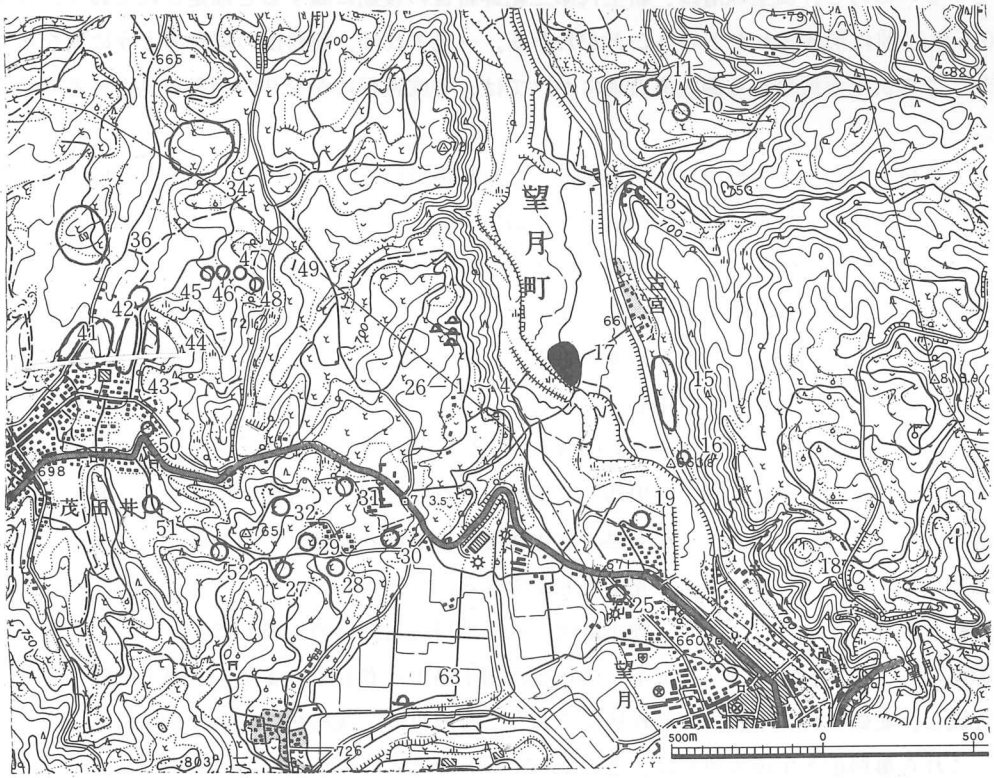
望月町は、北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山（2530ｍ）を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山（2560ｍ）の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その一つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成が成されていることであり、もう一つは、御牧原台地や八重原台地地域が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」（模式地：佐久市相浜）と呼ばれる非常にもろい湖沼性堆積層によって形成されており、各所に露頭箇所を見ることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩および礫質砂岩などで、幾層にも繰り返し互層しており、ほぼ水平層に近い。これらの地層の中で泥岩からは、針葉樹や広葉樹などの珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は「瓜生坂層」（模式地：望月町大字望月）と呼ばれ、メタセコイヤやその他の植物化石が得られるところから、相浜層の属する新生代第四紀更新生の前期と推定されているのに対し、瓜生坂層は、新生代第三紀鮮新世の後期に属すると推定されており、今から200万年以前に形成されたということがわかる。一見すれば、蓼科山の裾野のように連なっているが、この瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、形成過程にかなりの相異が見られるものである。

一方、蓼科火山によって形成された地籍は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方と茂田井地域を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域を、いわゆる蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿を止めている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が、北方の望月町方向へ延び、しかも長く雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は安山岩の分布が広く見られ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。これらは、望月町の浅田切、八丁地、畳石、菅原、大谷地、吹上など、八丁地川中・上流地域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がもののみごとに発達し、天然記念物のごとき美しい露頭箇所を見ることができる。

望月町を流れる主流は、鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の４河川であり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を抜って流下している。細小路川は春日で、また八丁地川は望月で鹿曲川と合流し、北御牧村で千曲川に流れ込んでおり、布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これら蓼科山と主流４河川は、この地方においては人々の生活や動植物の生息にとって必



第１図　岩清水遺跡位置図（１：100,000）



第２図　岩清水遺跡周辺の遺跡分布図（１：25,000）

第１表　岩清水遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	遺構・遺物	備考
10	内匠Ｂ遺跡	大字望月字内匠	散布地	畑	(平)土師器、須恵器の坏・甕	
11	内匠Ｃ遺跡	大字望月字内匠	散布地	畑	(平)土師器、須恵器の坏・甕	
13	内匠1～3洞穴	大字望月字内匠	洞穴	山林	出土遺物なし	
15	大木遺跡	大字望月字大木	散布地	畑	(平)土師器、須恵器の坏・甕	多量に散布
16	椀の木遺跡	大字望月字椀の木	散布地	畑	(平)土師器、須恵器の坏・甕、鉄鏃	
17	**岩清水遺跡**	**大字望月字岩水・唐松**	**集落址**	**水田**	**(縄・早~後)、(古)、(奈)、(平)、(中)**	**昭和60年に発掘調査**
18	望月城跡	大字望月字城他	城跡	山林・畑	(中)陶器、磁器、石臼、かわらけ	昭和59年に一部調査
19	将ヶ屋敷遺跡	大字望月字将ヶ屋敷	散布地	畑・水田	(縄・前)深鉢・打石斧、(弥・後)、(平)	
25	吉長遺跡	大字望月字吉長	散布地	畑・宅地	(縄・中)深鉢	
26	武陵1～4号古墳	大字望月字武陵	古墳	山林	(古)須恵器、甕	
27	古道Ａ遺跡	大字望月字古道	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
28	古道Ｂ遺跡	大字望月字古道	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
29	古道Ｃ遺跡	大字望月字古道	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
30	古道Ｄ遺跡	大字望月字古道	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
31	古道Ｅ遺跡	大字望月字古道	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
32	古道Ｆ遺跡	大字望月字古道	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
34	夜討村遺跡	大字茂田井字夜討村	集落址	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	大規模集落と考えられる。
36	犬飼遺跡	大字茂田井字犬飼	集落址	畑・水田	(平)住居址4、掘立2、土師器・須恵器	昭和53年・54年に発掘調査
41	花立遺跡	大字茂田井字花立	集落址	畑・水田	(縄・中)加Ｅ・唐草文系・深鉢・浅鉢	大規模集落と考えられる。
42	天神反遺跡	大字茂田井 東町 天神反	集落址 廃寺	畑・宅地	(縄・中~後)加Ｅ・堀ノ内・深鉢・浅鉢・布目瓦	大規模集落と廃寺
43	用水尻遺跡	大字茂田井字用水尻	集落址	畑・水田	(縄・中~後)加Ｅ・堀ノ内・深鉢・浅鉢	大規模集落と考えられる。
44	北畑Ａ遺跡	大字茂田井字北畑	散布地	畑・水田	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
45	北畑Ｂ遺跡	大字茂田井字北畑	散布地	畑	(縄・中)深鉢、(平)土師器、須恵器	
46	芳垣外遺跡	大字茂田井字芳垣外	散布地	田	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
47	東大平Ａ遺跡	大字茂田井字東大平	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
48	東大平Ｂ遺跡	大字茂田井字東大平	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
49	東大平Ｃ遺跡	大字茂田井字東大平	散布地	畑	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
50	前田遺跡	大字茂田井字前田	散布地	畑・水田	(平)土師器、須恵器、坏・甕	
51	又久保遺跡	大字茂田井字又久保	集落址	畑・水田	(平)住居址、土師器、須恵器、灰釉陶器	昭和55年に発掘調査
52	又峰遺跡	大字茂田井字又峰	散布地	畑	(縄・中)加Ｅ、石鏃 (平)土師器、須恵器	
63	上新井原古墳	大字協和字上新井原	古墳	水田	(古)	積石か

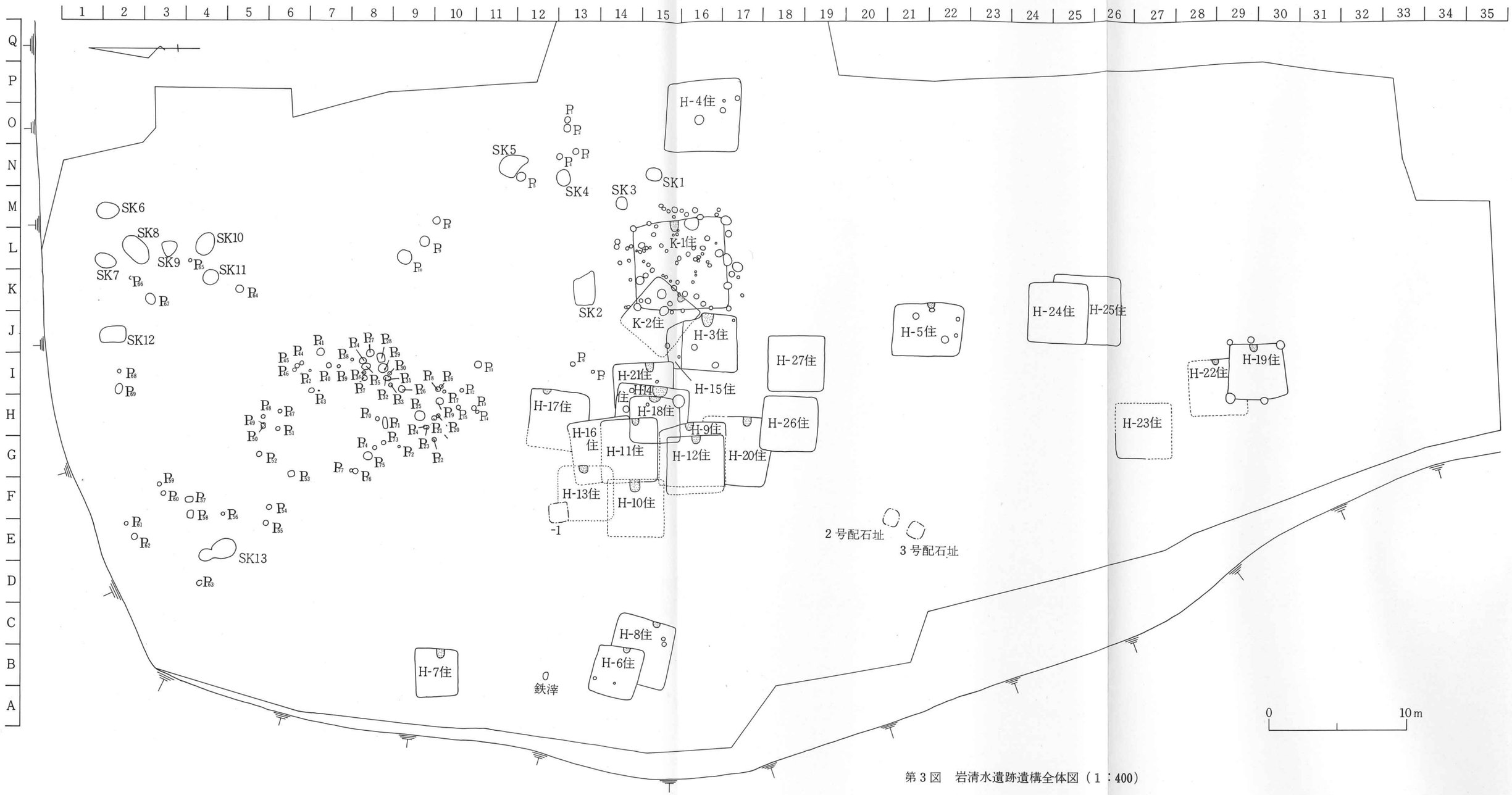
須の自然的条件であるとともに、これらの自然環境を取り入れながら過去から現在に至るまで脈々と生活が営なまれてきたのであり、基本的な生命泉であるといえる。

岩清水遺跡は、望月地区の北側で鹿曲川中流右岸の第二河岸段丘上に位置している。河床から約15m登った所であり、段丘線から遺跡が広がりを見せている。標高は650mを測る。遺跡付近は、鹿曲川が大きく蛇行し、生活が営なまれる以前に氾乱による沖積地の形成が成されたと考えられる。東側には御牧原台地が続き、西側には八重原台地に至る台地面が存在しているため、双方の急斜面により、結果として狭い谷間が形成されたような地形となっている。沖積面は広くはないが、鹿曲川中流の中では最も広い。遺跡西側の第一河岸段丘には、多量の水を供給する湧水がトンネル状になった岩の裂け目から流れ出しており、遺跡の立地条件としては第一義的存在であったと思われる。本地域の家庭に水道が普及するまでは、この湧水「岩水」を運んで生活水に利用していた程豊かな水量を誇っているものである。

地質構造は、段丘線に近い程拳大から人頭大の円礫が厚く堆積しており、遺跡の中央部より東側は、黄色ロームが主体になり、極めて厚く堆積している部分も認められる。礫層とローム層が互層している箇所は認められないが、発掘調査地域外の試掘調査トレンチ内では、青灰色の粘質土が堆積している箇所が見られ、その下部は礫層となっている部分が目立った。本地域は、浸蝕、氾乱、流れ込み、火山灰の堆積など、非常に複雑な形成過程を経ているものと判断された。

第2.節　遺跡の歴史的環境

望月町に存在する遺跡は、各時代別に区分すると総数467を数え、このうち平安時代の遺跡は201で、42.9％を占めている。望月町がいかに周辺地域と比較しても平安時代の遺跡が集中しているかがわかる。岩清水遺跡は、僅かに縄文時代の遺構と遺物が存在し、また、古墳時代の住居址2棟の外は全て平安時代の資料であるといってよい。古墳時代の住居址は、春日・後沖遺跡で5棟検出されている外は今のところない。後期になって群集墳が増大し、岩清水遺跡の西側台地には、現存4基の武陵古墳群が存在している。平安時代の遺跡は、本遺跡の東側台地の裾に、大木遺跡、椀の木遺跡と続く南北に細長い遺跡が存在し、椀の木遺跡では鉄製の鍬が出土している。いずれも岩清水遺跡と関連をもつものとして注目される。また、本牧小学校の西側の緩斜面には極めて多量の遺物が出土する古道A～F遺跡が存在し、一定範囲に集中する平安時代の遺跡としては、岩清水遺跡周辺の遺跡群と同様最も大規模なものである。時期的及び歴史的背景として関連をもつと思われる中に、「野馬除跡」がある。古宮部落の東側台地上に存在し、すでに溝状に残存するだけであるが、望月牧に関する重要な遺構として注目されている。恐らくは、奈良時代～平安時代に構築されたものと考えられ、この時期に存在する岩清水遺跡との関連性の中で把握していけるものと思われる。岩清水遺跡は、特に、古墳時代の臼玉出土との関連から東山道の問題、古墳時代及び平安時代の集落址から、望月牧との関連が表出してきたかに見える。



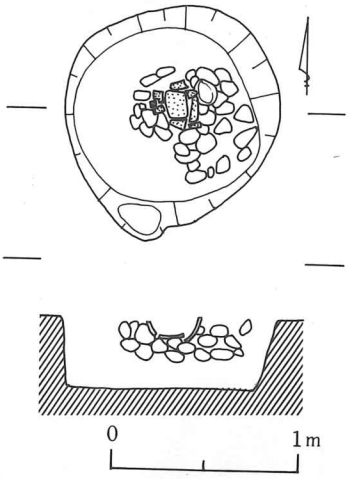
第3図　岩清水遺跡遺構全体図（1：400）

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１、第１号土壙（第４・５図、図版二）

本土壙は、調査区中央部の東側で検出され、縄文早期末葉に比定されるものである。黄色ローム層を掘り込んで構築されており、長径114cm、短径110cm、深さ40cmを測る。平面形態はほぼ円形で、断面は、壁が垂直に近い台形状を成し、底面は水平である。南側に、土壙に接して小ピットがみられたが、本址と関連する遺構であるかは不明である。底面から10cm上がった所に、小礫が20cmの厚に置かれており、その中央部に山形押型文土器１個体が正位で存在した。上部は耕作等により破壊されたと考えられるが、頸部から胴部の破片が存在しているところから、完形に近い土器を土壙に埋設したものと思われる。礫の下部は底面まで黒色土が堆積し、他は黒色土混りの黄色ロームが堆積していた。



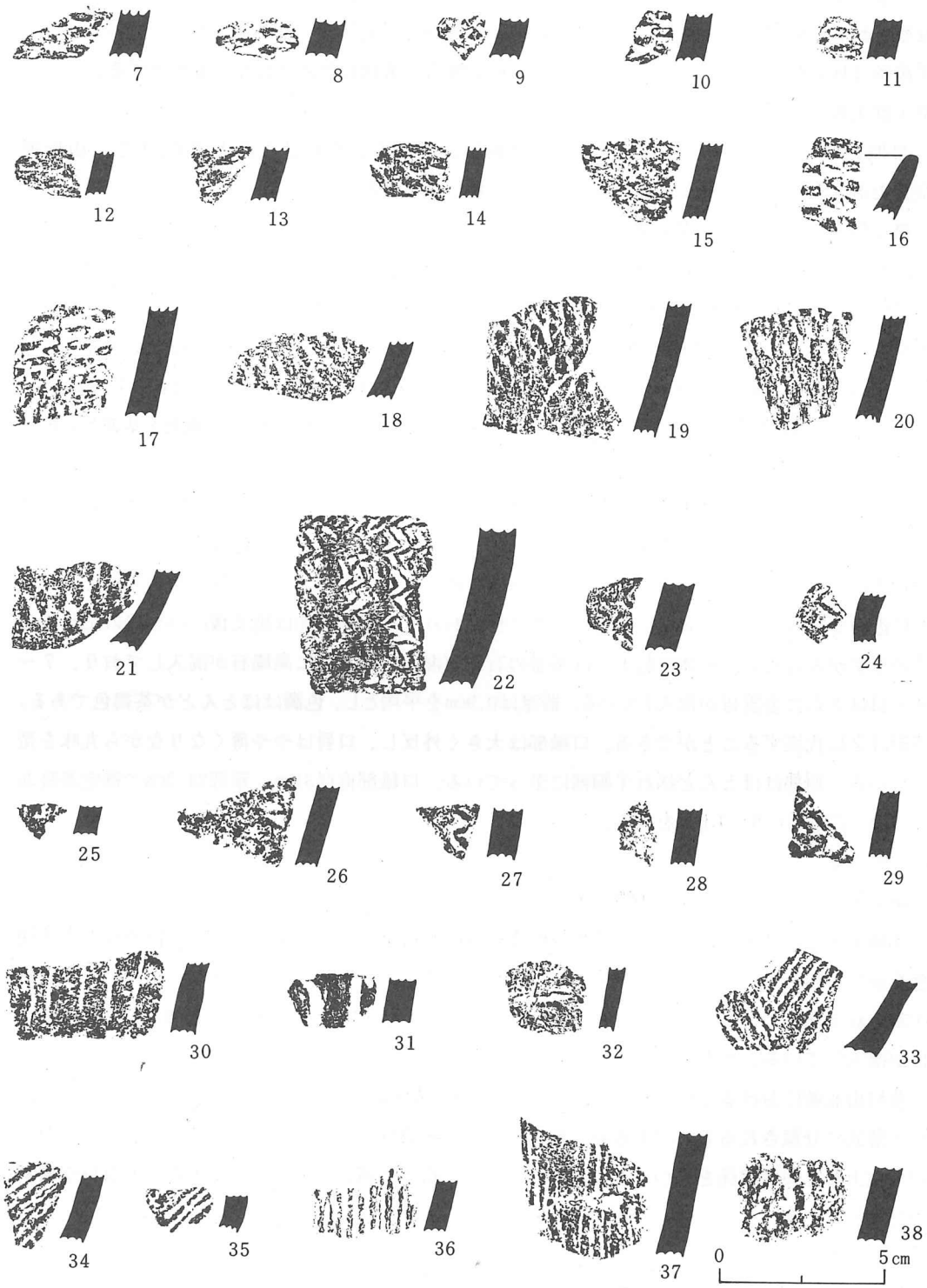
第４図　第１号土壙実測図
〔ＳＫ－01〕（１：60）

本址出土の山形押型文土器は、口唇と底部を欠くが、口縁下部から胴部下半まで存在するもので、図上復元すると第５図のようになる。器形は、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、頸部で一端括れ、胴部の中央部が僅かに脹らみ、下半に至って徐々に窄みながら底部になるもので、口縁直径・推定31.4cm、頸部24.8cm、胴部最大径25.3cm、器厚0.9～1.0cmを測る。外面・内面ともに茶褐色を呈し、極めて多量の石英粒と黒耀石粒が混入している。山形文は、現存部において口縁下部より縦位に施文されており、無文部は全くない。従って口縁から底部まで縦位密接施文とみられ、原体の重なる部分は各所に見られるもののかなり整っている。波形は比較的大きい分類に入り、波長が１～1.1cm、波高が0.5～0.6cmを測り、３条を１単位とし、原体の長さは２cm程と思われる。本資料は、器形や文様から細久保式期に比定されるものであるが、細久保式は、口縁部胴上半にかけて横位密接施文、胴下半は縦位密接施文のものや、口縁部から胴下半まで横位密接施文されているものが多く、口縁部から縦位密接施文されている資料はあまり知られていないものである。文様形態から見ると、細久保式でも末期的な時期に当るものと思われる。

２、遺構外出土遺物（第５～７図、図版二・三）

本調査で出土した縄文式土器は僅かな点数であるが、早期から後期までみられ、早期の土器は、第１号土壙をはじめ、平安時代の第９・11・12・14・18号住居址の床の下部より集中的に出土し

第５図　第１号土壙及び遺構外出土縄文式土器実測図
〔1 土壙、他遺構外〕（1・2　1：5、他1：2）



第６図　遺構外出土縄文式土器実測図（１：２）

ている。恐らく遺構に伴う資料であったかと思われるが、平安時代の住居址に破壊されたものと推察される。前期から後期までの土器は、やはり調査区中央付近に散在して出土していたが、集中箇所は見られなかった。なお、分類は第１号土壙出土遺物も含めて行なうものとする。

第１群土器

早期押形文土器を一括分類する。出土点数は29点（接合資料は１点とする。）で、山形押型文土器９点、楕円押型文土器20点であり、２類に分類する。

第１類土器（第５図１、第６図22～29、図版二・三）

山形押型文の一群で、第５図１に代表されるものである。１と22を除けば他は細片である。全て縦位施文が行なわれ、波形が大きい。22は波形が荒く、施文間に無文部を残している。また、器厚も1.0～1.1と厚く、外面は極めて丁寧なナデ調整が成されている。胎土は、石英が多量に混入し、そこに黒耀石粒が入るものと、石英と黒耀石が同量混入するものとがあり、前者は１・22・23・28・29であり、後者は24～27である。色調は、22の外面が赤褐色である外は、茶褐色を基調とする。

第２類土器（第５図２～６、第６図７～21、図版二、三）

楕円押型文の一群で、横位施文と縦位施文の土器である。小範囲に一括して出土しており、３～６は同一個体である。横位施文は２・７～16、縦位施文は18～21で、17は横位施文と縦位施文の接点に当る資料である。楕円の形態は、ほぼ２種に分類でき、いわゆる殻粒状のものと、長方形に近いもの16がある。調整は全体に丁寧に行なわれているが、20は施文後にハケ状の工具で縦位のナデがみられる。全体に胎土には多量の石英が混入し、そこに黒耀石が混入しており、７～９・11はさらに金雲母が混入している。器厚は0.9cmを平均とし、色調はほとんどが茶褐色である。器形は２に代表することができる。口縁部は大きく外反し、口唇はやや薄くなりながら丸味を帯びている。頸部はほとんど括れず胴部に至っている。口縁部直径31cm、頸部24.2cmで推定器高36～37cm、器厚は0.6～0.9cmを測る。

第２群土器

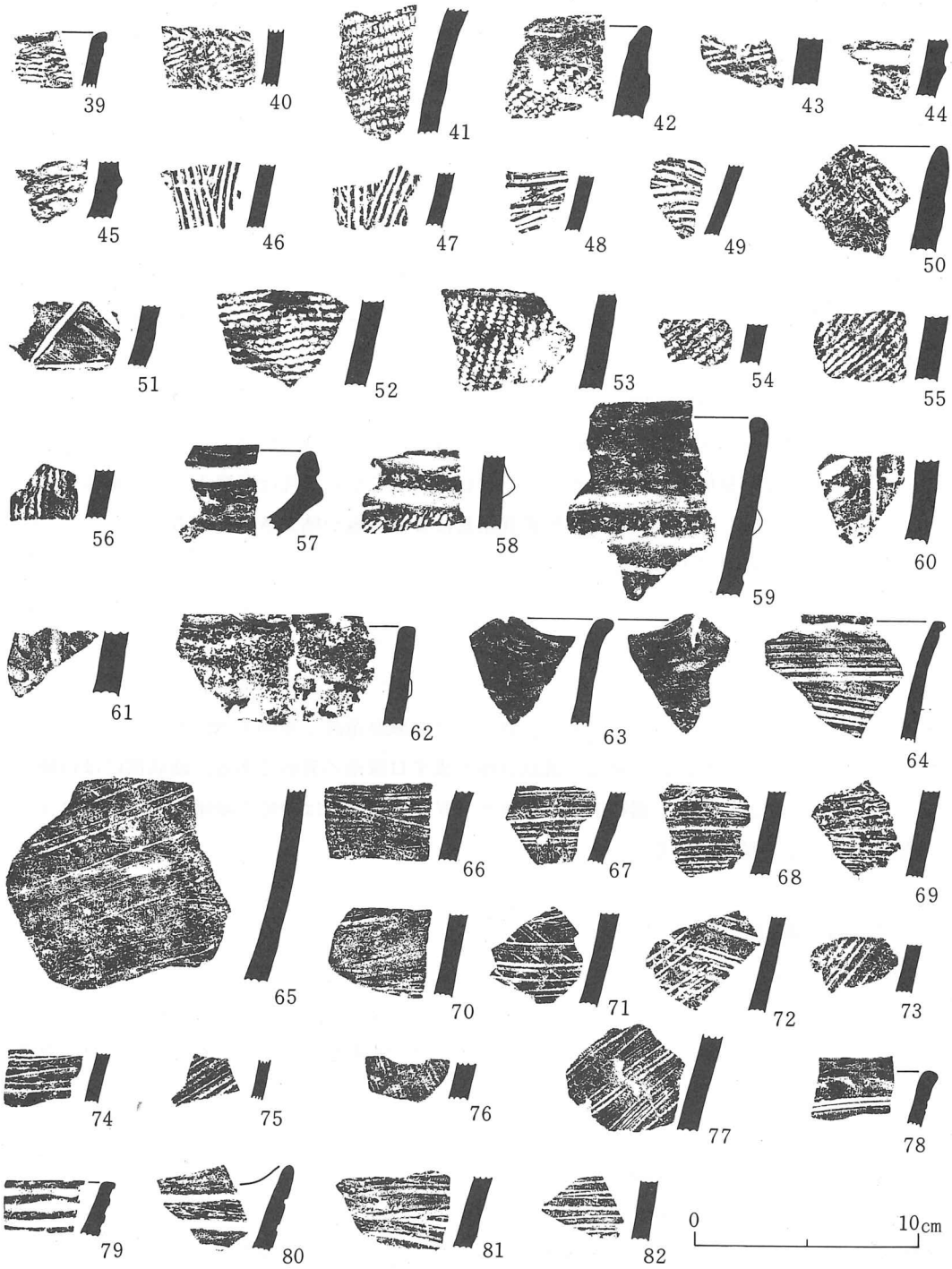
第１類土器（第６図30～32、図版三）

沈線文系土器群を一括した。30は比較的細い沈線を縦位に併行施文しており、内外面とも茶褐色を呈し、胎土に多量の石英と黒耀石が混入している。31は太い沈線を施文し、胎土には混入物がみられず均一である。32は単位の短い沈線がみられるもので、多量の石英と黒耀石、それに金雲母が混入している。本群は田戸系土器群に分類できるものである。

蓼科山北麓における沈線文系土器は、春日・新水Ｂ遺跡出土資料に代表され、田戸下層式及び田戸上層式に分類されるものであるが、他に多様な貝殻腹縁文をもつ資料も同時に存在し、また、押型文土器と共伴関係をもつことで知られている。新水Ｂ遺跡の他に、金塚遺跡でも良好な資料が出土している。

第３群土器

第１類土器（第６図33～37、図版三）



第７図　遺構外出土縄文式土器実測図（１：３）

本群は撚糸文土器を一括した。36はやや太目の撚糸を施文しているが、他はほぼ同様細目である。33は底部直上の資料で、左右に施文方向を分けている。37は巻き付けの荒い原体で施文した資料で、無文部が目立つ。器厚は0.6～0.8cmで、多量の石英と黒耀石・金雲母が混入しており、押型文土器と胎土はほとんど変らない。

第４群土器

第１類土器（第７図１、図版三）

本群は表裏縄文土器を一括したが、出土点数は１点だけである。口唇は平坦で、内面にかかる部分がやや丸味を帯びている。縄文は口唇と器面に対し横位に施文している。器厚は0.6～0.7cmを測り、僅かに砂粒が混入しているが精選された胎土であり、内外面ともに暗茶褐色を示す。

第５群土器

第１類土器（第７図40～45、図版三）

前期前半の土器を本群とした。いずれも繊維を多量に混入し、器厚が厚い。42は口縁部の資料で、口縁直下に横位の整形痕が認められややくぼむが、そこから下部は器厚１.４cmと極めて厚くなっている。44と45は、ヘラないし半截竹管状工具による沈線が施文されている。

第２類土器（第７図46～50、図版三）

前期後葉の土器を本群とした。46～49は、半截竹管による平行沈線が施文されており、46と47は同一個体で縦位に、また、49と50は斜位ないし横位を基調としている。いずれも器高は0.6～0.8cmを測り、胎土は良く精選されており、黄褐色ないしうすい茶褐色を帯びる色調を呈している。これらは諸磯Ｃ式に比定されるものであり、春日・竹之城原遺跡に類例を求めることができる。50は前期最終末の篭畑式類似の資料で、波状口縁を成す口縁部の資料である。波状部には口縁に沿って縄文が施文されており、器厚1.2cmと極めて厚く、胎土には砂粒と繊維が混入しており、内外面とも黄褐色を呈している。

第６群土器

第１類土器（第７図52～61、図版三）

中期後半の土器群を一括した。52～56・58は縄文が施文されているもので、53・58は半截竹管による横位沈線が描かれている。57は受口状の口縁を成している。59は両耳広口壺に類似する口縁部の資料で、鍔状の隆帯が貼付されている。60・61は雨垂状の沈線が施文されており、唐草文系土器の系列の中で理解されるものである。

第７群土器

第１類土器（第７図62～82、図版三）

後期後半の土器を一括して本類とする。64～77は、沈線が施文されているように見えるが、器面調整の痕跡であり、いずれも0.6～0.8cmを測り、黄褐色ないしは茶褐色を呈し、砂粒が多量に混入している。78～82は併行する沈線が横位に施文されており、80は波状口縁を成す資料である。

第2表　縄文式土器一覧表

挿図番号	器形	部位	器厚	胎土	色調 外面	色調 内面	文様・施文
5－1	深鉢	頸部～胴下部	0.9～1.1	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	山形押型文、縦位密接施文（口縁も従位施文と思われる。推定口縁直径31～32cm、器高41cm前後
5－2	深鉢	口縁～胴上半	0.6～0.9	石英多量、黒耀石やや多	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横位密接施文、口縁直径31cm
5－3	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石	茶褐色	暗黄褐色	楕円押型文、縦位密接施文
5－4	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、縦位密接施文
5－5	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、縦位密接施文
5－6	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、縦位密接施文
6－7	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石、金雲母	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横位施文
6－8	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石、金雲母	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横位施文
6－9	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石、金雲母	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横位施文
6－10	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横位施方
6－11	深鉢	胴部	0.9	石英多量、黒耀石、金雲母	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横井施文
6－12	深鉢	胴部	0.6	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横位施文
6－13	深鉢	胴部	0.7	石英多量、黒耀石	赤褐色	赤褐色	楕円押型文、横位施文
6－14	深鉢	胴部	0.6	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	楕円押型文、横位施文
6－15	深鉢	胴部	0.7	石英多量、黒耀石	赤褐色	黒褐色	楕円押型文、横位施文
6－16	深鉢	口縁部	0.3～0.7	石英多量、黒耀石	赤褐色	赤褐色	楕円押型文、横位施文、楕円の分類であるが長方形を成す。
6－17	深鉢	胴部	0.8～0.9	石英多量、黒耀石	赤褐色	赤褐色	楕円押型文、横位と縦位の接点部
6－18	深鉢	胴下部	0.7	石英多量、黒耀石	茶褐色	暗茶褐色	楕円押型文、縦位施文
6－19	深鉢	胴部	0.7	石英多量、黒耀石	茶褐色	暗茶褐色	楕円押型文、縦位施文
6－20	深鉢	胴部	0.6～0.7	石英多量、黒耀石	茶褐色	黒褐色	楕円押型文、縦位施文、かなり表面の荒い原体使用
6－21	深鉢	胴下部	0.7～0.8	石英多量、黒耀石	茶褐色	黒褐色	楕円押型文、縦位施文
6－22	深鉢	胴部	1.0～1.1	石英多量、黒耀石やや多い	赤褐色	茶褐色	山形押型文、縦位密接施文。内外面とも丁寧なナデが行なわれている。
6－23	深鉢	胴部	0.9～1.0	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	山形押型文、縦位施文、内外面ともナデ
6－24	深鉢	頸部	0.7	石英、黒耀石	茶褐色	赤褐色	山形押型文、縦位施文
6－25	深鉢	胴部	0.7	石英、黒耀石	茶褐色	黒褐色	山形押型文、縦位施文
6－26	深鉢	胴部	0.7	石英、黒耀石	明茶褐色	明茶褐色	山形押型文、縦位施文
6－27	深鉢	胴部	0.9	石英、黒耀石	茶褐色	茶褐色	山形押型文、縦位施文
6－28	深鉢	胴部	0.7	石英多量、黒耀石	茶褐色	明茶褐色	山形押型文、縦位施文
6－29	深鉢	胴部	0.7	石英多量、黒耀石	茶褐色	明茶褐色	山形押型文、縦位施文
6－30	深鉢	胴上部	0.6～0.7	石英多量、黒耀石	茶褐色	茶褐色	沈線文、田戸系に併行
6－31	深鉢	胴上部	0.8～0.9	胎土均一	赤褐色	茶褐色	沈線文、田戸系に併行
6－32	深鉢	胴部	0.5	石英多量、黒耀石、金雲母	赤褐色	赤褐色	沈線文
6－33	深鉢	底部直上	0.6～0.9	石英多量、黒耀石	茶褐色	赤褐色	撚糸文、押型文、沈線文系土器群に併行すると思われる。
6－34	深鉢	胴部	0.6～0.7	石英、金雲母	茶褐色	赤褐色	撚糸文
6－35	深鉢	胴部	0.7	石英、金雲母	茶褐色	茶褐色	撚糸文、34と同一個体
6－36	深鉢	胴部	0.6～0.7	石英多量、黒耀石	暗茶褐色	黒褐色	撚糸文
6－37	深鉢	胴下部	0.8	石英多量、黒耀石、金雲母	茶褐色	明茶褐色	撚糸文

挿図番号	器形	部位	器厚	胎土	色調 外面	色調 内面	文様・施文
6－38	深鉢	胴部	0.8	石英多量、金雲母多量	赤褐色	赤褐色	撚糸文
7－39	深鉢	口縁部	0.6～0.7	砂粒混入するがほぼ均一	暗茶褐色	暗茶褐色	単節縄文、口唇にも施文
7－40	深鉢	胴部	0.7	小石多量	茶褐色	黒褐色	絡条体圧痕文
7－41	深鉢	胴部	0.9	パミス、繊維多量	黄褐色	黒褐色	縄文、関山式
7－42	深鉢	口縁部	0.5～1.9	砂粒、繊維多量	茶褐色	茶褐色	縄文、関山式
7－43	深鉢	胴部	1.1～1.7	砂粒、繊維多量	茶褐色	茶褐色	縄文、関山式
7－44	深鉢	胴上部	0.8～0.9	繊維多量	茶褐色	茶褐色	半截竹管文と縄文、関山式
7－45	深鉢	胴上部	1.0	繊維多量	茶褐色	茶褐色	半截竹管文と縄文、関山式
7－46	深鉢	胴部	0.7～0.8	均一	黄褐色	茶褐色	半截竹管文
7－47	深鉢	胴部	0.7～0.8	均一	黄褐色	茶褐色	半截竹管文
7－48	深鉢	胴部	0.6～0.7	均一	黄褐色	茶褐色	半截竹管文
7－49	深鉢	胴部	0.6～0.7	石英微量、小石	黄褐色	黄褐色	半截竹管文
7－50	深鉢	波状口縁部	0.3～1.2	砂粒、繊維	黄褐色	黄褐色	縄文
7－51	深鉢	胴部	0.8	砂粒	黄褐色	黄褐色	沈線文
7－52	深鉢	胴部	0.9	石英等砂粒	赤褐色	赤褐色	縄文
7－53	深鉢	胴部	0.9～1.0	小石	茶褐色	茶褐色	縄文、内面ナデ
7－54	深鉢	胴部	0.8	石英等砂粒	茶褐色	茶褐色	縄文
7－55	深鉢	胴部	1.0	砂粒	茶褐色	茶褐色	縄文
7－56	深鉢	胴部	0.8	砂粒	茶褐色	茶褐色	縄文
7－57	深鉢	口縁部	0.7～1.0	砂粒	黒褐色	黒褐色	波状口縁直下に沈線
7－58	深鉢	胴上部	1.0	砂粒	黄褐色	黄褐色	隆帯貼付、縄文、加曽利E系
7－59	壺	口縁部	0.8～1.0	砂粒	黄褐色	黄褐色	隆帯貼付、両耳広口壺に近似する。唐草文系Ⅳ
7－60	深鉢	胴部	1.0	砂粒	黄褐色	黄褐色	垂下する沈線と雨垂沈線文、唐草文系Ⅳ
7－61	深鉢	胴部	1.0～1.1	砂粒	茶褐色	茶褐色	雨垂沈線文、唐草文系Ⅳ
7－62	深鉢	口縁部	0.8	砂粒	黄褐色	黄褐色	口縁直下に隆帯貼付
7－63	深鉢	波状口縁部	0.7～0.8	均一	茶褐色	茶褐色	波状部に縦状沈線
7－64	深鉢	口縁部	0.6～0.7	砂粒多量	茶褐色	茶褐色	幅広のヘラ状工具による横位のナデ
7－65	深鉢	胴部	0.8～1.0	砂粒多量	茶褐色	茶褐色	幅広のヘラ状工具による斜位のナデ
7－66	深鉢	胴部	0.8	砂粒多量	茶褐色	茶褐色	幅広のヘラ状工具による斜位、横位のナデ
7－67	深鉢	胴部	0.7	砂粒多量	茶褐色	暗茶褐色	条痕が残る横ナデ
7－68	深鉢	胴部	0.8	砂粒	茶褐色	暗茶褐色	斜状のナデ痕、内面ナデ
7－69	深鉢	胴部	0.8	砂粒	黄褐色	茶褐色	斜状のナデ痕
7－70	深鉢	胴部	0.8	砂粒	黄褐色	黄褐色	斜状のナデ痕
7－71	深鉢	胴部	0.6	砂粒	黄褐色	黄褐色	斜状のナデ痕
7－72	深鉢	胴部	0.7	砂粒	茶褐色	茶褐色	半截竹管文と刺突

第３表　岩清水遺跡住居址一覧表

住居址番号	平面形態	主　軸	規　模（cm）			カ　マ　ド		柱　穴		他の遺構	時　期	備　考（複合関係）
			東西	南北	深さ	位　置	構　造	内部	外部			
1	隅丸方形	N-90°-E	657	650	13	東壁中央部	石組み・粘土	50	36	貯蔵穴１ 集　石 煙　道	古　墳	①→２→15→３ 火災 壁に接する柱穴は外部に含める
2	隅丸方形	N-130°-E	446	410	7	東南壁南寄り	石組み・塼	7	0		平　安	１→②→15→３ カマドに塼使用
3	隅丸方形	N-93°-E	478	433	43	東壁中央部北寄り	石組み・粘土	3	0	東南隅に集石	平　安	１→２→15→③ 床から塼出土
4	隅丸方形	N-90°-E	550	562	不明	不　明	不　明	4	0		古　墳	単　独 壁破壊
5	隅丸長方形	N-94°-E	338	531	24	東壁中央部	不　明	5	0		平　安	単　独 床がやや傾斜
6	不正方形	N-107°-E	350	355	20	東壁中央部南寄り	石組み	5	0		平　安	８→⑥ 床や壁に自然礫突出
7	隅丸方形	N-90°-E	377	355	23	東壁中央部	石組み	0	0	西壁下に配石	平　安	単　独 床や壁に自然礫突出
8	隅丸方形	N-97°-E	468	427	20	東壁南寄り	石組み	2	0		平　安	⑧→６ 床や壁に自然礫突出
9	隅丸方形(？)	N-90°-E（推定）	不明	480	10	東壁中央部	石組み・粘土	2	1		平　安	18→14(20)→12(10)→９ 貼り床
10	不　明	N-90°-E（推定）	不明	不明	不明	東　側	石組み(？)	－	－		平　安	13→12→11→⑩→９ 複合関係でほとんど破壊
11	隅丸長方形	N-82°-E	480	不明	11	東壁中央部南寄り	不　明	2	0		平　安	18→14→16→13→⑪→10 複合関係で大部破壊
12	隅丸長方形	N-87°-E	不明	411	15	東壁中央部	石組み	0	0		平　安	18→14→20→⑫→９ 複合関係で大部破壊
13	不　明	不　明	不明	不明	不明	不　明	粘土(？)	－	－		平　安	複合関係で全壊
14	隅丸方形(？)	N-90°-E	541	不明	27	東壁中央部南寄り	石組み・粘土	3	1		平　安	21→18→⑭→16→12→11→９ 複合関係で大部破壊
15	隅丸方形(？)	N-90°-E	380	不明	14	不　明	不　明	2	0		平　安	２→⑮→21→３ 北東部に丸味をもつ 複合関係で大部破壊
16	隅丸方形(？)	N-79°-E	不明	471	8	不　明	不　明	0	0		平　安	18→14→17→⑯－11 複合関係で大部破壊
17	隅丸方形(？)	N-90°-E	458	不明	12	東壁北寄り	石組み	0	0		平　安	18→14→⑰→16→11 複合関係で大部破壊
18	隅丸長方形	N-90°-E	328	369	8	東壁中央部	不　明	0	0	土壙が存在。伴うか疑問	平　安	21→⑱→14→16→12→11→９ 北東部に張出しをもつ
19	隅丸長方形	N-90°-E	400	443	14	東壁中央部	石組み	0	5		平　安	22→⑲ 複合するが良好
20	隅丸方形(？)	N-90°-E	489	不明	9	東壁南寄り	石組み 粘　土 塼	1	0		平　安	⑳→12→９・⑳→26 カマド北側より炭化米・炭化種子　破壊が激しい
21	隅丸方形(？)	N-85°-E	不明	432	12	東壁南寄り	不　明	0	0		平　安	㉑→18→14 複合関係で大部破壊
22	不　明	不　明	不明	不明	不明	東　壁	不　明	－	－		平　安	㉒→19 ほとんど破壊
23	不　明	N-90°-E（推定）	不明	不明	不明	不　明	不　明	－	－		平　安	単　独 ほとんど破壊
24	隅丸方形	N-90°-E	430	430	14	不　明	不　明	0	0		平　安	25→㉔ 撹乱をうけている
25	隅丸長方形	N-92°-E	491	506	26	不　明	不　明	0	0		平　安	㉕→24 撹乱をうけている
26	隅丸方形	N-90°-E	408	421	16	不　明	不　明	0	0		平　安	20→㉖ 撹乱をうけている
27	隅丸方形	N-90°-E	420	415	9	不　明	不　明	0	0		平　安	単　独

（複合関係は、本址に係る内容であり、全体としての連続性はない）

挿図番号	器形	部位	器厚	胎土	色調		文様・施文
					外面	内面	
7－73	深鉢	胴部	0.6	砂粒	黄白色	黄白色	沈線文
7－74	深鉢	胴上部	0.6	砂粒	暗茶褐色	暗茶褐色	横状のナデ痕
7－75	深鉢	胴上部	0.5	砂粒	暗茶褐色	暗茶褐色	斜状のナデ痕
7－76	深鉢	胴部	0.8	砂粒	黄褐色	暗黄褐色	斜状のナデ痕
7－77	深鉢	胴部	0.8～0.9	砂粒	黄褐色	暗黄褐色	斜状のナデ痕
7－78	?	口縁部	0.7	砂粒	黒褐色	暗黄褐色	口縁部直下に二本の併行沈線
7－79	?	口縁部	0.6～0.7	砂粒	茶褐色	暗黄褐色	半截竹管による太目の併行沈線
7－80	?	波状口縁部	0.5～0.7	均一に近い	暗黄褐色	暗黄褐色	併行沈線
7－81	深鉢	胴部	0.8	砂粒	茶褐色	茶褐色	沈線文
7－82	深鉢	胴上半	0.7～0.8	砂粒	灰褐色	灰褐色	横位併行沈線

第2節　古墳時代の遺構と遺物

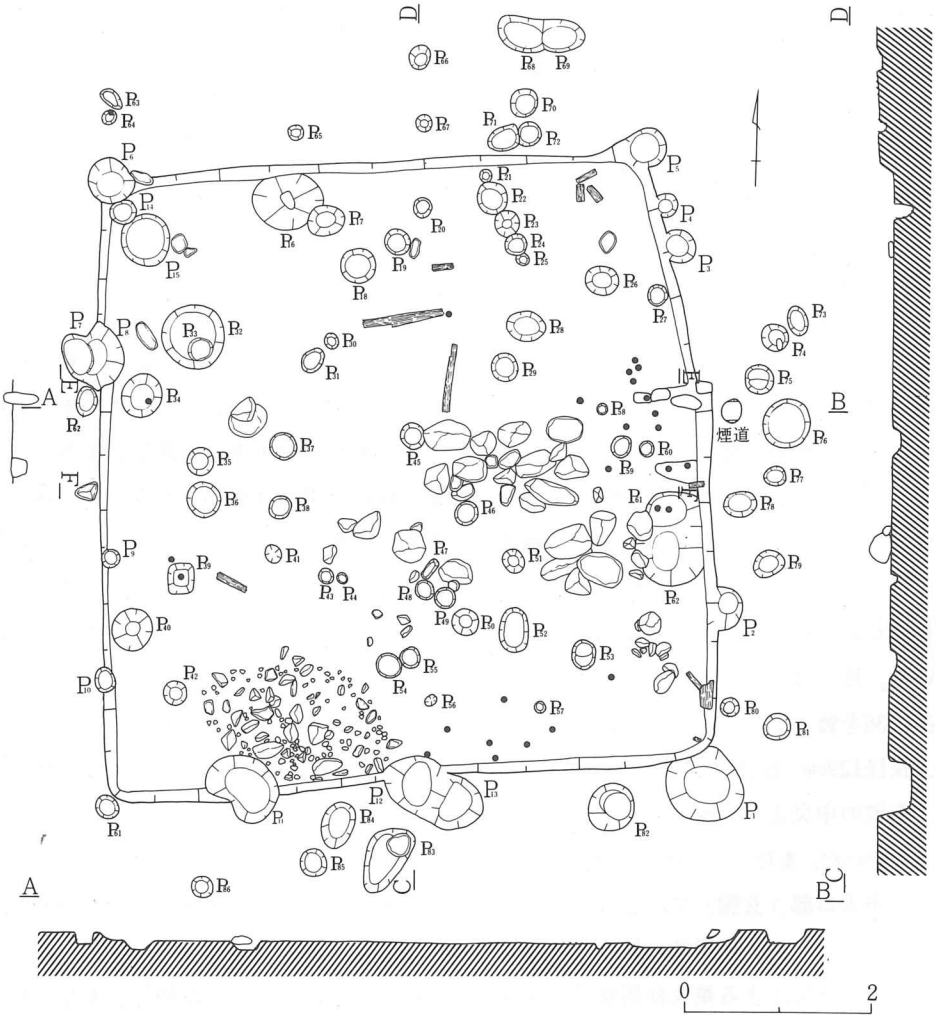
1、第1号住居址（第8図、図版四）

本住居址は、調査区中央部よりやや東側に位置し、水田床面の直下で検出された。平面形態は、東西657cm、南北650cmを測る隅丸方形を呈し、カマドを中心とする主軸方位は、N－90°－Eを示す。壁高は最も深い東壁箇所で13cmを測り、西壁に至るに従って浅くなる傾向が見られた。黄色ローム層を切って構築してあるため、壁は固く締っており、また床面はタタキが成され踏み固められたように極めて硬質な状態であった。カマドは、東壁の中央部に位置し、主軸90cm、幅100cmで、焚口部は地山を舟底形に掘りくぼめ、煙道にかかる部分は床面より少し高く残している。袖部は、北側に河原石を立てて粘土で補強し、南側には礫は存在していなかったが、同様の構造になっていたと思われ、粘土袖だけが残っていた。住居址外のカマド東側には、煙道から続く煙出し口が直径25cmの規模に開けられていた。内部は真赤に焼けており、焼土や僅かな炭が堆積していた。柱穴は、床面や壁にかけて存在し、さらに住居址外にも存在していた。住居址内部に50、外部に36を数える。全て本住居址に伴うものか注意する必要があると思われる。カマドの南脇には、長径129cm、短径98cm、深さ25cmを測る貯蔵穴が検出されており、全体に擂鉢状を呈していた。南壁の中央よりやや西側の床面に、多量の小礫が円形状に集石しており、大部分が床面にくい込んでいた。また、この箇所の壁面には、柱穴（P_{11}・P_{13}）が2基存在しており、この状態から見ると、出入口部（玄関）ではなかったかと推定できるものである。床面には、人頭大の大礫が多数存在していたが、住居址に伴うものかどうか確定できなかった。

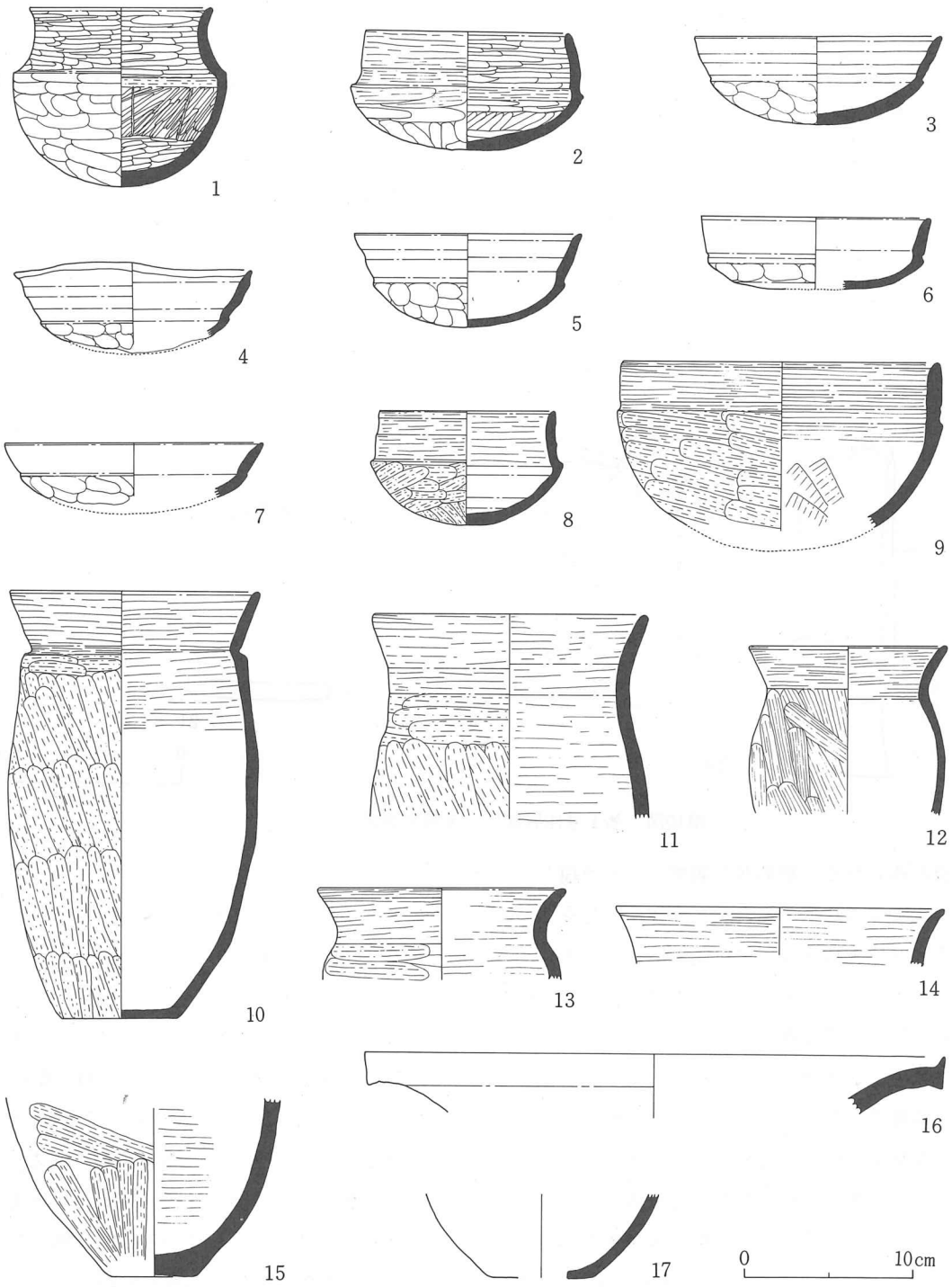
本址は、火災による焼失住居址で、床面上には極めて多量の焼土が堆積し、また、垂木と思われる炭化材が出土している。

遺物（第9・10図、図版四・五）

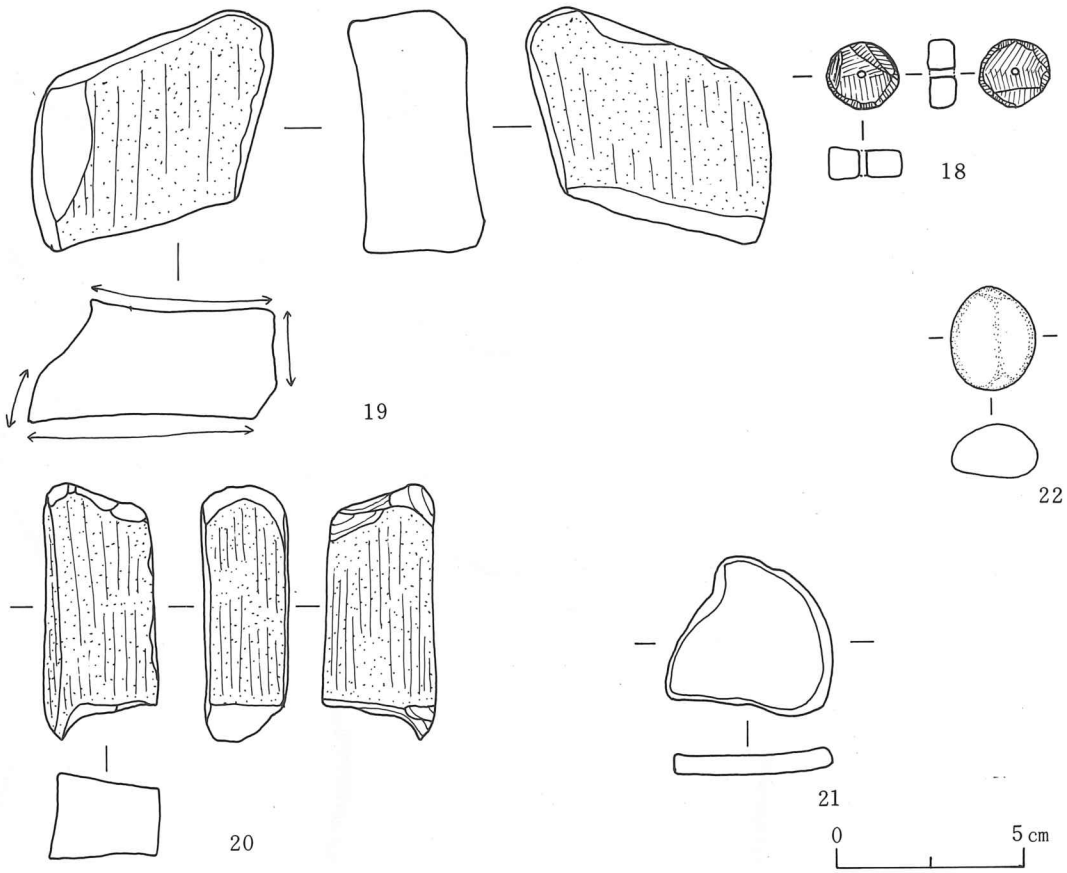
本住居址からは、土師器の坏、甕、甑、大形埦、須恵器の坏、甕、それに砥石、臼玉、鉄製品が出土している。破片総数はかなりの量にのぼるが、比較的形状を残す遺物も多く、中でも坏は完形品も出土している。坏のうち須恵器は７の１点だけで、他は土師器であった。１は10cmと深く、底部が半球形で丸味が強い資料で、口縁部は内湾し、口唇に至って「く」の字状に外反している。この口縁部と同様なものに８があり、屈曲は１程大きくないが近似する資料である。２は口縁部が内湾し、さらに口唇も内湾しており、この形態を成す資料は１点だけである。その他の坏は、稜から口唇まで外反するもので、最も大きく外反する資料は、７の須恵器の坏である。３は全体に丸味を帯びており、稜は明瞭であるが変化が少ない。４はゆがみが多く不均一な形状を成すが、口縁部の一端を片口状に整形したものである。６は底部に特徴があり、微妙に



第８図　第１号住居址実測図〔Ｋ－１住〕（１：80）



第９図　第１号住居址出土遺物実測図（１：４）



第10図　第１号住居址出土遺物実測図（１：２）

稜がみられる。整形及び調整は、ヘラ削りの後ナデの行なわれているものがほとんどであり、特に１と２は顕著である。坏全体から見ると、器形変化が激しく同類として把握できない状態にある。９の大形埦は、手法は坏と同様であり、ヘラ削りの後ナデが行なわれ、器面に光沢がある。10～15は土師器の甕で、口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りが行なわれている。10は頸部に段をもち、11は頸部に横位のヘラ削りにより整形している。内面は全体にヘラナデ痕が顕著である。甕はカマドと南壁のやや東側から集中して出土している。16は須恵器の甕で、受口状の口縁となる。17は甑で、黄褐色を呈し、胎土は極めてよく精選されている。底部に2.9cmの穴が開いている。

本址より砥石が２点出土し、そのうちの１点は19の砂岩製、もう１点は20の凝灰岩製である。いずれも激しく使用され、舟底状にくぼんでいる。18は滑石製臼玉で直径1.9cm、厚さ0.9cmと大形で、作りが荒く、望月町の瓜生坂祭祀遺跡出土の臼玉と極めて良く近似している。22は瑪瑙製の玉で、2.8×2.2cm、厚さ1.4cmを測り、全体が丁寧に研磨され光拓がある。石質も良好である。本資料は穿孔前と思われる。21はカマド手前から出土した鉄製品であるが、形態等不明である。

第4表　第1号住居址ピット・貯蔵穴計測表

(cm)

規模＼PitNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
長径・短径	80・80	38・43	42・36	25・34	45・42	5.0・50	34・45	35・74	20・19	24・27	77・71	70・60	55・57
深さ	12	21	26	8	26	22	19	26	15	15	30	34	34

規模＼PitNo.	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26
長径・短径	29・25	51・55	76・58	40・31	38・38	27・27	20・21	18・14	33・34	26・27	28・28	14・13	37・30
深さ	24	11	33	17	21	31	31	23	21	23	14	10	9

規模＼PitNo.	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36	P37	P38	P39
長径・短径	22・23	43・32	28・28	16・16	30・22	67・68	25・24	42・47	28・30	36・36	29・38	24・25	28・32
深さ	6	12	8	5	9	15	23	7	20	17	4	8	9

規模＼PitNo.	P40	P41	P42	P43	P44	P45	P46	P47	P48	P49	P50	P51	P52
長径・短径	44・45	18・20	24・26	16・17	10・12	25・28	25・26	25・10	21・21	22・22	28・30	22・26	46・30
深さ	15	5	3	7	14	8	19	7	8	7	9	13	4

規模＼PitNo.	P53	P54	P55	P56	P57	P58	P59	P60	P61	P62	P63	P64	P65
長径・短径	24・30	26・26	27・21	14・10	11・12	11・11	24・22	16・16	27・23	22・30	26・16	15・18	16・16
深さ	19	17	6	4	9	21	15	17	23	18	6	6	10

規模＼PitNo.	P66	P67	P68	P69	P70	P71	P72	P73	P74	P75	P76	P77	P78
長径・短径	23・25	19・18	48・36	45・35	29・29	33・25	24・25	22・32	29・28	30・30	50・51	23・20	36・27
深さ	7	7	10	14	14	6	8	12	19	12	17	6	30

規模＼PitNo.	P79	P80	P81	P82	P83	P84	P85	P86	貯蔵穴
長径・短径	38・30	20・20	28・28	49・49	76・43	50・34	28・29	24・22	129・98
深さ	12	6	11	32	19	9	7	7	25

第5表　第1号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
9－1	(土)坏	10.8 10.0 ——	椀の深い形態を成す。頸部から口縁部は弓状に外反する。底部は丸底で球胴形を成す。	口縁：ヘラ削りの後ヘラ磨き　胴部：ヘラ削り 赤褐色と灰黒褐色	全面ヘラ削りの後ヘラ磨き。ヘラ調整が丁寧。 暗茶褐色	丸底。全体に球胴形。 磨耗がややあり。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6～1.0
9－2	(土)坏	12.0 7.0 ——	口縁がやや内湾し、胴部から底部にかけて皿状にゆるやかに丸味を帯びる。	口縁：ヘラ磨き　底部：ヘラ削りと一部磨き 口縁は赤褐色　他黒褐色	口縁：ヘラ磨き　底部：ヘラ削りの後ヘラ磨き 茶褐色	丸底。椀形を呈し、皿状にカーブを描く。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6～0.9
9－3	(須)坏	14.5 5.2 ——	口縁が外反する。口縁部と底部の割り合いが同比率。	口縁：ヘラ磨き　他はヘラ削りの後ヘラ磨き 黄褐色	全面ヘラ削りの後ヘラ磨き 黒黄褐色	欠損しているが丸底になるものである。	焼成：生焼け 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.8
9－4	(土)坏	14.1 —— ——	全体に器形がゆがんでいる。口縁部は外反。片口に使用したと思われる。	口縁：ハケ状痕がみられる。底部：ヘラ削り 黒褐色	口縁：ハケ状痕がみられる　底部：ヘラ磨き 茶褐色	丸底　ゆるやかな丸味を帯びている。	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入 0.4~0.7
9－5	(土)坏	13.4 5.5 ——	口縁部は外反。ゆるやかな丸味を呈す。全体にゆがみがある。口縁ロクロ整形痕顕著。	口縁：横ナデ　底部：ヘラ削り　整形が荒い 黒褐色	口縁：横ナデ、底部：ヘラ削りの後ナデを行なっている。黒褐色	一部欠損しているが、ゆるい丸底を呈す。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.7

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
9－6	(土)坏	13.6 4.3 ——	口縁は直立ぎみであるが僅かに外反。他に比べ浅い。口縁の方が比率は大きい。	口縁：ヘラ磨き。底部：ヘラ削り。 赤褐色。	口縁：ヘラ磨き。底部：ヘラ磨き。部分的に削り痕強く残す。赤褐色。	一部欠損しているが、ゆるい丸底を呈す。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.6
9－7	(土)坏	15.7 —— ——	口縁はかなり外反する。浅く偏平な器形。	口縁：横ナデ。底部：ヘラ磨き。 黒褐色	口縁：横ナデ。底部：横ナデ 黒褐色	底部を欠損するが丸底になるものである。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
9－8	(土)坏	10.4 6.7 ——	口縁は弓状に外反しながら全体には内湾する。口縁直径からみて深い比率を示す。	口縁：横ナデ。底部：ヘラ削り 赤褐色	口縁：横ナデ。底部：ナデ 赤褐色	丸底で、球胴形に近い。 赤褐色	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5～0.7
9－9	(土)椀	18.7 (10.0) ——	1～8の坏と近似する大形品口縁はほぼ直立するが、やや内湾ぎみ。欠損部が多い。	口縁：横ナデ。底部：ヘラ削りの後ヘラ磨き 黒褐色部分が多い。	口縁：横ナデ後ヘラ調整 底部：ヘラ削り。 茶褐色。黄褐色部分有り。	欠損しているが丸底になるものである。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.8～0.9
9－10	(土)甕	14.7 25.2 6.8	口縁は直線状に外反。胴部は余り脹らまず底部に至り、縦長状の器形を呈す。	口縁：横ナデ。胴部：右下りのヘラ削り 黒褐色	口縁：横ナデ。胴部：横ナデを基本とする。 黒褐色	平底で、外面はヘラ削り整形	焼成：やや不良 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.7
9－11	(土)甕	16.1 —— ——	口縁はゆるやかな曲線を描きながら外反する。胴上半から下半部欠損。	口縁・頸部：横ナデ。胴部：右下りのヘラ削り 赤褐色と黒褐色部有り。	口縁：横ナデ。頸部：ヘラ削り。胴部：ヘラ削りとナデ。赤褐色	欠損しているが平底になるものである。	焼成：やや良好 胴土：砂粒混入 器厚：0.8
9－12	(土)甕	11.7 —— ——	口縁は「く」の字状に外反。胴部はゆるい脹みを成す。底部欠損	口縁・胴部：横ナデ 赤褐色であるが黒褐色部が目立つ。	口縁・胴部：横ナデ。 赤褐色であるが黒褐色部が目立つ。	欠損しているが平底になるものである。	焼成：良好 胴土：砂粒混入 器厚：0.6
9－13	(土)甕	14.1 —— ——	口縁は「く」の字状に外反。胴部は脹らみを成すものだが大部分が欠損している。	全体が横ナデ整形が行なわれている。 赤褐色	全体に横ナデ整形が行なわれている。 赤褐色	欠損しているが平底になるものである。	焼成：良好 胎土：小石・砂粒混入　0.8
9－14	(土)甕	18.6 —— ——	口縁部の破片。「く」の字状に外反。口唇が尖りぎみ	横ナデ整形 赤褐色	横ナデ整形 赤褐色	欠損しているが平底になるものである。	焼成：良好 胎土：小石・砂粒混入　0.7
9－15	(土)甕	—— —— 5.1	胴上半は欠損。胴部は脹らみの少ない器形と思われる。底部は肥厚している。	胴部・底部：横ナデ整形 痕顕著。 茶褐色	胴部・底部：横ナデ整形 痕顕著。 茶褐色	平底　内部は平坦にはならない	焼成：やや不良 胴土：砂粒混入 器厚：0.9～1.4
9－16	(須)甕	34.3 —— ——	口縁部以外は欠損。口唇が肥厚し、かなり外反する。	外面に比べると整形は荒いが丁寧 青灰色	外面に比べると整形は荒いが丁寧。 青灰色	欠損	焼成：良好 胴土：精選 器厚：0.6
9－17	(土)甑	—— —— 6.2	底部穿孔の甑。胴部上半部欠損。	ヘラ削りの後ナデを行なっており器面はなめらか。 黄褐色	ヘラ削りの後ナデを行なっており器面は滑らか。 黄褐色	中央部に直径2.8cmの穿孔。	焼成：やや不良 胎土：精選 器厚：0.7

2、第4号住居址（第11図、図版八）

本住居址は、調査区中央部東側で検出され、第1号住居址の東550cmの所に位置する。検出面は、水田床面直下である。水田造成の影響と思われるが、壁はほとんど破壊され、微妙な痕跡が残るだけであり、僅かな土質の違いと床面の存在により確認することができた。

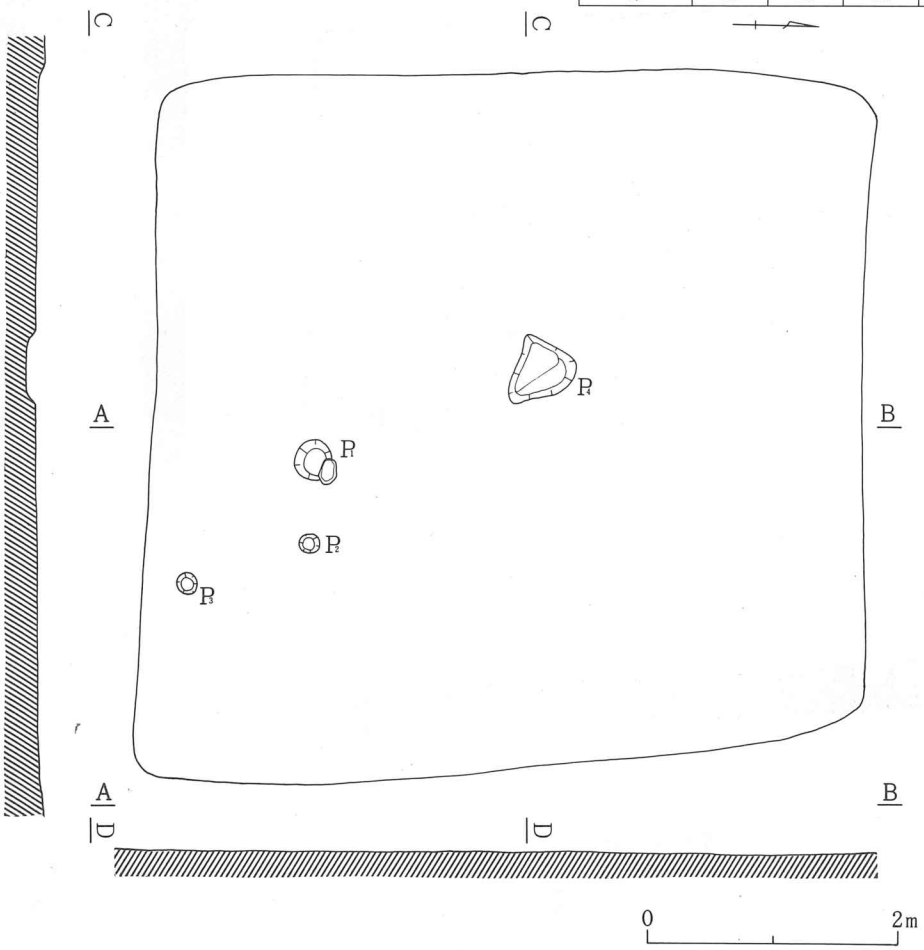
平面形態は、東西550m、南北562cmでややゆがみをもつが、隅丸方形を呈し、主軸はN－90°－Eを示す。床面は破壊部分が多く軟弱であったが、固い部分も僅かに残っていた。柱穴は4基で最も深いものはP_2の13cmであり、規模からするとP_4の58cm×52cmが中でも大きい。カマドはすでに破壊され痕跡すらもみられなかったが、所々に小規模な焼土が点在していた。

主軸方位や規模からみて、本址は第1号住居址と同様古墳時代に比定できるものである。

遺物は、僅かに出土しているが、本址の状況からして取り扱わなかった。

規模＼pit・No.	P_1	P_2	P_3	P_4
長径・短径	30・32	10・15	16・16	58・52
深	11	13	10	8

(cm)



第11図　第4号住居址実測図〔H－4住〕（1：60）

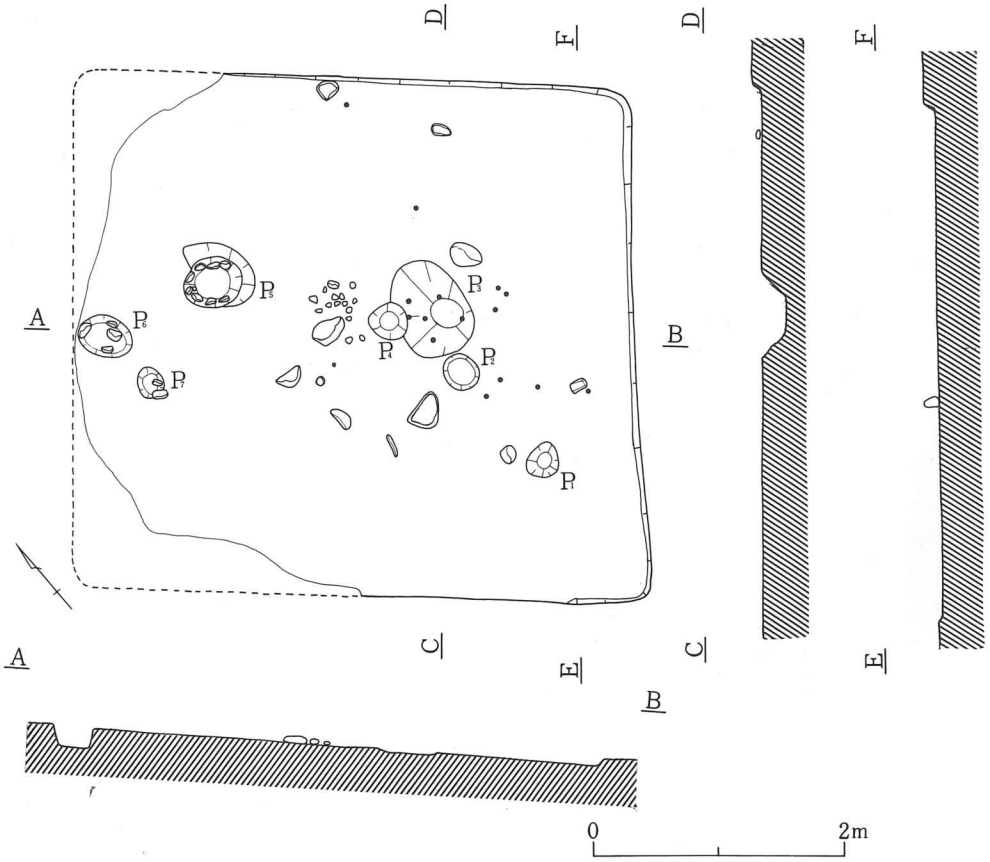
第３節　平安時代の遺構と遺物

１、第２号住居址

遺構（第12図・図版六）

本住居址は、調査区中央部に位置し、水田床面下部より検出された。第１・３・15号住居址と複合関係をもち、第１号住居址上に貼床をし、第３・15号住居址には切られていたため、１住→２住→15住→３住という新旧関係が成り立つ。

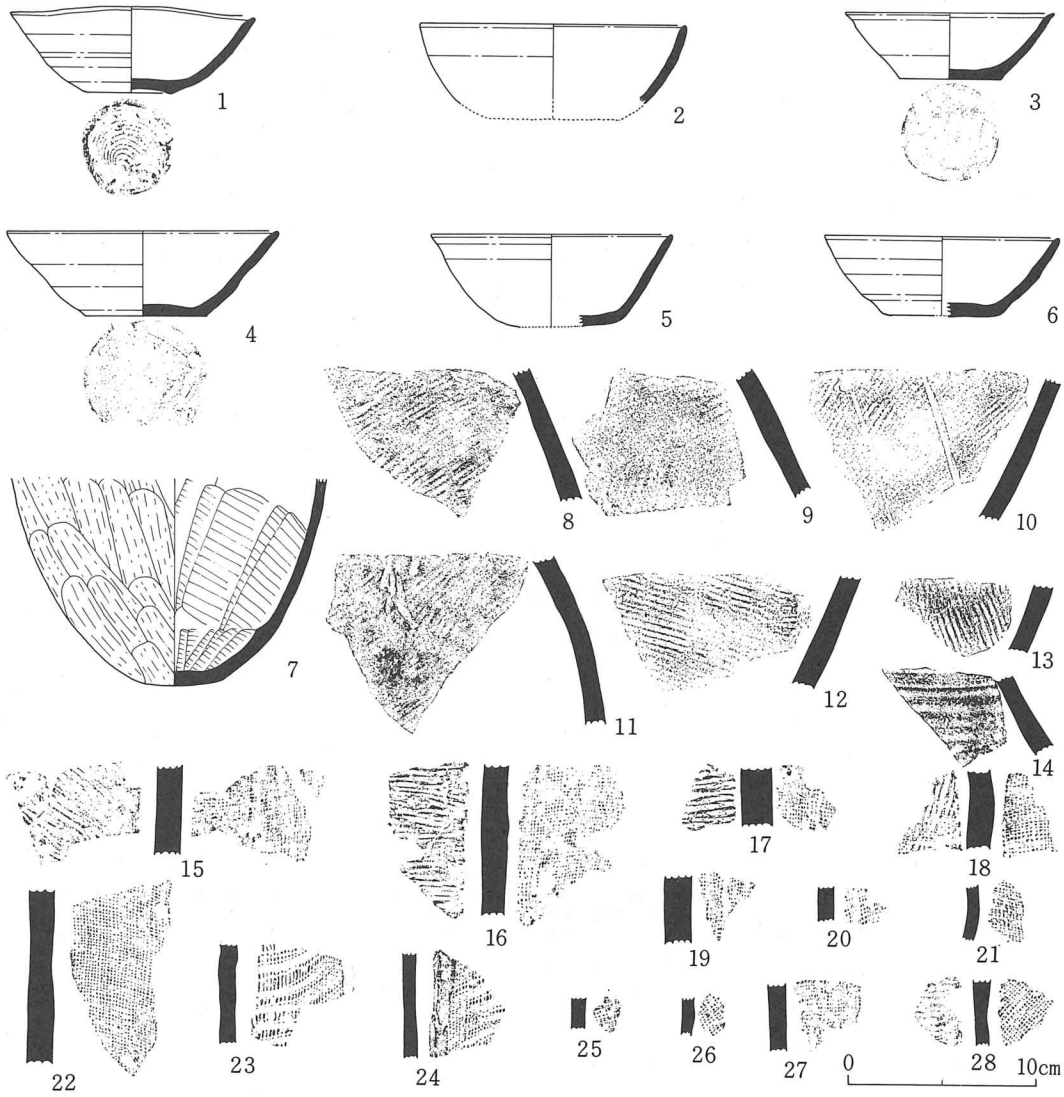
平面形態は、推定の域を出ないが東南―北西が446cm、北東―南西が410cmで、隅丸長方形を成していたものと思われる。主軸は、カマドを中心にＮ－30°－Ｅを示している。壁は、プランの北東部と南東部に残るだけであり、最大７cmである。カマドは、東南壁のやや南寄りに構築され、



第12図　第２号住居址実測図〔Ｈ－２住〕（１：60）

（cm）

規模 ＼ pit・No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長径・短径	26・28	27・30	58・79	30・30	56・55	42・34	26・20
深	11	11	23	18	23	16	9



第13図　第２号住居址出土遺物実測図（１：４）

塼をカマドに合った大きさに加工して袖にし、粘土により補強していた。しかしかなりの破壊を受け、形態を止めない程になっていたため規模等を詳細に知ることはできなかったが、主軸部で60cm、幅40～50cm程とみられる。焚口部は舟底状に小規模なくぼみがあり、焼土と僅かな炭が認められた。床面は一部破壊されている部分が存在するものの、全体にタタキが成されたように固く良好な状態であった。ピットは７基検出されているが、乱立的で規則性が認められなかった。P_3、P_5、P_6は中でも大きく、またP_5～P_7には小礫が詰め石として存在しているのが確認された。プラン中央部よりややカマド寄りの所に、貯蔵穴とも考えられる土壙が検出されており、80×60cm、深さ40cmを有し、内部には土師器・須恵器の坏、甕や布目瓦が出土している。土壙の北

西側には、小礫の密集している箇所があり、本址のなんらかの施設であったと思われる。

遺物（第13図、図版六）

本住居址からは、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、有目瓦が出土している。土師器に比べ須恵器の割り合いが高い。１と２が土師器の坏で内面黒色研磨が成されていて糸切り底である。２～６は須恵器の坏で、３・４は底部ヘラ削りが行なわれている。５～７は糸切り底である。７は土師器の甕で、器面はヘラ削り痕が顕著で、底部もやはりヘラ削りによりやや丸味を帯びている。内面は、ヘラナデ調整が行なわれている。８～14は須恵器の大形甕の破片でカマド内及び周辺部に散乱しており、同一個体の破片が幾つか見られた。15～28は布目瓦の破片である。青灰色で須恵質に近いものと、茶褐色ないし赤褐色を呈する厚手の２種がみられた。いずれも土壙内部及びカマド周辺部より出土している。

第６表　第２号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整			焼成・胎土他
				外面	内面	底部	
13－1	(土)坏	13.0 4.5 4.5	両側から押されて器形が変形している。口縁が平坦でない。口縁は内湾ぎみに大きく外反。	ロクロ水引き痕顕著 茶褐色	黒色研磨。平かつであるが底部が盛り上がる。	糸切り底 底部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.6
13－2	(土)坏	14.1 —— ——	口縁から胴部は、丸みを帯びながらゆるやかに内湾する。胴部下半欠損。	比較的滑らか。 赤褐色であるが、黒褐色の部分あり。	黒色研磨。	欠損	焼成：良好 胎土：砂粒多量に混入　0.5
13－3	(須)坏	11.1 3.5 5.8	小形で極めて薄い。胴部はゆるやかに内湾しながら展開する。口唇は外に尖って突き出す。	ロクロ整形の後器面を平かつに調整。青灰色 （ロクロ右回転）	器面調整により滑らか。 青灰色	丁寧なヘラ削りで平ら。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.6
13－4	(須)坏	14.4 4.5 6.4	口縁はほぼ直線状に大きく外反。口唇は丸みを帯びる。	ロクロ整形の後器面を調整。青灰色 （ロクロ右回転）	器面滑らか。 青灰色	ヘラ削り底	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5～0.7
13－5	(須)坏	12.7 5.0 5.4	非対称の器形で、口縁は直線状に外反する。 底部の一部欠損。	口縁付近にロクロ水引き痕が顕著。青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ水引き痕が部分的に残る。 青灰色	糸切り底	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5～0.6
13－6	(須)坏	12.5 4.2 5.8	内湾ぎみに丸みを帯び、平均的な外反を呈している。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著 青灰色	糸切り底。底部付近がやや段状にくびれる。	焼成：良好 胎土：小石多量に混入　0.5-0.7
13－7	(土)甕	—— —— 4.3	胴上半部欠損。なめらかな脹みをもち、丸底ぎみの底部になる。	右下りのヘラ削りで削り幅が広い。 赤褐色	横位のヘラ削り痕顕著 底部付近に段がつく。 赤褐色	丸底ぎみの平底で、ヘラ削りが行なわれている。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.8
13－8～14	(須)甕		破片				
13－15～28	布目瓦		破片				

２、第３号住居址

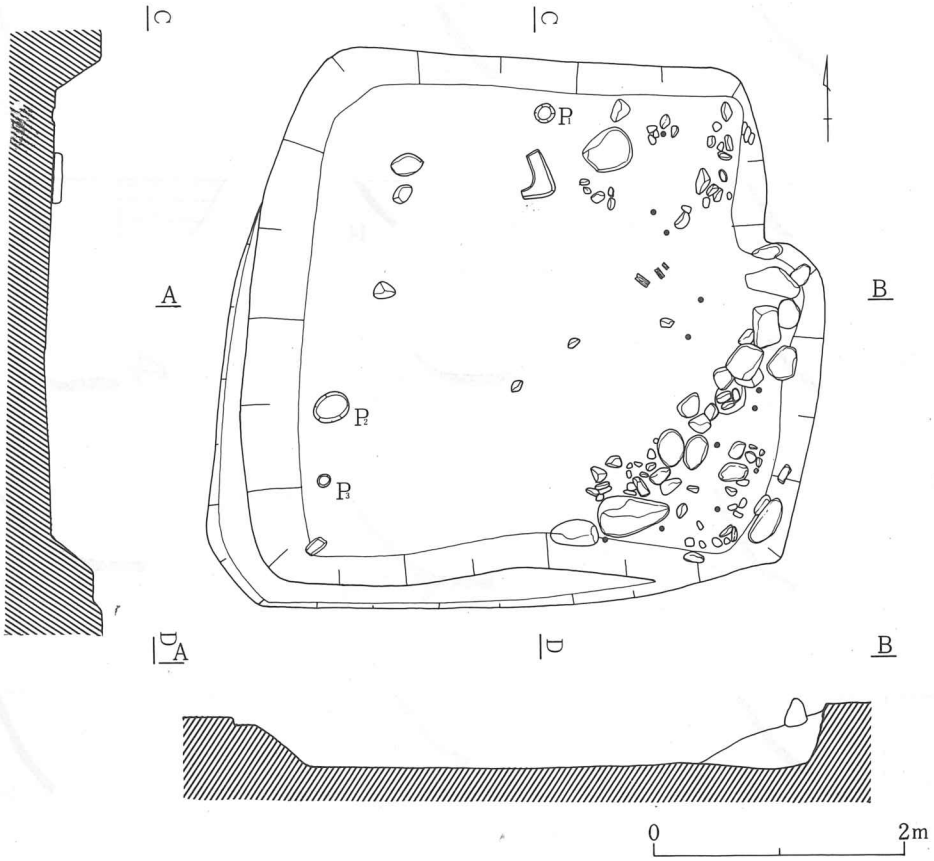
遺構（第14図、図版七）

本住居址は、調査区のほぼ中央部に位置し、水田床面下部において検出された。第２・15号住居址と複合関係があり、双方の住居址を切って構築されているため、新旧関係は、１住→２住→15住→３住と確認された。

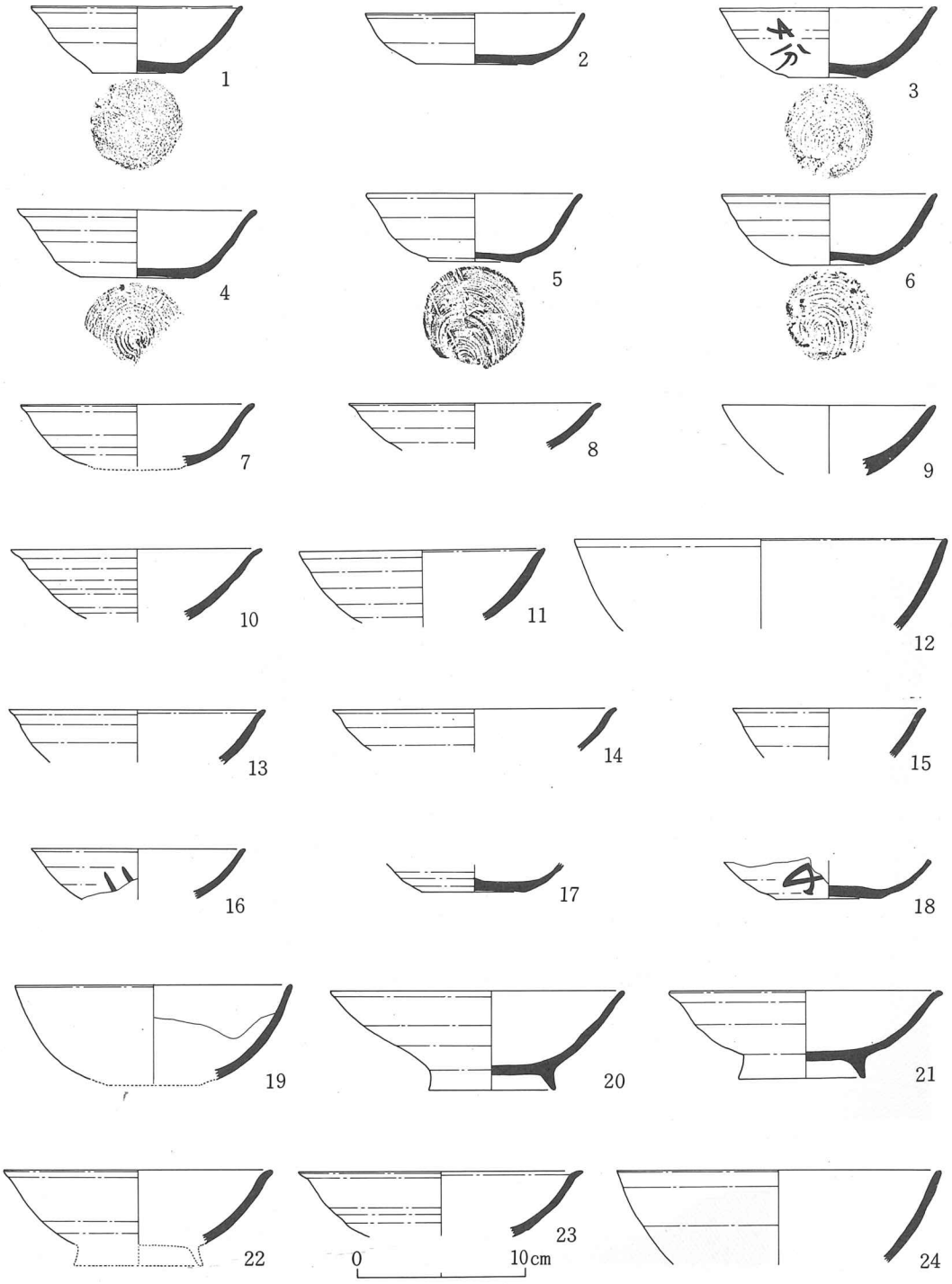
平面形態は、東西478cm、南北433cmで、東西にやや長い隅丸長方形を呈しているが、東側のカマドから北東コーナーにかかるプランの一部が、内側に入り込んでおり、変則的な傾向を示している。また、プランの南側と西側は、住居の建て替えかないし別の住居址の壁かとも思われる張り出しをしている箇所が存在していたが、本住居址の壁に吸収され、しかも他の箇所には張り出さず、さらに貼り床ないし、床面が掘り込み段階では検出されなかったため、第３号住居址の建て替えの結果、建て替え以前の住居址が一部残ったのではないかと思われる。主軸方向は、N－93°－Eを示し、ほぼ方位に沿って本住居址が構築されていた。壁高は43cmで、岩清水遺跡の中では最も深い住居址である。壁はローム層を切っていたため、タタキをした感はないが比較的良く締っており、特に南壁は良好であった。床面は、南東コーナーの礫集中箇所と南西コーナーから西壁の中央部は、軟弱であったが、他の箇所は石の床のように極めて固く締っていた。カマドは、東壁中央部よりやや北側に位置し、主軸が100cm、幅が90cmと規模が大きく、床から壁の上部にかけて袖に河原石を小口状に立て、粘土で補強していた。焚口部は、舟底状にくぼんで

規模＼pit・No.	P1	P2	P3
長径・短径	17・16	30・22	10・9
深	9	13	15

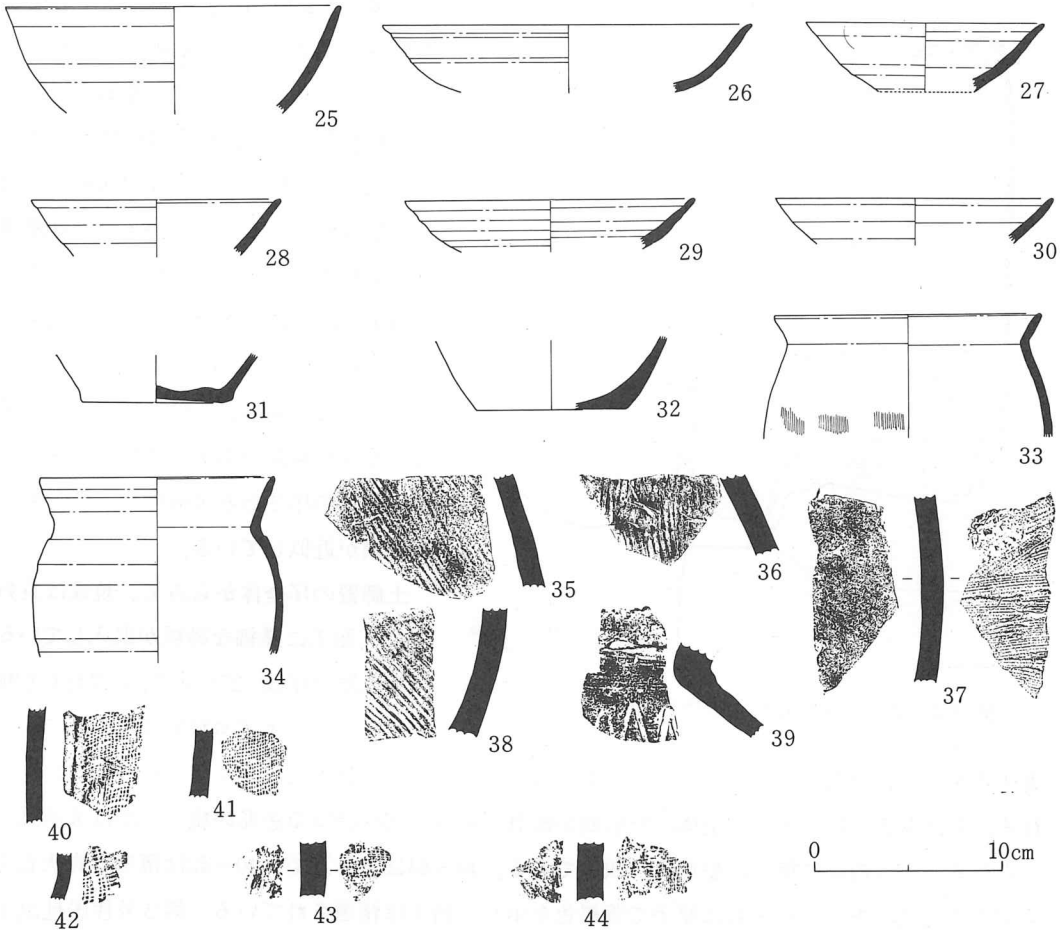
(cm)



第14図　第３号住居址実測図〔H－３住〕（１：60）



第15図　第３号住居址出土遺物実測図（１：４）



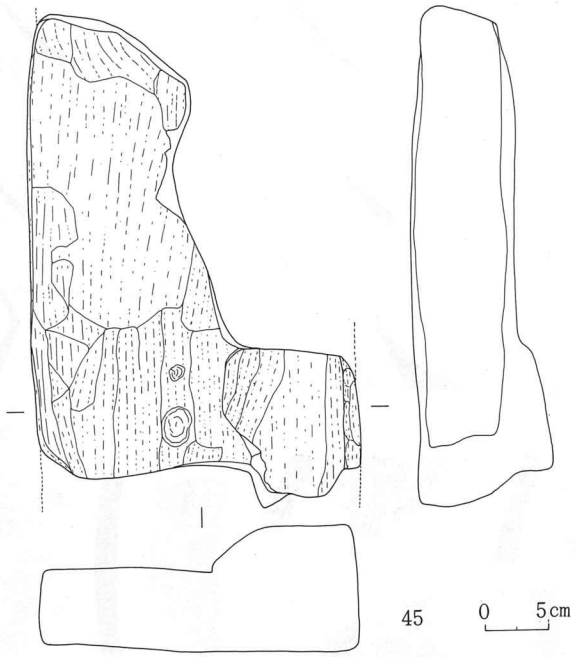
第16図　第３号住居址出土遺物実測図（１：４）

おり、多量の焼土と炭が堆積していた。カマド内部はあまり焼けておらず、焼土も少なかった。南東コーナーには、カマドから続けて人頭大や拳大の礫が多数存在しており、その箇所のレベルが全体に低い状態であった。さらに、北東コーナーにも大礫を混え、小礫が主体に存在していた。ピットは、３基検出され、いずれも小規模である。

遺物（第15・16・17図、図版七・八）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・高台付坏・甕、須恵器の坏・甕、布目瓦、塼があり、遺物総数はかなり多い。全体に須恵器の量に比較して土師器の方が圧倒的に多い。

１～26は土師器の坏で、底部に糸切りの確認ができるのは、３・５・６・18・20・21、ヘラ削り痕の認められるのは、１、また、ヘラ起こしの手法が認められるのは、４・17である。糸切りの後ヘラ削り痕を残すものは、２である。その他は底部手法を見ることはできない。いずれも９世紀初頭の資料であるが、ヘラ起こし底やヘラ削り底など８世紀の手法を多く残しており、８世紀



第17図　第３号住居址出土遺物実測図（１：６）

との接点的な時期の住居址と考えられる。土師器の坏は、ロクロ回転が右方向になるものが多く、またロクロ整形痕の顕著な資料が多い。内部整形は全体に丁寧に成され、11と12を除いては内面黒色研磨が行なわれている。３・16・18には墨書が描かれており、３は「分」と読めるが他の１字は判読できない。16・18も判読できないが、18は「千」のようにも見える。

20～22は足高高台の付く坏で、本住居址に伴うか疑問である。また、23～25も足高高台の坏である可能性があり、胎土や色調が近似している。

土師器の坏全体からみて、焼成は良好であり、胎土に微細な砂粒が混入している。

須恵器の坏は、27～30で、いずれも欠損資料である。ロクロ整形痕が顕著であり、青灰色を示し、焼成は良い。31～34は土師器の甕で、33はハケ状工具によるナデ痕が僅かに見られる。34は頸部に段があり、全体に整形痕が顕著である。35～39は須恵器の甕で、39は波状文がみられる。37は内部に横位の整形痕が顕著である。40～44は布目瓦で、40～42は薄手で青灰色を呈する須恵質であり、43～44は厚手で黄褐色を示し、胎土は精選されている。第２号住居址出土の布目瓦と非常によく近似しており、双方ともいずれかの流れ込みと考えられる。

45は、床面上より出土した塼であり、分類は長方塼（条塼）である。現存部で、39.5×26cm、厚さ6.5×10cmを測る。短径箇所は現存部で確定できるが、長径箇所は両端が欠損しているため推定の域を出ず、40～45cmになると思われる。表裏面及び側面は、ヘラ状工具によるナデ整形が行なわれている。胎土には、小石・砂粒などの夾雑物が多量に混入しており、全体に赤褐色から茶褐色を呈している。本資料は、焼成したのか、二次的に焼けたのか判断がつかない。

第７表　第３号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
15－1	(土)坏	12.5 4.0 5.3	口縁直下が括れ、胴部がやや脹らむ器形で、底部から大きく外反する。	ロクロ整形痕顕著。 茶褐色。 （ロクロ右回転）	外面に比べなめらか。 内面黒色研磨	ヘラ削り底 中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.3～0.6
15－2	(土)坏	13.0 3.0 7.0	口縁直径に対してかなり浅い皿状を呈する。立ち上りは内湾しながら外反する。	全体に丁寧な整形でロクロ痕がみられない。 茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨で全体に平滑	糸切りの後ヘラ削り。胴部に比べ厚い。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.3～0.5

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	内面	底部	焼成・胎土他
15－3	(土) 坏	12.8 4.1 4.6	口縁に対して内湾しながら展開する。底部が小さい。 墨書土器。	胴部中央にロクロ整形痕が顕著。赤褐色。 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。胴部中央がやや内側に突出する。	中央部が弓状に盛り上がる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.8
15－4	(土) 坏	14.1 4.0 6.8	口唇が丸味を帯び、口縁が「く」の字状に外反する。	ロクロ整形痕が顕著でやや凸凹が激しい。赤褐色 （ロクロ右回転）	滑らかに調整してある。 内面黒色研磨	ヘラ起しの後平滑に調整。中央がやや薄くなる。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.3～0.5
15－5	(土) 坏	12.8 4.0 5.4	底部周囲が段状に変化。胴下部が脹らみ、口縁まで湾曲しながら展開する。	ロクロ整形痕顕著。 赤褐色 （ロクロ右回転）	滑らかに調整してある。 内面黒色研磨	糸切り底 中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.3～0.5
15－6	(土) 坏	12.7 4.2 5.0	胴下半部が脹らみ、口縁までは湾曲しながら展開する。	胴中央部までロクロ整形痕顕著。赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	中央部が盛り上がる。 糸切り底	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5～0.6
15－7	(土) 坏	13.8 3.9 ——	口縁が外反する。	ロクロ整形痕顕著 赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.3～0.6
15－8	(土) 坏	14.9 —— ——	浅い器形になると思われる。口唇直下に強い括れが一周する。	比較的平滑 茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.3～0.5
15－9	(土) 坏	12.6 —— ——	小形で、椀状に口縁まで内湾しながら傾斜する。	滑らかに調整されている。 赤褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5～1.0
15－10	(土) 坏	14.8 —— ——	口縁が「く」の字状に外反。	ロクロ整形痕顕著 赤褐色 （ロクロ左回転）	内面黒色研磨	不明	焼成：良好 胎土：小石・砂粒混入 0.3~0.5
15－11	(土) 坏	11.6 —— ——	内湾しながら口縁に至る。口縁部はやや外反する。	滑かに調整されている。 黄褐色 （ロクロ回転不明）	外面と同様に滑らかに調整されている。 黄褐色	不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
15－12	(土) 坏	22.0 —— ——	極めて大形の坏で、椀形を呈する。	滑かに調整されている。 茶褐色 （ロクロ回転不明）	滑かに調整されている。 赤褐色	不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
15－13	(土) 坏	15.2 —— ——	口縁部がやや薄く外反する。	ロクロ整形痕が残る。 黄褐色 （ロクロ回転不明）	滑らかに調整されている。 黄褐色	不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.5
15－14	(土) 坏	16.8 —— ——	口縁直径は比較的大きいが、浅目の坏になると思われる。口縁がやや外反する。	ロクロ整形痕が残る。 赤褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
15－15	(土) 坏	11.4 —— ——	小形の坏でほぼ直線的に外反する。	口縁下部にロクロ整形痕が残る。暗茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
15－16	(土) 坏	12.7 —— ——	内湾しながら展開する坏。判読不明の墨書がある。	丁寧に調整されている。 黄褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
15－17	(土) 坏	—— —— 6.1	底部のみ残存。 湾曲ぎみに展開すると思われる。	ロクロ整形痕が残る。 黄褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	ヘラ起し底で、中央が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.4
15－18	(土) 坏	—— —— 6.2	底部と胴部の一部が残存。湾曲しながら展開すると思われる。判読不明の墨書がある。	ロクロ整形痕が残る。 茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	糸切り底。中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.6
15－19	(土) 坏	16.4 —— ——	全体に内湾する椀形を呈する坏。比較的深く推定5cm程の大形品。	ややざらつくが丁寧な調整。赤褐色 （ロクロ左回転）	口縁に近い部分に黒色研磨が成されており、他は赤褐色で磨きがみられる。	不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.6
15－20	(土) 坏	17.4 5.9 7.5	足高高台坏。ややゆがみがあり左右非対象。底部から口縁にかけて立ち上りが長い。	僅かにロクロ整形痕を残す。水引きのナデが顕著茶褐色（ロクロ左回転）	ややロクロ整形痕を残すが丁寧に調整されている。 内面黒色研磨	足高高台。糸切りの後付高台。高台はやや反る。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.6
15－21	(土) 坏	15.6 5.2 7.5	足高高台坏。胴下半に丸みをもち口縁が外反する。	ロクロ整形痕顕著。水引き調整が丁寧。暗茶褐色 （ロクロ左回転）	丁寧に調整 内面黒色研磨	糸切りの後付け高台。高台は外に反る。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.6

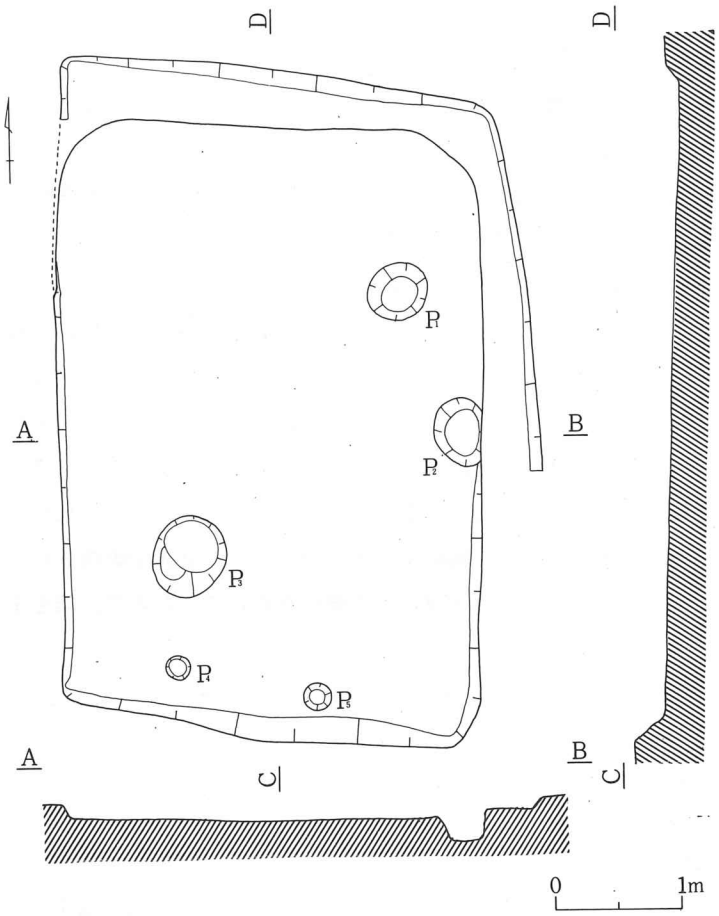
挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	内面	底部	焼成・胎土他
15－22	(土)坏	15.9 —— ——	底部は欠損しているが、足高高台坏になるかと思われる。口縁がやや外反する。	ロクロ整形痕はみられず丁寧に整形。茶褐色（ロクロ左回転）	口縁がやや肥厚して内側に脹るが全体に丁寧な調整。内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒少量混入 0.5
15－23	(土)坏	15.9 —— ——	足高高台坏の破片と思われる。胴部は丸味を帯びながら外反し、口縁もさらに外反する。	ロクロ整形痕顕著 赤褐色 （ロクロ回転不明）	丁寧な調整 内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
15－24	(土)坏	19.1 —— ——	口径が大きく、深い坏。椀状に立ち上がりが丸味を帯びる。	胴中央部に強いロクロ痕の凹が残る。暗茶褐色（ロクロ回転不明）	丁寧な調整。 内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
16－25	(土)坏	17.8 —— ——	24とほぼ同様の器形で、椀状に立ち上がり丸味を帯びる。非常に深い。	丁寧な調整 茶褐色 （ロクロ回転不明）	丁寧な調整。 内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入 0.4~0.5
16－26	(土)坏	19.6 —— ——	比較的浅いが、足高高台坏と思われる。口径が大きく、胴部から口縁への外反が強い。	口縁と胴部にロクロ整形痕顕著　赤褐色 （ロクロ回転不明）	丁寧な調整。 内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石・砂粒混入 0.4~0.5
16－27	(須)坏	12.7 3.7 5.1	口縁がやや外反し、胴部は直線状に展開する。	胴中央部に段状のロクロ整形痕を残す。青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕が僅かに残る。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
16－28	(須)坏	13.3 —— ——	胴部から口縁にかけて直線状に展開する。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕顕著 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
16－29	(須)坏	15.4 —— ——	外反が強い破片 胴部が特に肥厚する。	ロクロ整形痕が極めて顕著　青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕顕著 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
16－30	(須)坏	14.8 —— ——	29と同様外反が強い。口唇は丸味を帯びる。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕顕著 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
16－31	(土)甕	—— —— 8.0	甕の底部のみの資料。底部より屈曲外反して立ち上がる。	横ナデ 赤褐色	ナデ調整 赤褐色	ヘラ削り底 内面は波状で凹凸が激しい。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
16－32	(土)甕	—— —— 8.2	甕の底部と僅かな立ち上がりを残す資料。胴部が張り出す器形になると思われる。	ヘラ削り整形が主体 表面はややザラッとしている。茶褐色	ナデ調整 茶褐色	底部の一部が残るのみ。ヘラ削り。中央部薄い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.3
16－33	(土)甕	14.3 —— ——	口縁が「く」の字状に外反し肩があまり張らず胴下半に脹らみをもつと思われる。	丁寧にナデ調整が行なわれ、胴部にはハケと思われる調整も残る。赤褐色	横位・斜位のナデ調整が行なわれている。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.4～0.7
16－34	(土)甕	12.5 —— ——	小形の甕で、口縁は直線状に外反し、胴部はかなり丸みをもつ。	頸部を一周するケズリが入り段状となる。全体にロクロ整形痕顕著　茶褐色	ロクロ整形痕がみられず調整丁寧。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5
16－35～39	(須)甕		破片				
16－40～44	布目瓦		破片				
17－45	塼	幅25.7 厚 6.4～9.8	長方形を成す長方塼。	ヘラによる調整痕が全体に残っている。			夾雑物が多量に混入し、胎土全体が荒い。

3、第5号住居址

遺構（第18図、図版八）

本住居址は、調査区中央部のやや南寄りに位置し、水田床面下部より検出された。この地点は砂や小礫が黄色ローム層中に多量に混入しており、沖積地的要素が濃い。住居址は単独で位置しているが、地山がやや北側に傾斜しているため、これに沿って構築されている。

平面形態は、東西338cm、南北531cmで、南北に長い隅丸長方形を成している。壁高は、最も深い南壁部で24cmを測り、北側に至るに従ってしだいに浅くなる。本住居址は、建て替えを行なったとみられ、北側から東側にかけて床と壁の一部が検出された。東側の中央部から南側にかけては、礫の集中がみられ、旧プランを確認することはできなかった。



第18図　第５号住居址実測図〔Ｈ－５住〕（１：60）

床面は地山の傾斜に沿ってやや北側に傾いており、中央部から南壁にかけて固い部分も見られたが全体に軟弱で、特に砂質部分が目立った。カマドは、東壁のほぼ中央部で検出されたが、すでに破壊されており、また、砂や礫の流れ込みが激しく、焼土の一端を知るのみであった。柱穴は５基検出され、比較的状況は良かった。

(cm)

規模 ＼ pit・No.	P1	P2	P3	P4	P5
長径・短径	48・45	38・53	58・64	20・20	23・20
深	16	19	19	11	6

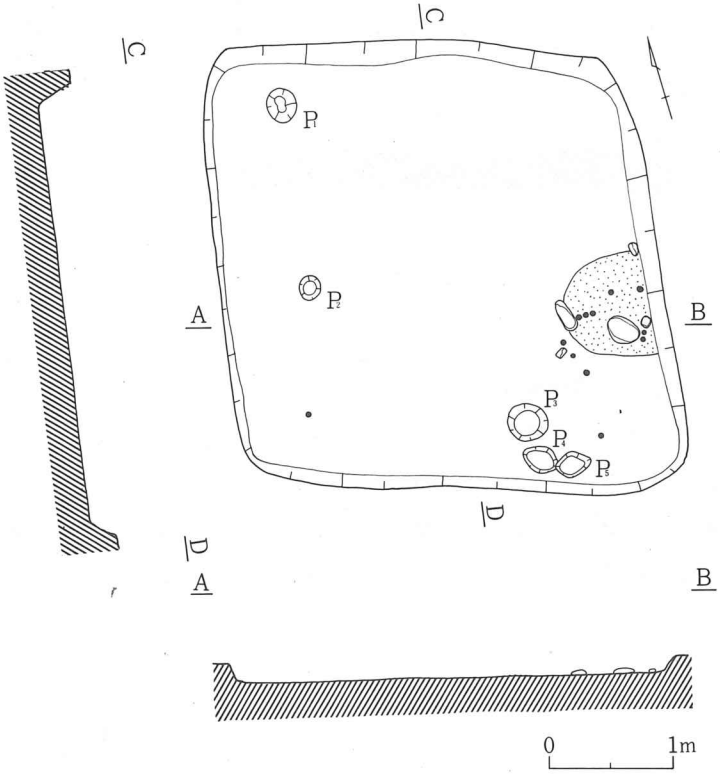
尚、本住居址からは、土師器の坏・甕、須恵器の坏が極く少量出土しているが、土砂や礫の流れ込みが激しいため、本址に伴うか疑問であったため、ここでは取り扱わなかった。

4、第6号住居址

遺構（第19図、図版八）

本住居址は、調査区中央部の西端に位置し、現状は畑になっていたが、水田造成されており、その床面下部より検出された。この地点は、ローム層が全く存在せず、耕作土の下部は大小の礫を混入した黒褐色土層が厚く堆積し、これを掘り込んで構築されていた。第8号住居址と複合関係をもっており、8住→6住の新旧関係が確認された。

平面形態は、東西350cm、南北355cmを測り、北壁部がやや短く、全体にゆがみ傾向の見られる不正方形を成していた。主軸方位は、カマドを中心にN－107°－Eであり、南東方向にやや傾むいていた。壁高は20cmを測り、全周ともほぼ平均していた。床面は、全体に小礫から拳大の礫が突出しており、これを埋めるように黒褐色土が礫間に存在し、また覆っている部分もみられたが、覆っている部分は、固く締っており良好であった。壁もやはり礫が激しく突出しており、礫部分を除けば軟弱な状態であり、崩れ易くもあった。カマドは、東壁中央部よりやや南寄りに位置していた。主軸部で75cm、幅82cmを測るが、すでに全体が破壊されており、袖等の痕跡もなかった。カマドの袖に使用されたと思われる礫が存在していたので、礫を主体に粘土で補強するという構造を成していたかと思われる。内部は焼土と僅かな炭が堆積していた。柱穴は、5基検出されたが規則性がなかった。P_3～P_5は、カマド南側に集中しており、柱の付け替えを成したものと思われる。



(cm)

規模 ＼ pit・No.	P_1	P_2
長径・短径	25・28	17・20
深	13	20

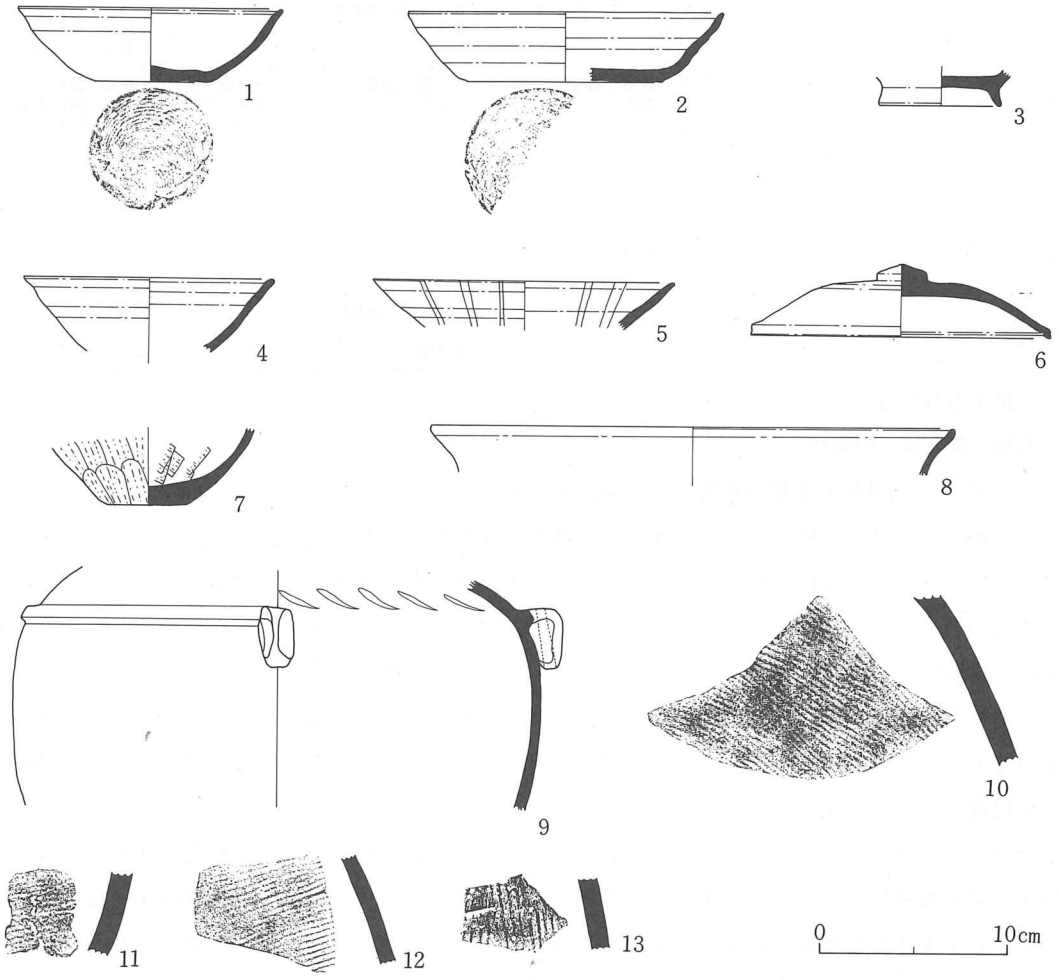
P_3	P_4	P_5
34・30	30・20	30・18
6	8	7

第19図　第6号住居址実測図〔H－6住〕（1：60）

遺物（第20図、図版八）

本住居址からは、土師器の坏・甕、須恵器の坏・坏蓋・甕・四耳壺が出土しており、出土地点は、カマドの南側に多く集中していた。

１～３は土師器の坏で、いずれも糸切り底で、３は付け高台である。ロクロ水引き痕が顕著で、整形は丁寧に成されている。焼成は良好で、胎土に砂粒が混入している。４～５は須恵器の坏身、６は坏蓋である。青灰色を呈し焼成良好の資料で、５には火襷が内外面にみられる。蓋は、つまみが扁平な烏帽子形を成し、口縁部にかえしが見られる。７・８は土師器の甕であり、７はヘラ削り底が顕著であり、８は横ナデ整形がみられる。９は四耳壺で、肩から胴上半までの資料である。肩部に隆帯が一周し、この隆帯にかけて縦状に耳状の粘土が貼付されており、ここに貫通孔が見られる。内部には爪形状に整形痕がみられる。全体に青灰色を呈し、器厚0.4cmで、胎土に砂粒を混入し、焼成良好である。10～13は須恵器の甕で、タタキ目がみられる。



第20図　第６号住居址出土遺物実測図（１：４）

第８表　第６号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
20－1	(土)坏	14.1 4.0 6.0	内湾しながら外へ展開する器形で、口縁は外反する。	ロクロ整形痕顕著 口縁にスス付着　赤褐色 （ロクロ右回転）	丁寧な調整が行なわれている。赤褐色	糸切り底 器面に比べ底部は肥厚する。	焼成：良好 胎土：小石・砂粒混入 0.4~0.8
20－2	(土)坏	16.7 3.7 10.2	大形の坏であるが、浅い坏で底径も大きい。胴部から口縁は直線状に外反する。	ロクロ整形痕が顕著で器面に凹凸が多い。茶褐色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕が顕著。厚さに群がある。 茶褐色	糸切り痕 器面に比べやや厚い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.7
20－3	(土)坏	—— —— 6.5	足高高台の坏の高台部資料。やや外反する。	付け高台時の整形顕著 赤褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	糸切りの後付け高台	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
20－4	(須)坏	13.3 —— ——	小形の坏で、口縁が外反する。	ロクロ整形痕顕著 暗青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著 暗青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石・砂粒混入　0.3
20－5	(須)坏	16.1 —— ——	直線状に口縁まで展開する坏の破片。深さは４cm以上になると思われる。	ロクロ整形痕顕著 火襷痕が明瞭　黄褐色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著 火襷痕が明瞭 黄褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
20－6	(須)蓋	—— 3.9 15.9	ゆがみがあるがほぼ完形。蓋鈕がやや山形になる。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著 青灰色		焼成：良好 胎土：砂粒多量 混入 0.4 鈕1.7
20－7	(土)甕	—— —— 4.3	底部と胴下半が僅かに残る資料。	ヘラ削り顕著 茶褐色	ヘラ削り顕著 茶褐色	ヘラ削り底 胴部に比べかなり厚い。	焼成：良好 胎土：砂粒多量 混入　0.4～1.1
20－8	(土)甕	27.8 —— ——	極めて大形の甕の口縁部であるが器厚は薄い。	横ナデが見られる。 茶褐色	ヘラ削り顕著 茶褐色	欠損して不明	焼成：やや不良 胎土：砂粒多量 混入　0.4
20－9	(須)四耳壺	—— —— ——	四耳壺の肩部のかなり大きい破片。	肩部に隆帯が一周し、穿孔する耳が貼付。 青灰色	口縁ヨコナデがみられる。 茶褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
20－10～13	(須)甕		破片		三ヶ月形の調整痕がみられる。 青灰色		

５、第７号住居址

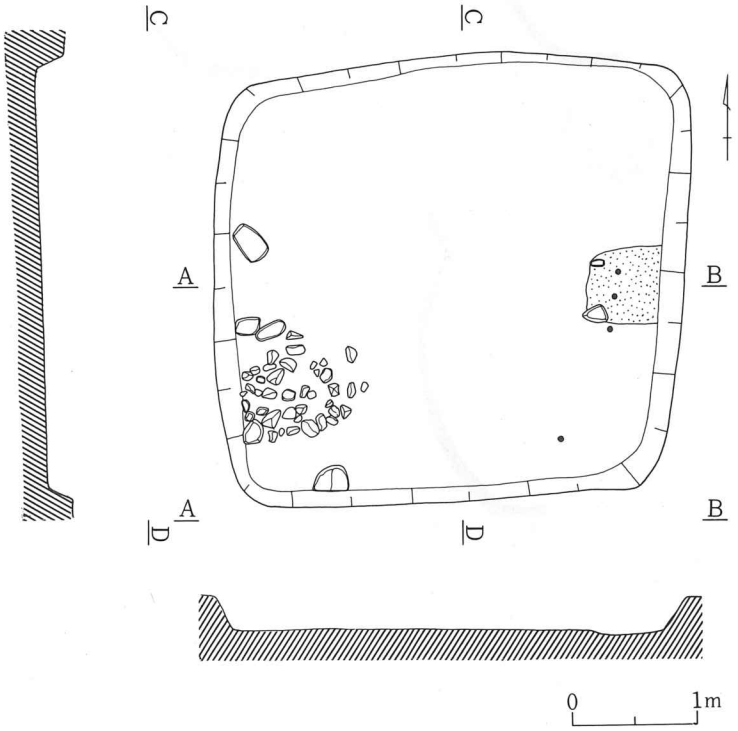
遺構（第21図、図版九）

本住居址は、調査区北部の西側の河岸線に近い所に位置し、現状は畑であったがかつて造成された水田の床下部より検出された。層位は、第１層が耕作土で第２層目から地山となるが、第６・８号住居址付近と同様に小礫から拳大、中には人頭大の礫が黒褐色土中に多量に混入しており、この地山を掘り込んで本住居址が構築されていた。この付近には、深い耕作が行なわれており、住居址床面にまでには達していなかったが、壁は一部破壊されていた。

平面形態は、東西337cm、南北355cmを測り、やや南北に長い隅丸方形を呈していた。カマドを中心とする主軸方向は、Ｎ－90°－Ｅで、方位に沿って構築されている。壁高は23cmで、この時期の住居址にあっては深い。

カマドは、東壁のほぼ中央部に位置していたが、焚口部の袖石を除いては形態を止めておらず焼土と炭が堆積しているだけであった。この残存部の状況から、主軸位置で長さ60cm、幅60cmを測り、石を主体にしながら粘土で補強するという構造であったかと思われる。焼土の状況から比較的長い間使用したとも考えられる。床面は、礫混りの黒褐色土層中に存在するという関係上、

全体に礫が突出しており、恐らくこの上面に黒色土の床があったと思われるが検出することはできなかった。（第21図の実測図中には、自然礫は記入してない。）西壁の南寄りの床に、拳大の半分程の礫が東西100cm、南北100cmの範囲に半円形状に敷き詰めてあった。礫の置き方も一部規則性があり、出入口部（玄関）など、何らかの施設であった可能性があると思われる。壁は全体に自然礫が突出しており、非常にもろい状態であった。柱穴は、床に自然礫が密集し、かつて存在していたとしても、自然礫と黒褐色土が混入すればほとんど判明できない状態となる。従って確認することはできなかった。

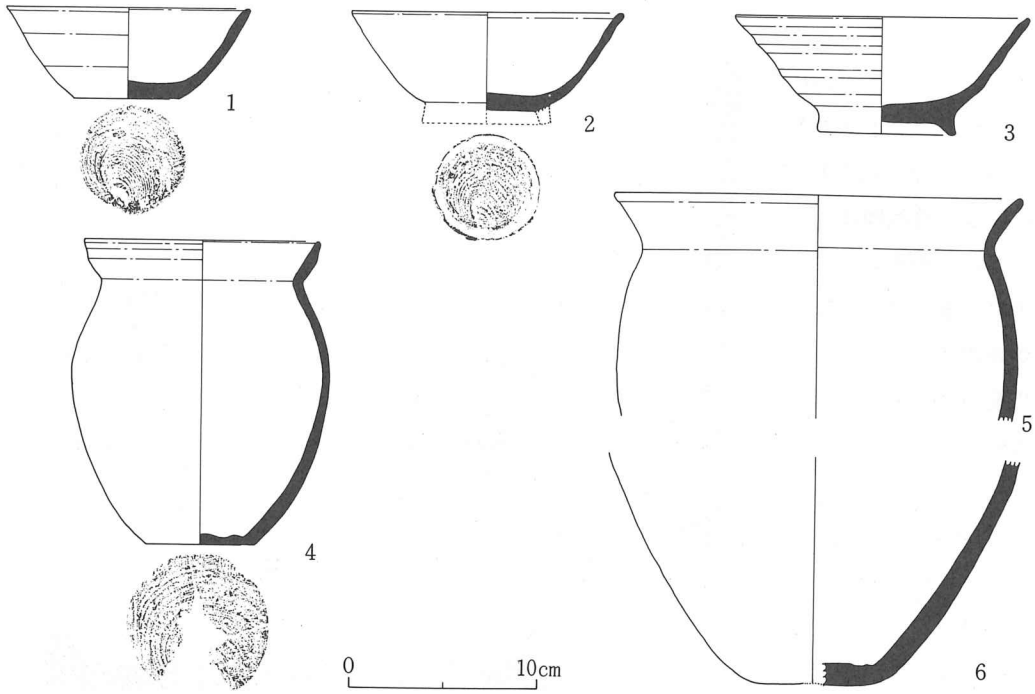


第21図　第７号住居址実測図〔Ｈ－７住〕（１：60）

遺物（第22図、図版九）

本住居址からは、土師器の坏・甕が出土しており、カマドと南壁下部に多かった。完形品は１の坏１点だけである。

１～３は土師器の坏で、２と３は高台が付いている。底部から僅かに内湾しながら口縁部に至っており、口縁部はやや肥厚し、内面黒色が成され器面調整はなめらかに行なわれている。外面も丁寧に調整されており茶褐色を呈している。底部は糸切りが成されている。器厚0.5～0.8cmを測り、胎土に砂粒が混入し、焼成良好の資料である。２と３も内面黒色研磨が成され、外面にはロクロ整形痕を残すが、その後の調整が丁寧に行なわれており、比較的滑らかである。２には砂粒、３は砂粒と小石を混入しているが焼成良好の資料である。底部は糸切りの後付け高台をしている。４～６は土師器の甕で、４は口縁直径12.5cm、底径5.8cm、器高16.1cmを測る小形のもので、一部欠損しているがほぼ完形に近い。底部は糸切りが成されている。口縁部には段が付くが、ロクロ整形段階のクセであると思われる。茶褐色ないし暗茶褐色を呈し、胎土にやや荒さは見られるが焼成良好の資料である。５・６は横ナデ調整を基調とし、赤褐色を呈している。



第22図　第７号住居址出土遺物実測図（１：４）

第９表　第７号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
22－１	(土)坏	13.0 4.8 5.6	底部から僅かに内湾しながら展開する。口縁はやや肥厚。比較的深い。	器面はなめらかに調整されているが部分的にロクロ整形痕残る。茶褐色	内面黒色研磨	胴部に比べ肥厚している。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.8
22－２	(土)坏	14.4 —— ——	足高高台の坏と思われる。高台部のみ欠損。比較的深い。	丁寧な整形 茶褐色 （ロクロ左回転）	ややロクロ整形痕を残すが丁寧な整形。内面黒色研磨。（ロクロ左回転）	高台欠損 坏部は胴部に比べかなり厚い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.9
22－３	(土)坏	15.6 6.1 7.3	足高高台の坏で、胴部から口縁にかけて激しく変化しながら外反する。器面が荒い。	ロクロ整形痕が極めて激しく残り、やや変形ぎみ。暗褐色（ロクロ左回転）	ロクロ整形痕は調整されているが器面の変化が激しい。内面黒色研磨。	糸切りの後高台を付けている。高台がやや低い。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～1.0
22－４	(土)甕	12.5 16.1 5.8	口縁は外反するが口唇がやや内湾する。肩部はなだらかで胴下半に至ってやや張らむ。	全体にヨコナデがみられるが口縁に特に顕著。 茶褐色（ロクロ右回転）	横ナデによる調整で比較的なめらか。 暗茶褐色	器面に比べ薄く凹凸が目立つ。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.7
22－５	(土)甕	21.7 —— ——	口縁がやや肥厚して外反する。肩部からなめらかな張らみをもつ。胴下半部欠損。	口縁に横ナデが目立ち、全体に丁寧な調整 赤褐色	横ナデ調整 赤褐色でススが付着	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入 0.6~0.7
22－６	(土)甕	—— —— 6.3	５に近似する甕の胴下半部であるが、５より胴部が張らむ底部付近はかなり厚くなる。	横ナデ調整 赤褐色でスス付着	横ナデ調整 赤褐色	比較的小さな底になる。中央部付近が肥厚する。	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入　0.8

6、第8号住居址

遺構（第23図、図版十）

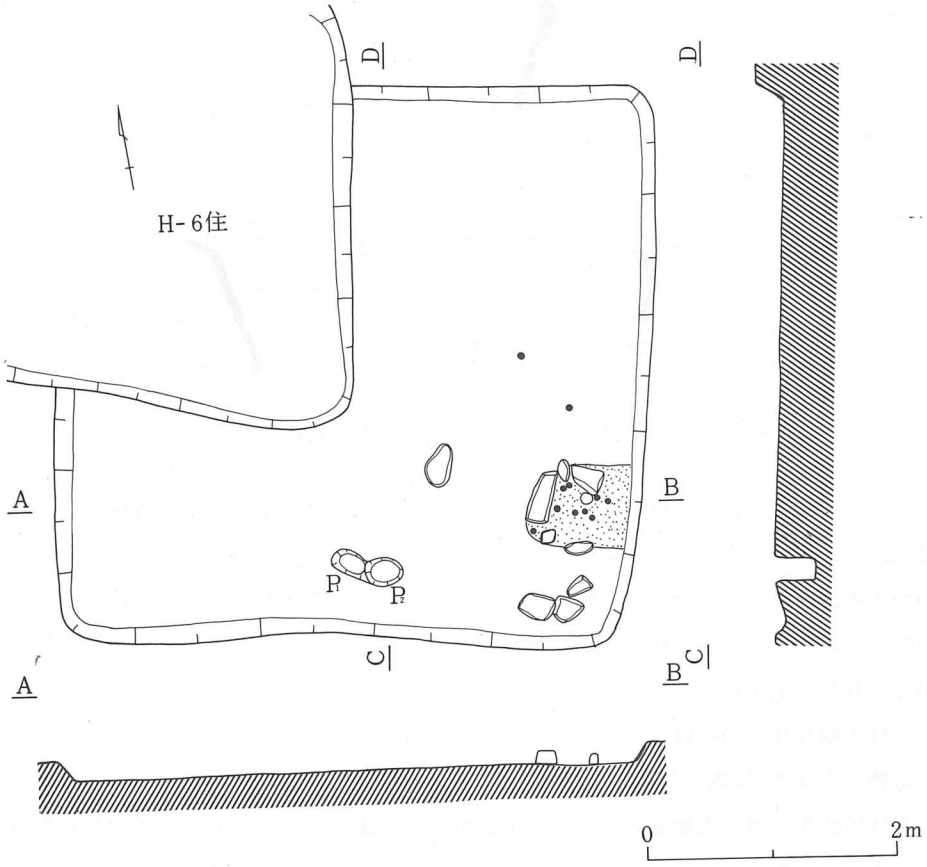
本住居址は、調査区中央部より西寄りの河岸線に近い所に位置し、水田造成の床面下部で検出された。層序は、耕作土の下部が地山となり、この地山は、大小の礫が混入する黒褐色土層であった。本住居址は、この黒褐色土層を掘り込んで構築していた。また、第6号住居址と複合関係を成しており、切り合いから8住→6住の新旧関係が確認された。

平面形態は、東西468cm、南北427cmで、東西にやや長いが隅丸方形を呈するものである。カマドを中心とする主軸方位は、N－97°－Eで、南東方向にやや向いており、これは、第6号住居址とほぼ主軸方位を同一にするものである。壁高は20cmである。

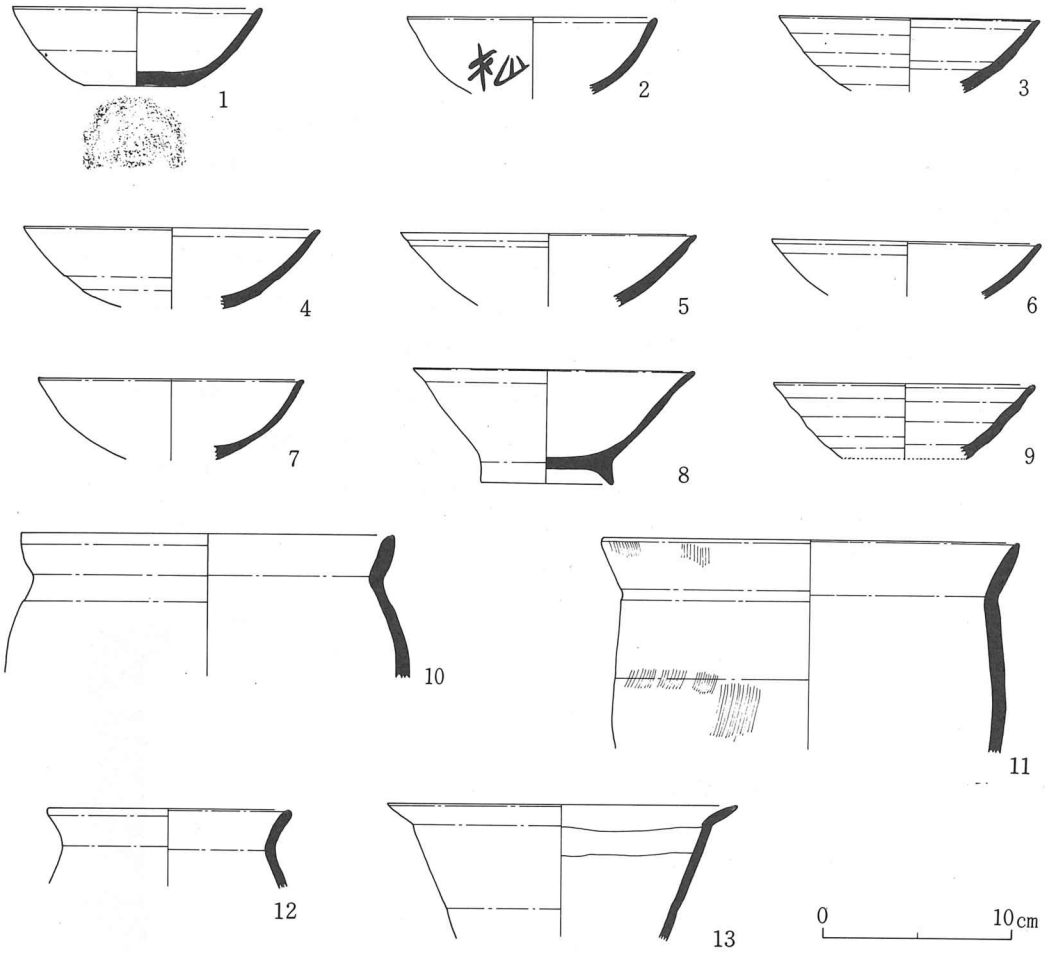
カマドは、東壁に位置するが、南西コーナーに非常に近い所にあり、主軸部で83cm、幅63cmを測る中規模なものである。すでに破壊され形態を止めていないが、両側に袖石が残り、焚口部に長方形の礫が存在した。本来石組みのカマ

規模＼pit・No.	P1	P2
長径・短径	27・19	30・22
深	16	23

(cm)



第23図　第8号住居址実測図〔H－8住〕（1：60）



第24図　第８号住居址出土遺物実測図（１：４）

ドであり、さらに粘土で補強したと思われる。火床部には焼土が多量に堆積し、また炭も僅かに見られた。カマド南側には、扁平な礫３個が置かれており、カマドを中心とする関連施設ではないかと考えられる。床面は、全体に礫が突出していたが南西部分には黒褐色の固く締ったところが残っていた。恐らくは礫の上面に黒褐色土を全面に貼ったものと思われる。壁も礫が全面に突出しており、黒褐色土と混っているためもろくなり崩れ易い状態であった。ピットは２基検出され、柱の取り替えの痕跡を残している。

遺物（第24図、図版十）

本住居址からは、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕が出土しており、カマドの内部及び周辺部に集中していた。

１～８は土師器の坏であり、８は付け高台がみられる。１～３・５・８は内面黒色研磨で、丁

寧な調整が行なわれているが、3は内黒の中でも非常にうすく、地色が見えている。外面の器面調整は全体に丁寧で、3はロクロ整形痕を残すが横ナデにより調整している。底部が残るのは1と8だけであるが、いずれも糸切り底である。2の坏の外面には墨書がある。9は須恵器の坏で唯一図上復元ができた。ロクロ整形痕が顕著で荒い作りである。青灰色を示し、焼成は良好である。10～13は土師器の甕で形態が全て異なっている。10は口縁部が肥厚し胴部が大きく脹らむ。11は口縁部が「く」の字状に外反し、胴部があまり脹らまない。12は小形の甕で、口縁部が「く」の字状に外反し、胴部が脹らむ。13は口縁部が頸部から全く丸味をもたずに直線的に外反し、口唇が尖がり、胴部も直線的に下降する。中でも13の器形は特異なものである。これらは、赤褐色ないし茶褐色を呈し、比較的焼成は良い。11は器面にハケ状工具による調整痕が残る。

第10表　第8号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
24－1	(土)坏	13.3 4.1 5.5	丸味を帯びながら口縁に向って外反する。口縁はやや厚い。	ロクロ整形痕はあまりみられない。丁寧な調整。茶褐色（ロクロ左回転）	内面黒色研磨 滑らかな調整。	胴部に比べてかなり厚い。 糸切り底	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.8
24－2	(土)坏	13.2 —— ——	椀状に内湾しながら展開する。口縁がやや肥厚する。 墨書土器	やや荒れてはいるが丁寧な調整が行なわれている。赤褐色(ロクロ回転不明)	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
24－3	(土)坏	13.9 —— ——	比較的厚く、微妙に内湾しながら展開する。	ロクロ整形痕が残る。茶褐色（ロクロ回転不明）	内面黒色研磨であるが、うすい色をしており、地色がみえる。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
24－4	(土)坏	5.7 —— ——	全体に大きく外反する。口唇がさらに外反する。	胴中央部にロクロ整形痕を残す。赤褐色（ロクロ右回転）	丁寧な調整で滑らか。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.6
24－5	(土)坏	15.6 —— ——	口縁直径が大きい坏で、直線に近い外反をみせている。	口縁にロクロ整形による深い痕が残る。赤褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.6
24－6	(土)坏	14.3 —— ——	全体に薄手で、口縁も変化がない。直線に近い外反をみせている。	口縁付近にロクロ整形痕が残る。赤褐色（ロクロ左回転）	比較的丁寧な調整をしているが、やや荒くなっている。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
24－7	(土)坏	14.1 —— ——	椀状に丸みを帯びながら内湾し、全体に展開する。口縁はさらに僅かに外反。	滑らかでロクロ痕がほとんどみられない。赤褐色（ロクロ右回転）	滑らかな調整をしている。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.5
24－8	(土)坏	14.4 6.0 7.0	全体に薄く、造りに群がある。口縁が外反	ロクロ整形痕をナデにより調整　暗茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨であるが、外面とあまり色調に差がない。	糸切り後付け高台。高台の造りも荒い。	焼成：やや不良 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.6
24－9	(須)坏	13.8 4.0 6.7	ロクロ整形痕が激しく、造りが荒い。下部に至って丸味を帯びるが、全体に直線状。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.6
24－10	(土)甕	19.8 —— ——	口縁が極めて肥厚し内湾ぎみに展開。肩部から胴部が比較的脹らむ。	頸部を一周するケズリ痕があり、やや段状となる。赤褐色	滑らかな調整が行なわれている。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.7～0.8
24－11	(土)甕	22.1 —— ——	口唇は尖るが、全体に厚さは一定し、肩部・胴部が脹らまない器形。	頸部を一周するケズリがある。胴部はハケ状工具の調整痕あり。赤褐色	滑らかな調整が行なわれている。 黄褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6～0.7
24－12	(土)甕	12.9 —— ——	口縁が「く」の字状に外反し胴部も肩部から脹らみをみせる。	横ナデ調整痕が残る。暗茶褐色	横ナデ調整痕が残る。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
24－13	(土)甕	12.5 —— ——	口縁が大きく屈曲外反する。胴部は脹らまず直線的で、輪積み痕が残る。	輪積み痕が明瞭で、調整が荒い。赤褐色	整形が荒い。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5

7、第９号住居址

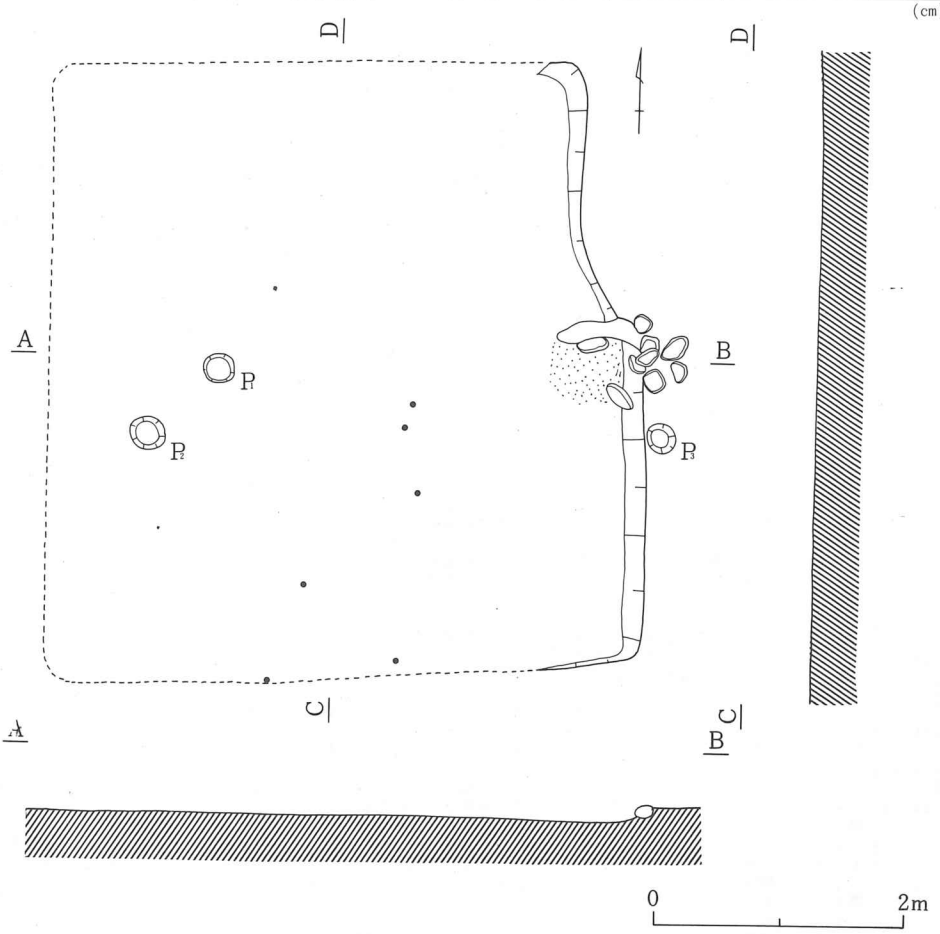
遺構（第25図、図版十）

本住居址は、調査区中央部に位置し、水田床面の下部より検出された。ここは、極めて多くの住居址が、非常に複雑な複合関係を成しており、検出に時間がかかったばかりでなく、複合関係すら正確に把握できたか疑問の点も多い。また、本住居址の周辺は、黒褐色土中に構築しているため、なお検出に複雑さを加味した。

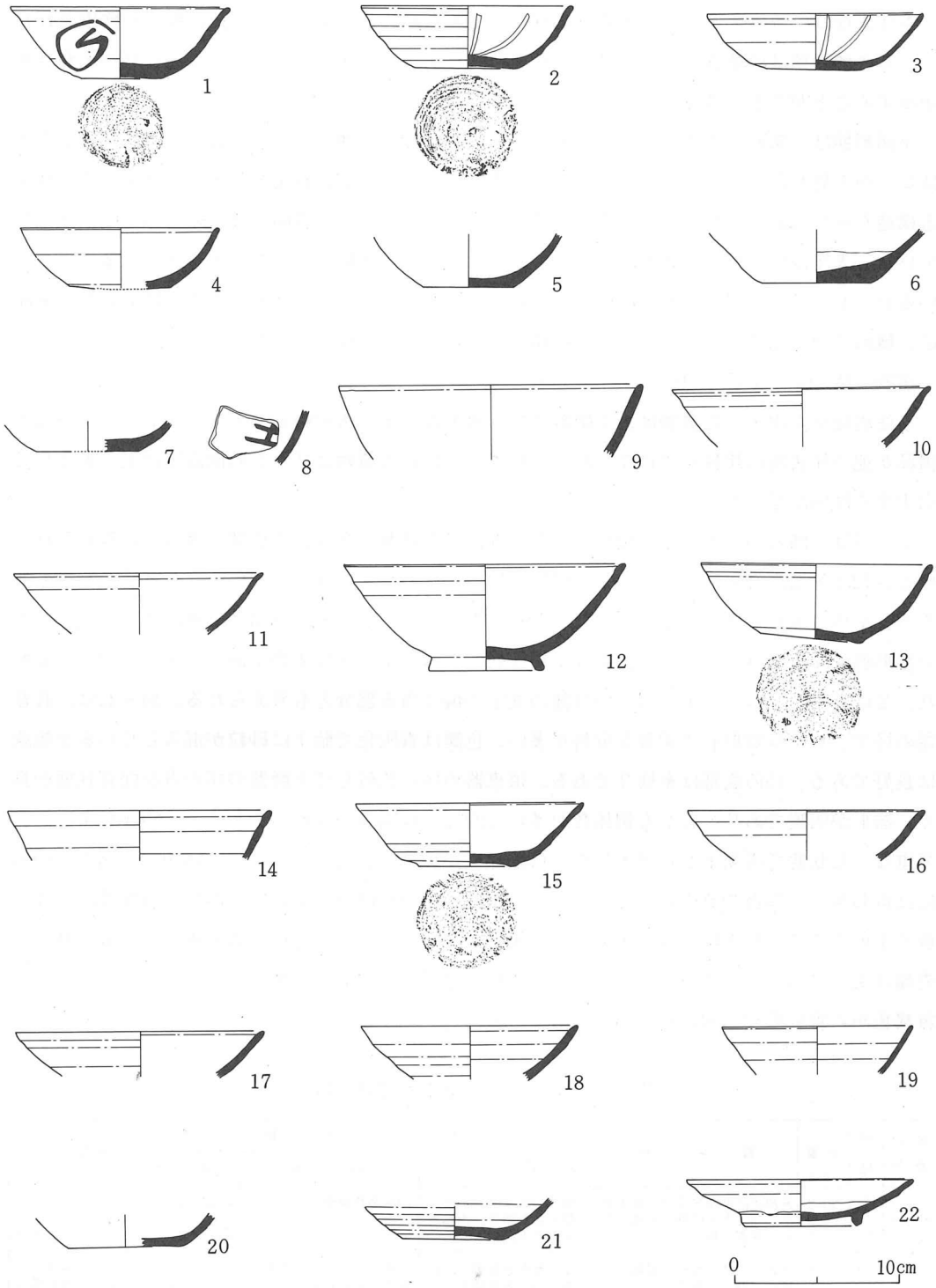
複合関係は、第９号住居址が第12号住居址上に貼り床をし、また、第18号住居址上に貼り床を行なって構築した第14号住居址のさらにその上に、第９号住居址が存在していた。さらに、第20号住居址の上部にも当る。第10号住居址との関係は不明であるが、カマドなどの状態から本址の方が新しいと考えられる。従って、第９号住居址を基本に新旧関係を捉えると、18住→14住・20住→12住→（10住）→９住となり、複合関係の中では、本址が最も新しいのではないかと

規模＼pit・No.	P1	P2	P3
長径・短径	24・22	30・28	23・23
深	14	16	14

(cm)



第25図　第９号住居址実測図〔Ｈ－９住〕（１：60）



第26図　第９号住居址出土遺物実測図（１：４）

理解される。

本住居址は、カマドを中心とする東側壁面と、北東部及び南東部コーナーの壁面が検出されたが、その他の壁は破壊され存在していなかった。しかし、床面は、貼り床ではあったが広がりを確認することができ、ほぼプランの全体を推定するに及んだ。

平面形態は、東西は不明で、南北480cm、壁高10cmを測り、推定するとほぼ隅丸方形になるのではないかと思われる。カマドは、かなりの破壊を受けていたが、石組を基調とし、粘土で補強する構造だったと考えられ、北側の袖には礫と粘土が存在し、また周囲には、カマドの礫が散乱していた。火床部は、やや舟底形にくぼみがみられ、焼土が堆積していた。ピットは3基検出しているが、P_3は外部にあり、本住居址に伴うものか不明であるが、とりあえずここに含めた。床面は、極めて固く貼り床を締めてあり、移植ゴテが刺さらない程であった。

遺物（第26図、図版十・十一）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏、須恵器の坏、灰釉陶器であり、完形品及び一部欠損品が他の住居址に比較して目立った。そして、これらの遺物はプランの南側床面上に集中して出土する傾向が見られた。

1～13は土師器の坏で、4を除いては全て内面黒色研磨であり、黒色部は滑らかに整形されている。12は足高高台の坏であり、9も同様の資料と思われる。6のようにかなり厚手の資料もあるが、全体に器形変化が少なく、椀状に丸味を帯びるものが多い。外面は丁寧に調整され、ロクロ整形痕もあまり目立たない。底部は糸切り底である。1と8は墨書土器で、1は「分」と思われ、2は「土」ないし「王」あるいは他の文字の偏に当る部分とも考えられる。14～21は、須恵器の坏で、ロクロ整形痕の顕著な資料が多い。色調は青灰色で胎土に砂粒が混入しているが焼成は良好である。15の底部は糸切りである。須恵器の坏に比較して土師器の坏の方が保存状態が良く、器形が明瞭であり、しかも個体数が多い。22は灰釉陶器の完形品であり、3の坏を中に入れて重なった状態で床面上から出土した。口縁部直径13.8cm、器高2.9cm、底径6.8cmを測る。内部には重ね焼きの高台の焼成痕が残っている。灰釉はハケがけをしており、内部は口縁部から高台痕の手前までに、外面は高台の手前までに塗られており、白色に近い色調を成している。高台の先端は尖っており、古く位置づく。胎土は極めて精選されており、焼成は良好で、黄色がかった黄褐色から青灰色の中間的な色調を呈している。

第11表　第9号住居址出土遺物一覧表

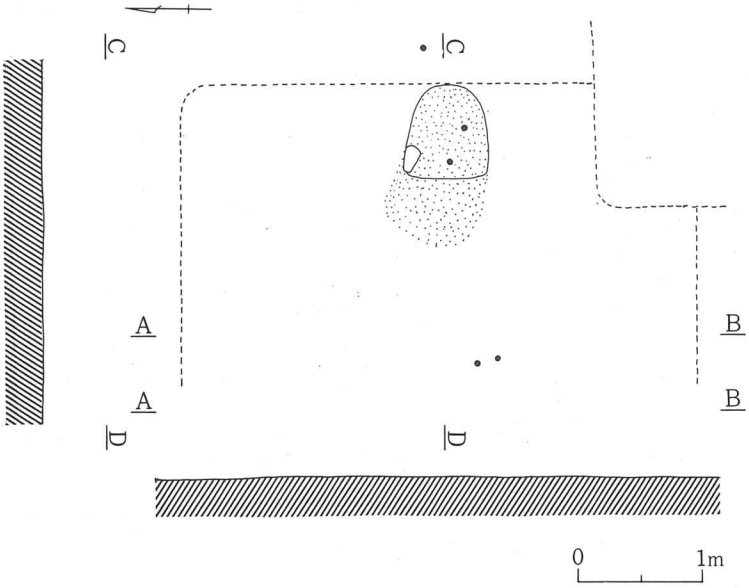
挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整			焼成・胎土他
				外面	内面	底部	
26－1	(土)坏	13.2 4.3 4.8	直線状に外反するが、胴中央部より、さらに外反が強くなる。墨書土器	口縁及び底部付近にロクロ整形痕が顕著。赤褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	胴部に比べ厚くなる。 糸切り底。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.8
26－2	(土)坏	12.8 3.8 6.0	椀状に内湾しながら展開。口縁やや外反。厚さにかなりの群がある。	ロクロ整形痕顕著。凹凸が激しい。黄茶褐色（ロクロ右回転）	丁寧に、滑らかに調整。暗文がみられる。 内面黒色研磨	糸切り底。 中央部が肥厚	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.6

26－3	(土) 坏	13.0 3.4 5.5	口径は一般的であるが、比較的浅い坏。全体に薄く内湾ぎみの器形を残す。	部分的にロクロ整形痕が残るが丁寧な調整。 赤褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨で暗文がみられる。	糸切り底で、胴部に比べ肥厚している。	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入 0.3~0.6
26－4	(土) 坏	12.0 3.7 6.1	底部を欠くが、椀状の丸みのある器形。厚さはほぼ一定。	丁寧な調整が行なわれ滑らか。茶褐色 （ロクロ右回転）	丁寧な調整が行なわれ滑らか。茶褐色	ヘラ削り底。 中央部が薄くなると思われる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
26－5	(土) 坏	—— —— 5.4	底部と一部胴部のみの資料。4と同種の器形。	滑らかな調整 赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	ヘラ削り底 中央部がやや薄くなる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.6
26－6	(土) 坏	—— —— 6.6	口縁を欠く。底部から外反ぎみに展開する。	滑らかな調整 赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	ヘラ削り底 中央部が薄くなるが全般に厚い。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5～0.9
26－7	(土) 坏	—— —— 6.0	底部と一部胴部のみの資料。4と同様の器形になると思われる。	滑らかな調整 茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	ヘラ削り底	焼成：良好 胎土：土砂混入 器厚：0.6～0.8
26－8	(土) 坏	—— —— ——	墨書土器の胴中央部破片。	滑らかな調整 茶褐色	滑らかな調整	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
26－9	(土) 坏	18.3 —— ——	足高高台の坏とも考えられる。立ち上がりが急で椀状に内湾する。口縁は丸みを帯びる。	滑らかな調整 赤褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.6
26－10	(土) 坏	15.6 —— ——	足高高台の坏とも考えられる。立ち上がりは丸みを帯びて展開する。	口縁直下にロクロ整形時に凹がみられる。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
26－11	(土) 坏	15.0 —— ——	全体に薄手。内湾しながら展開するが、口唇は外反する。	口縁にロクロ整形が僅かに残る。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
26－12	(土) 坏	17.0 6.4 6.8	足高高台の坏で、器台に比べ立ち上がりが椀状に大きく展開する。	口縁付近に変化がみられるが全体に滑らか。 茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	足高高台 高台は内湾する。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
26－13	(土) 坏	14.0 4.5 6.0	椀状に内湾しながら展開するが、左右非対象でゆがんでいる。	口縁にロクロ整形痕が残る。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	胴部に比べて薄い。 糸切り底	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
26－14	(須) 坏	15.9 —— ——	口縁が肥厚し、立ち上がりが急である。比較的深い器形になるものと思われる。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕顕著	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
26－15	(須) 坏	13.8 3.8 5.7	浅い坏で底部直上が段状になる。胴部はほぼ直線状に大きく外反。	丁寧に調整されロクロ痕があまり残らない。 青灰色（ロクロ右回転）	丁寧な調整で滑らか。 青灰色。	中央がやや盛り上がる。 糸切り底	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.3～0.6
26－16	(須) 坏	14.3 —— ——	胴中央部で大きく変化するがほぼ一連の器形。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕が僅かに残るが滑らかに調整。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5
26－17	(須) 坏	14.9 —— ——	やや内湾しながら展開する。口縁が少し肥厚	ロクロ整形痕が残る。 青灰色 （ロクロ回転不明）	外面に比べ丁寧な調整が行なわれている。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5
26－18	(須) 坏	13.1 —— ——	口縁に近い程器厚がある。一般的な小形の坏。	ロクロ整形痕顕著。 青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕顕著。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
26－19	(須) 坏	11.1 —— ——	小形の坏。ほぼ直線状に外反する。器厚も一定している。	ロクロ整形痕が残る。 青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕顕著。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3
26－20	(須) 坏	—— —— 6.8	底部と一部胴部を残す資料。	ロクロ整形痕はあまりみられない。青灰色。 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕はあまりみられない。 青灰色	糸切り底 中央部がやや盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
26－21	(須) 坏	—— —— 6.0	口縁部を欠損する資料。 均一した器厚を保つ。内湾しながら展開すると思われる。	ロクロ整形痕が極めて顕著。青灰色 （ロクロ右回転）	比較的丁寧な調整が行なわれている。 青灰色	糸切り底 中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
26－22	灰釉陶器	13.8 2.9 6.8	皿形を呈する灰釉陶器で、口縁直下と胴中央に段がある。完形	ロクロ整形痕は横ナデにより滑らか。地は黄褐色釉は黄灰色。ハケがけ	ロクロ整形痕は横ナデにより滑らか。地は黄褐色釉は黄灰色　ハケがけ	高台の直径は大きく、先端が尖がりぎみ。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.4

8、第10号住居址

遺構（第27図、図版十一）

本住居址は、調査区中央部やや西寄りに位置し、水田床面下部より検出した。一連の複合関係をもつ住居址群の西端部にも当る。ここは、ローム層から黒褐色土、黒褐色土から礫の混入する黒褐色土へと変化していく接点的な所に当り、平面調査が難しい箇所であった。主体は黒褐色土と礫混りの黒褐色土である。第9・11・13号住居址と複合関係を成しており、本住居址は、第9号住居址に切られ、第11・13号住居址上に貼り床を成したものと考えられるが、確定はできない。しかし、仮に13住→12住→11住→10住→9住と新旧関係を設定しておくものとする。



第27図　第10号住居址実測図〔H－10住〕（1：60）

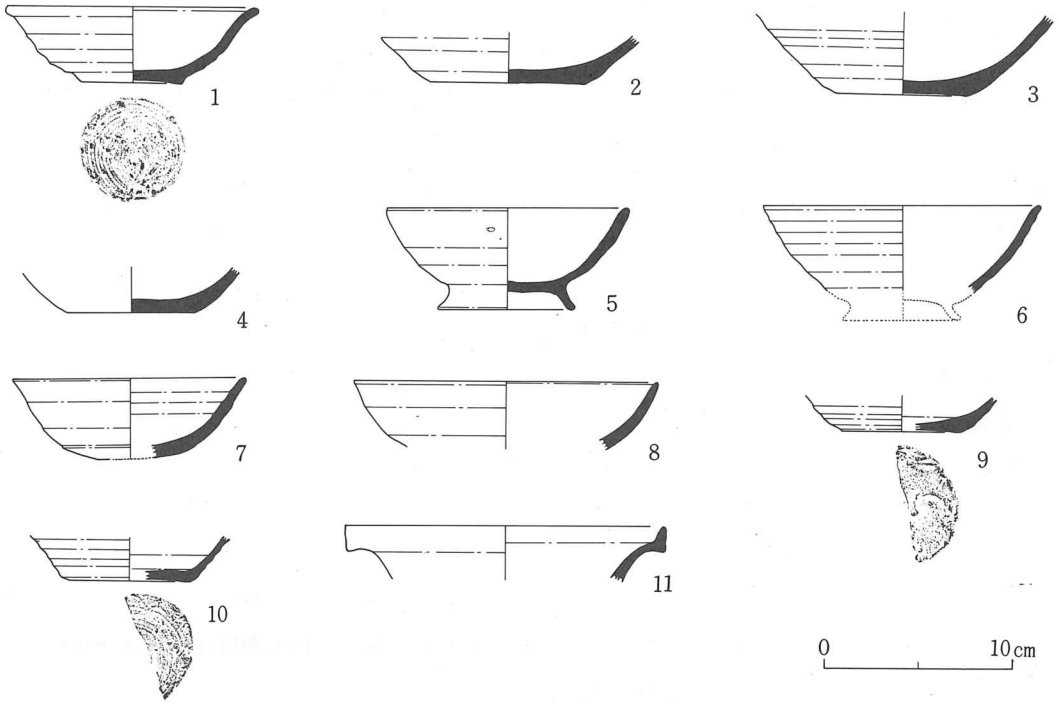
本住居址は、カマドとその周囲の床面によりプランを想定したものであり、すでに壁はなく、確実に全体を捉えることは不可能な状態であった。カマドは、主軸方位をN－90°－Eと仮定するなら、主軸方向に65cm、幅35～40cmを測る。あくまでも焼土が散乱している範囲であり、これもまた確定できない。住居址全体からみて、東カマドが圧倒的であるところから、本住居址の場合も東側にカマドがあったと考えてよいと思われる。床面は、カマド周辺に僅か固く残っており、貼り床であることは確実である。礫混入の地山を補なっているものと思われる。

遺物（第28図、図版十一・十二）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏、須恵器の坏・甕を取り上げたが、床面に密着している資料を中心にした。しかし、確実に伴出するものかどうか疑問のあることを付記して扱うことにする。

1～6は土師器の坏で、それぞれ完形に近く良好な資料である。1～4は糸切り底で、ロクロ整形痕を顕著に残すが、1と2を除いては丁寧な調整が行なわれている。内面は黒色研磨を成している。5・6は高台付の坏であるが、5は内湾の強い椀形の器形で、口縁部は0.6cmとかなり厚くなっている。高台は他の資料と比較すると、「く」の字に外反しており、やや特殊なもので

ある。内外面とも丁寧な調整を行なっている。外面にモミ痕が付着している。6も5と類似性のある資料と思われるが、口縁部の形態や全体の調整に相違点がある。7～10は須恵器の坏で、破片からの図上復元である。7は底部に至っても丸味が強く、また、口縁部がやや外反する。9と10には底部に糸切り痕がみられる。11は須恵器の甕で、受口状の口縁部資料である。



第28図　第10号住居址出土遺物実測図（1：4）

第12表　第10号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
28－1	(土) 坏	13.3 4.0 5.4	口縁が極めて外反し、全体に整形が荒い。左右非対象で部分的にゆがみがある。	ロクロ整形痕が極めて顕著で調整がみられない。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨で、外面に比べ滑らかな調整が行なわれている。	糸切り底。中央部が盛り上がる。ヘラ削り底	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5
28－2	(土) 坏	—— —— 8.2	底部と一部胴部が残る資料。底部はかなり大きく、大形の坏になると思われる。	ロクロ整形痕が僅かに残る。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	胴部に比べかなり厚い。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.6
28－3	(土) 坏	—— —— 6.9	口縁を欠く資料で、底径が大きく、かなり大形の坏になると思われる。	ロクロ整形痕顕著 赤褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨 滑らかな調整	ヘラ削り底	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.7
28－4	(土) 坏	—— —— 6.8	比較的器面調整の整った坏で口縁と胴部を欠損している。	丁寧な調整が行なわれている。赤褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨 滑らかな調整	ヘラ削り底	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
28－5	(土) 坏	12.8 5.4 7.2	椀形を呈する高台付の小形坏。口縁部は他の部分と比較して最も厚くなる。	極めて丁寧な調整が行なわれている。茶褐色 （ロクロ右回転）	極めて丁寧な調整が行なわれており、内面黒色研磨	足高の高台で外反する。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.6

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
28－6	(土)坏	14.7 —— ——	5に近い椀状の器形であるが底部を欠損している。	ロクロ整形痕が顕著であるが横ナデ調整がみられる。茶褐色（ロクロ右）	丁寧な調整が行なわれており、内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
28－7	(須)坏	12.4 4.2 6.9	丸底ぎみの椀形に近似する器形で、全体にかなり厚い。	ロクロ整形痕が顕著で、底部との境に段がつく。青灰色(ロクロ回転不明)	ロクロ整形痕が顕著 青灰色	ほとんど欠損しているが、丸底ぎみになる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.6
28－8	(須)坏	16.2 —— ——	大形の口径をもつ坏で、胴下半部は欠損している。	ロクロ整形痕が残るが横ナデ調整がみられる。黒青灰色（ロクロ不明）	外面に比較すれば丁寧な調整が行なわれている。青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.6
28－9	(須)坏	—— —— 6.3	底部と一部胴下半が残る坏で平均的な資料と思われる。	ロクロ整形痕が顕著 青灰色 （ロクロ回転不明）	外面に比較すれば丁寧な調整が行なわれている。青灰色	ヘラ削り底	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入　0.5
28－10	(須)坏	—— —— 6.4	9と同類の器形。胴部よりも底部が比較的厚い。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕があまりみられず少々滑らか。青灰色	糸切り底 やや盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.5
28－11	(須)甕	14.7 —— ——	小形甕の口縁のみの資料。肩部に最大径をもつ器形になると思われる。	丁寧な調整 灰白色 （ロクロ回転不明	丁寧な調整 灰白色	欠損して不明	焼成：やや良 胎土：精選 器厚：0.4～0.6

9、第11号住居址

遺構（第29図、図版十二）

本住居址は、調査区中央部に位置し、水田床面下部の黒褐色土層中より検出された。第10・13・14・16・18号住居址と複合関係をもっており、極めて複雑な様相を呈していた。第18号住居址上に第14号住居址が貼り床をしており、これを第16号住居址が切っていたが、その状態の上部に貼り床をして本址を構築していた。さらに第13号住居址の上にも貼り床を行なっている。また、第10号住居址は、本住居址を切って存在していたと思われる。従って新旧関係は、18住→14住→16住→13住→11住→10住という複合関係が成り立つ。

本住居址は、東壁と南壁それに西壁の南側半分までが残存し、他は破壊されていたが、床面が良好であったのでほぼ全体プランを想定できた。平面プランは、東西480cm、南北415cm（推定）壁高11cmを測る隅丸長方形を呈していたと思われる。床面は、貼り床を行なった後固く締められており良好な状態であった。北側と西側の一部は撹乱されている所はあったが、全体に良い保存状態であった。壁はやや軟弱であったが、土質が粘質であったため容易に確認できた。カマドは、東壁の南寄りで検出され、すでに礫等全容を止めておらず焼土の堆積が見られるだけであったが、現状で、主軸方位に対し70cm、幅55cmを測る。柱穴は2基検出され、P_2は深さ17cmを測る。尚、本住居址の主軸方位は、カマドを中心にN－82°－Eで、東向きであるがやや北に転じている。

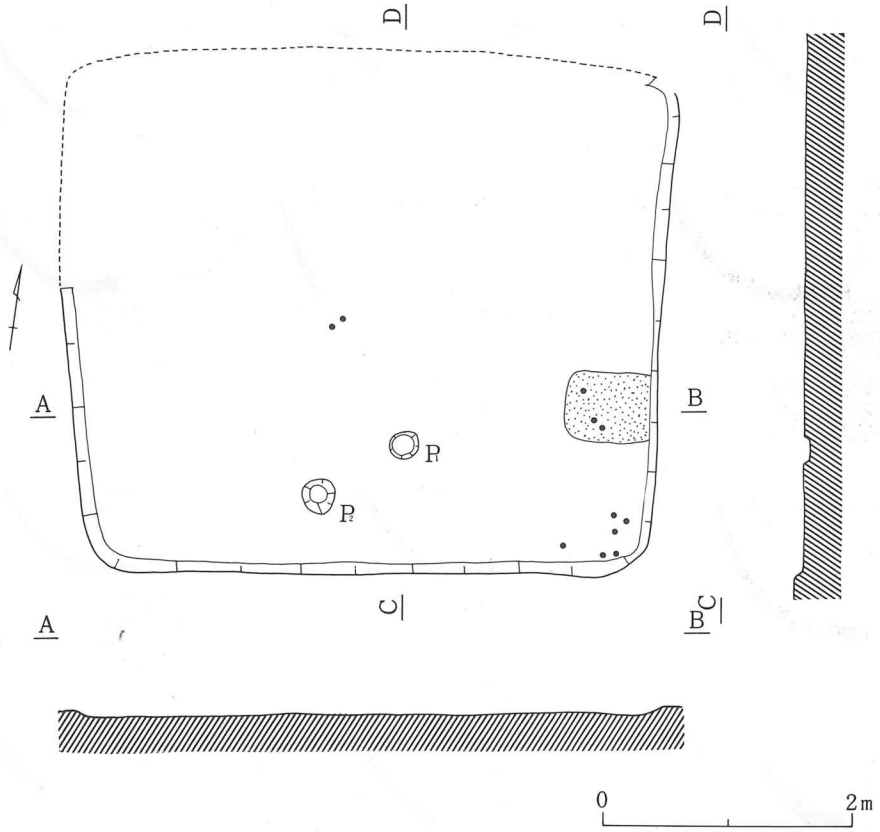
遺物（第30・31図、図版十二）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・鉢・甕・坏蓋、須恵器の坏・甕、灰釉陶器があり、カマド内部及び南東コーナー部より集中して出土している。

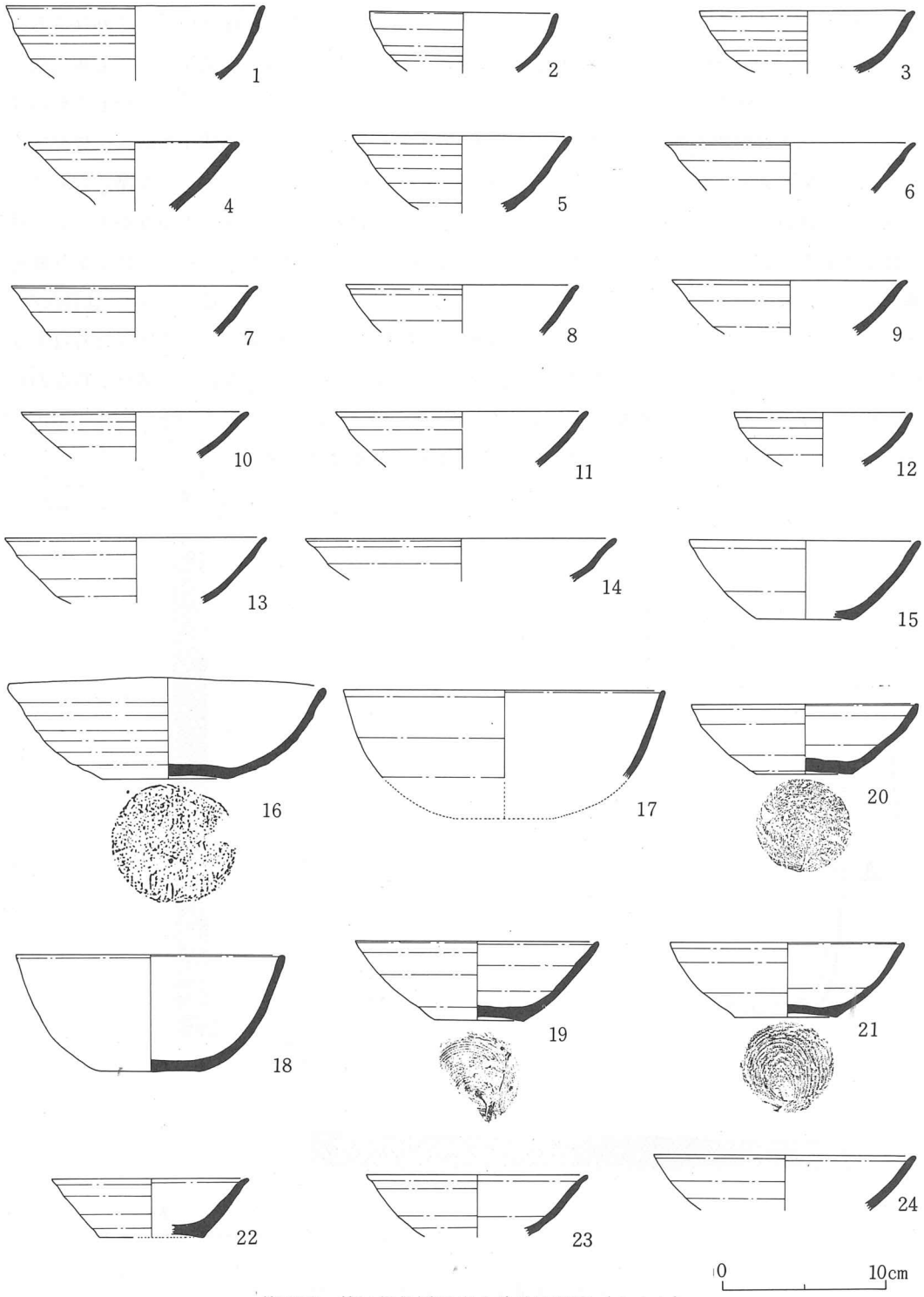
1～18は土師器の坏で、全て内面黒色研磨である。1～3・12・16～18は、胴部に丸味をもつているが、その他はほぼ直線状に口縁部に至る資料である。いずれもロクロ整形痕が顕著である

が調整は丁寧に行なわれている。16は大形の坏で、口縁直径19.5cm、器高6.1cm、底径7.2cmのほぼ完形に近いものである。胴部はかなり内湾しながらも丸味をもち、口縁部に至って外反する。外面にロクロ整形痕を残している。底部はヘラ削りにより調整している。本遺跡の中でも超大形の坏であり、あまり例を見ない。整形・調整技法は他の坏と変るところはない。17と18も大形の坏であるが、16とは形態を異にしており、17は16よりさらに湾曲が大きく丸味が強い。口縁部は立ち上がりが急である。18は口縁直径16.4cm、器高7.1cm、底径6.1cmを測り、かなり深いもので、形態は17と近似し、胴部下半の湾曲が強く、胴部上半より口縁部に対し立ち上がりがきつい。器面は他の資料に比べ滑らかである。19～26は須恵器の坏で、19・21に見られるように糸切り底を基調にしている。22・23・25・26は小形であり、特に22は口縁直径12cm、器高3.6cm、底径6.8cmと小さい。26は器厚0.7cmと厚い。28は鉢で内面が黒色であり、口縁部が「く」の字状に外反する。頸部直下が最も張り出し胴部は丸味を帯びながら底部に至っている。器面はナデ調整が行なわれ滑らかであり、器厚0.6cmで焼成良好な資料である。29・30は土師器の甕で、29は口縁部が「く」の字状に外反しやや肥厚する。胴部は頸部

規模 ＼ pit・No.	P1	P2
長径・短径	23・21	27・28
深	5	17

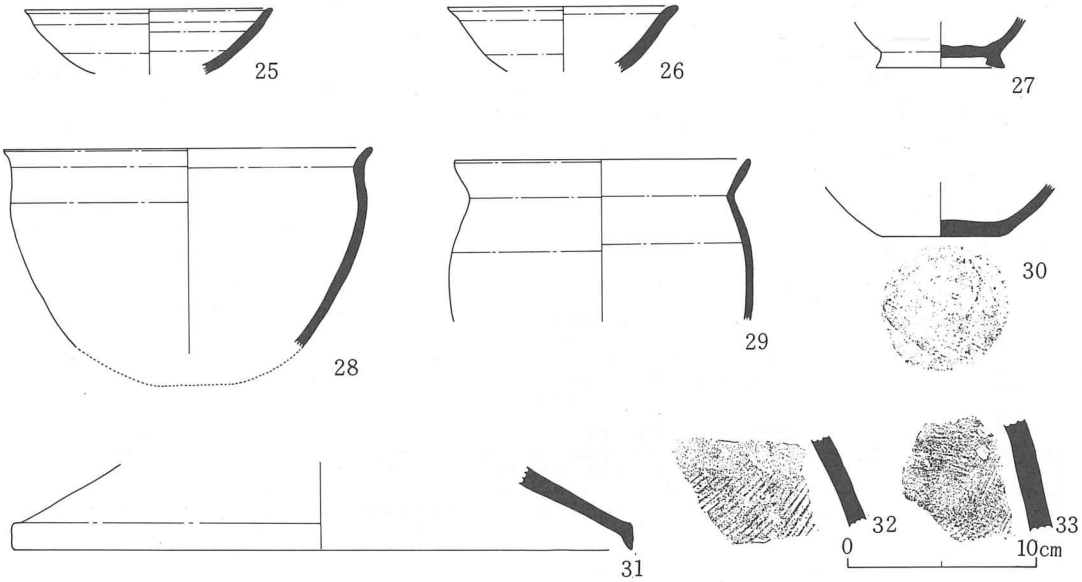


第29図　第11号住居址実測図〔H－11住〕（1：60）



第30図　第11号住居址出土遺物実測図（１：４）

下半で丸味を帯びている。27は灰釉陶器で、長頸壺の底部と思われる。内外面とも緑色に近い色調を成す。31は土師器の蓋で厚手で大形である。黄褐色で焼成は良くない。32・33は須恵器の甕で、器面にタタキ目がみられる。



第31図　第11号住居址出土遺物実測図（１：４）

第13表　第11号住居址出土遺物一覧表

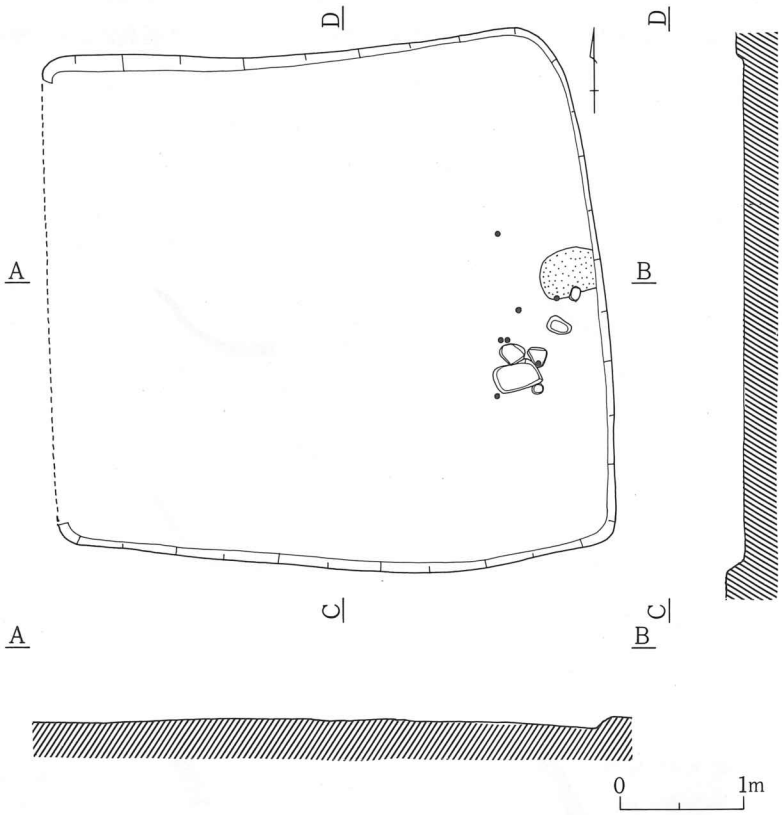
挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
30－1	(土)坏	15.8 —— ——	内湾ぎみに展開するが、立ち上がりが急である。全体に薄く、群がある。	ロクロ整形痕顕著 茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
30－2	(土)坏	11.5 —— ——	椀状に内湾しながら展開する小形の坏。口縁が他の部分に比較して厚い。	ロクロ整形痕顕著 赤褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨で、丁寧に調整されている。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.4
30－3	(土)坏	13.1 —— ——	椀状に内湾しながら展開する。口唇が尖りぎみで肥厚する。	ロクロ整形痕顕著 茶褐色 （ロクロ左回転）	内面黒色研磨 丁寧に調整	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
30－4	(土)坏	12.8 —— ——	小形の坏で、直線状に外反する。器厚はほぼ一定。底部がかなり小さくなると思われる。	ロクロ整形痕を残すが、調整が行なわれている。茶褐色(ロクロ回転不明)	内面黒色研磨 調整が行なわれている。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.6
30－5	(土)坏	13.4 —— ——	底部直上は湾曲するが、そこから口縁まではほぼ直線状に外反。	口縁直下に括れがみられロクロ整形痕を僅かに残す。茶褐色(ロクロ不明)	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石多量 混入　0.4～0.5
30－6	(土)坏	15.3 —— ——	胴中央から直線状に外反する。口唇がさらに外反。	ロクロ整形痕顕著 茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.3～0.5
30－7	(土)坏	15.1 —— ——	胴部が口縁まで直線状に外反する。胴中央部やや肥厚	ロクロ整形痕僅かに残す。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
30－8	(土)坏	14.2 —— ——	直線状に外反。器厚はほぼ一定。	口縁直下にロクロ整形の凹みあり。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
30－9	(土) 坏	14.4 —— ——	やや内湾ぎみに展開するが、口縁は外反する。	ロクロ整形痕を残す。茶褐色（ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
30－10	(土) 坏	13.9 —— ——	ほぼ直線状に強く外反する。器厚一定	ロクロ痕残るが、丁寧に整形が成されている。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
30－11	(土) 坏	15.4 —— ——	口径が比較的大きな坏で内湾ぎみに展開する。	口縁直下が括れ、外反する。ロクロ痕僅かに残る。茶褐色(ロクロ回転不明)	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
30－12	(土) 坏	10.9 —— ——	小形の坏で椀状に内湾しながら展開する。口径に対して比較的深い。	ロクロ整形痕が残る。茶褐色（ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
30－13	(土) 坏	18.0 —— ——	湾曲しながら展開する坏で、口唇が若干外反する。	ロクロ整形痕を残す。茶褐色（ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.4
30－14	(土) 坏	19.0 —— ——	口径がかなり大きな坏であるが、比較的浅いと思われる。口縁が外反する。	ロクロ整形痕を部分的に残す。茶褐色（ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
30－15	(土) 坏	14.1 4.8 5.9	内湾しながら展開する坏。器厚はほぼ一定。底部の一部欠損。	丁寧に調整されているがロクロ整形痕を僅かに残す。茶褐色(ロクロ不明)	内面黒色研磨 丁寧に調整されている。	糸切り底	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
30－16	(土) 坏	19.5 6.1 7.2	超大形の坏。椀としてもよいが、製作技術や調整は坏と同一。	ロクロ整形痕を残す。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。使用による摩耗が見られる。	ヘラ削り底 肥厚して中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.5
30－17	(土) 坏	19.6 —— ——	超大形の坏の口縁及び胴部の破片資料。垂直に近く立ち上る。椀形に近い器かと思われる。	ロクロ整形痕が僅かに残るが、丁寧な調整が成されている。茶褐色	内面黒色研磨	欠損して不明。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.5
30－18	(土) 坏	16.4 7.1 6.1	超大形の坏で、17に近似する資料である。器厚は全体に一定している。	丁寧な調整が行なわれ、器面が滑らか。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨で二次的に摩耗している。	糸切り底	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6-
30－19	(須) 坏	14.9 4.8 5.5	底部が小さ目で、胴部から口縁に至って外反する。	ロクロ整形痕を僅かに残すが丁寧な調整が行なわれている。茶褐色	外面よりもロクロ整形痕顕著。青灰色であるがススが付着している。	糸切り底 （ロクロ右回転）	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
30－20	(須) 坏	13.9 4.2 5.9	全体に屈曲の多い作りを成している。器厚もある。	ロクロ整形痕が強く残る部分がある。茶青灰色（ロクロ右回転）	外面のロクロ痕に合わせ屈曲部分が残る。茶青灰色	糸切り底 器厚がやや肥厚している。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.5
30－21	(須) 坏	14.3 4.6 6.3	内湾しながら口縁に至る坏で器厚は全体にほぼ一定している。	比較的丁寧な調整が成されている。青灰色（ロクロ右回転）	胴中央部にロクロ痕が残る。	糸切り底 中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
30－22	(須) 坏	12.0 3.6 6.8	小形の坏で、底部から直線状に展開する。かなり厚い器厚である。	ロクロ整形痕を残す。青灰色（ロクロ回転不明）	横ナデ状の調整が行なわれている。	底部周辺部が突き出している。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.8
30－23	(須) 坏	13.5 —— ——	口縁が外反する坏で、口唇に括れがある。全体に湾曲状の器形を成す。	口縁と胴部の一部にロクロ整形痕がみられる。青灰色(ロクロ回転不明)	滑らかな調整が行なわれている。青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
30－24	(須) 坏	16.0 —— ——	ゆるやかな外反を成し、器厚がほぼ一定の坏。やや大形。	比較的丁寧な調整によりロクロ痕が僅かに残るだけ。青灰色(ロクロ回転不明)	丁寧な調整が行なわれ、器面は滑らか。青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
30－25	(須) 坏	13.1 —— ——	ゆるやかな外反を成し、器厚がほぼ一定の小形の坏。椀状に内湾しながら展開する。	丁寧な調整が行なわれている。青灰色（ロクロ回転不明）	ややロクロ整形痕は残るが滑らかに調整を行なっている。青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
30－26	(須) 坏	12.2 —— ——	口縁が外反するが、全体に椀状に内湾しながら展開する。かなり厚い。	丁寧に調整を行なっている。青灰色（ロクロ回転不明）	丁寧な調整を行なっている。青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.7
30－27	灰釉陶器	—— —— 6.8	長頸壺の底部と思われる。高台先端はやや幅広。	丸みを帯びた胴部になると思われる。全体に灰釉がかっている。	丁寧な整形が成されている。灰白色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.4～0.5

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
31－28	(土)鉢	19.6 —— ——	口縁は外反するが、胴部は球形状に丸みを帯びている。底部欠損。	口頸部は横ナデ調整。胴部はナデ調整。赤褐色を成し、丁寧な作り。	内面黒色研磨。極めて丁寧に調整が行なわれている。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
31－29	(土)甕	15.7 —— ——	口縁がやや厚く外反し、胴部はゆるやかな脹らみをもつ。薄手の甕	横ナデ調整が行なわれている。赤褐色。ススが各所に付着。	横ナデを基調とした調整が行なわれている。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
31－30	(土)甕	—— —— 6.3	甕の底部のみ残存する資料。29に付随する可能性がある。	丁寧に調整。赤褐色	丁寧に調整。茶褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
31－31	(土)蓋	—— —— 3.3	極めて大形の蓋で、鈕から中央部までは欠損している。	生焼け状であり、風化も激しい。黄茶褐色	生焼け状であり、風化も激しい。黄茶褐色		焼成：不良 胎土：砂粒混入 器厚：0.6～1.0
31－32～33	(須)甕		破片				

10、第12号住居址遺構（第32図、図版十二）

本住居址は、調査区中央部に位置し、水田床面下部の黒褐色土層中で検出された。第9・14・18・20号住居址と複合関係を成している。第18号住居址上に貼り床をして構築した第14号住居址の上部に、さらに貼り床をして本住居址が構築され、また、第20号住居址上にもかけている。そして本住居址上部に第9号住居址がある。新旧関係は、



第32図　第12号住居址実測図〔H－12住〕（1：60）

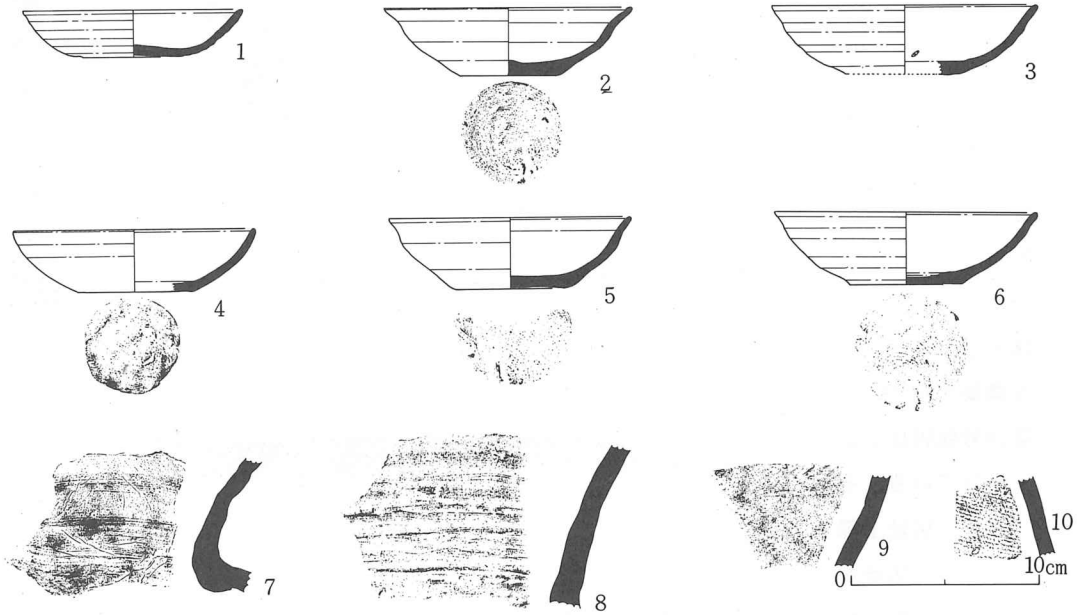
18住→14住→20住→12住→９住である。

複雑な切り合い状態の中にあっては、プランが良くつかめており、西側壁が確認できないだけであった。平面形態は、東西は不明であるが推定440～450cm、南北411cmの東西にやや長い隅丸長方形を成すものと思われる。壁高は15cmで、カマドを中心とする主軸方位は、N－87°－Eである。床面は、西壁付近が撹乱を受けており残っていないが、その他は比較的良好で、中央部からカマドにかけては固く締まり、保存状態が良かった。壁は、粘質の黒褐色であるため状態が良かった。カマドは、すでに形態を止めておらず焼土により範囲を確定した。主軸方向に45cm、幅40cmを測るが、当初はもっと規模が大きかったと思われる。カマドの手前には、扁平の礫が置かれており、カマドに対する何らかの施設であった可能性もある。

遺物（第33図、図版十二）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏と須恵器の甕であり、カマド及びカマド手前の扁平礫の周辺に集中して出土している。

坏は内面黒色を成すものは１点も出土していないのが特徴である。また、器形変化は見られるが、胎土には細かい小石が混入する外は精選されており、赤褐色を呈するものである。いわば同じ所で同じ時に焼成された資料と見ることができる。１は器高2.5cmと極めて浅く、皿に近い器形をしており、ロクロ整形痕を残すが内部は特に良く調整されている。本資料だけが糸切りの後ヘラ削り底を成している。３・４・６もこれに近い資料で、調整も同じである。２と５はロクロ整形痕を顕著に残すが、調整は丁寧に行なわれ、器形変化はあるものの滑らかである。７～10は須恵器の甕の破片で、７と８は頸部から口縁に至る資料で、７は口縁の接合部が見られるものである。10は薄手で、器面にタタキ目が成されている。



第33図　第12号住居址出土遺物実測図（１：４）

第14表　第12号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
33－1	(土)坏	11.2 2.5 5.2	底部から胴部へかかる部分が丸みを帯びるが、口縁までは直線状に外反する。浅い。	ロクロ整形痕が僅かに残るが極めて丁寧な調整。赤褐色（ロクロ右回転）	極めて丁寧な調整で、器面滑らか。赤褐色	ヘラ削り底やや中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.5
33－2	(土)坏	13.2 3.6 5.1	胴中央が脹らみ、口縁が外反する変化の多い器形。1～6までと同類に入る。	ロクロ整形痕が僅かに残るが極めて丁寧な調整。赤褐色（ロクロ右回転）	器面変化が多いが、調整は極めて丁寧。赤褐色	糸切り底。ほぼ水平であるが、内部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.5
33－3	(土)坏	14.1 3.7 5.6	丸みを帯びて展開する。1～6と同類で浅い。モミ痕が付着している。	ロクロ整形の凹凸はあるが丁寧に調整されている。赤褐色（ロクロ右回転）	滑らかな調整が行なわれている。モミ痕付着。赤褐色	一部欠損 糸切り底で、やや肥厚する。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
33－4	(土)坏	12.8 3.3 6.0	非常に滑らかな湾曲を成す器形である。浅い。1～6と同類。	丁寧な調整により、ロクロ整形痕はほとんどみられない。赤褐色	丁寧な調整で滑らか。赤褐色（ロクロ右回転）	一部欠損 胴部とほぼ同じ厚さ。ヘラ削り	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4
33－5	(土)坏	12.8 3.8 6.0	2に近似し、胴部中央が脹らみ、口縁が外反する。厚さは部分的に群がある。	丁寧な調整 赤褐色 （ロクロ右回転）	丁寧な調整 赤褐色 （ロクロ右回転）	糸切り底 胴部よりやや厚い。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.5
33－6	(土)坏	14.0 3.8 6.0	内湾状を示しながら外側へ展開する。口縁がややさらに外反。	ロクロ整形痕が残るが調整により滑らか。赤褐色（ロクロ右回転）	比較的丁寧な調整が行なわれ、滑らか。赤褐色	糸切り底 中央部が薄くなる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
33－7～10	(須)甕		破片				

11、第13号住居址

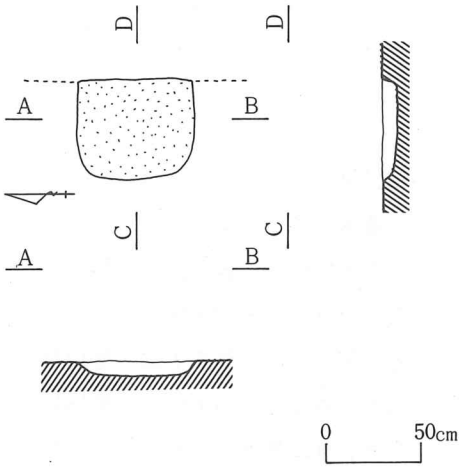
遺構（第34図、図版十三）

本住居址は、調査区中央部で検出されたが、カマドとカマド周辺に残る僅かな床面だけが存在しただけであり、大部分が破壊されていた。複合関係は、第10・11・16号住居址、第1号配石址と成しているが、本住居址の置かれる新旧関係は判明できなかった。

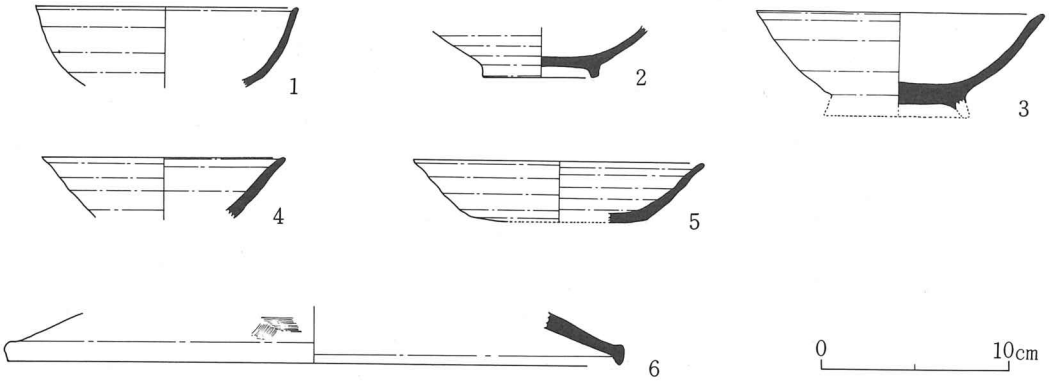
平面形態は、他の住居址の例にならって方形ないし長方形と思われ、また、カマドの位置は、東壁にあったものと考えられる。カマドは原形を全く止めないが、現存部で52cm、幅62cmを測る。舟底状に掘りくぼめられ、厚く焼土が堆積していた。

遺物（第35図、図版十三）

本住居址の状況から見て、判出する遺物を判断するのは不可能と言わざるを得なく、一定範囲に多量に出土はしたが、カマドより出土したものに限定した。土師器の坏、蓋、須恵器の坏が出土している。1～3は土師器の坏で、1は内湾しかなり丸味がある。3は足高高台の坏である。4～5は須恵器の坏、6は土師器の蓋で直径32.5cmとかなり大形である。



第34図　第13号住居址実測図（1：40）



第35図　第13号住居址出土遺物実測図（１：４）

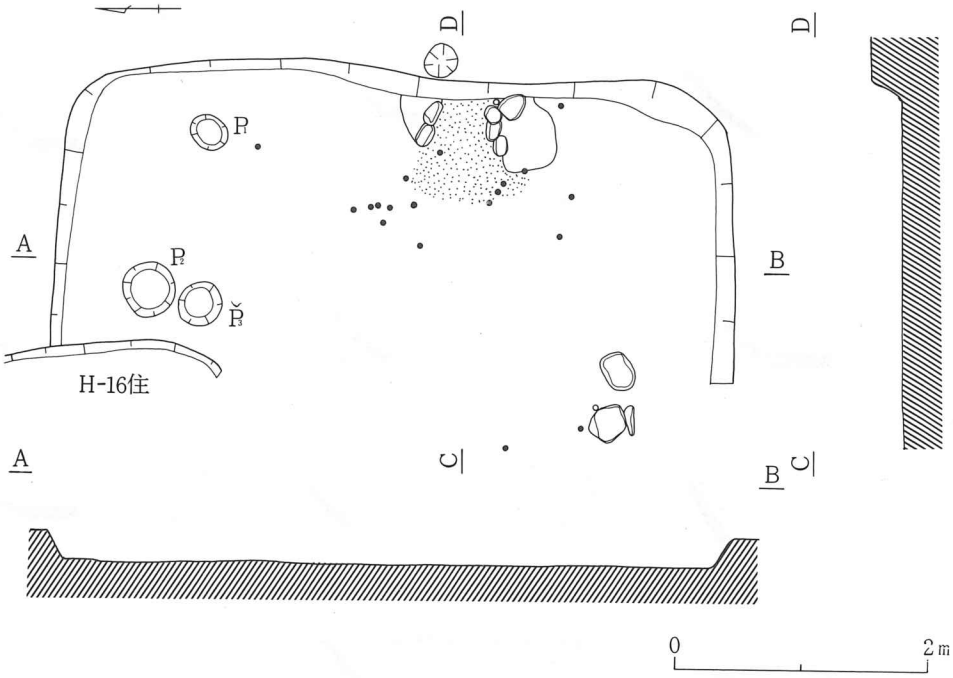
第15表　第13号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
35－1	(土) 坏	14.0 —— ——	椀状に丸みを帯びる坏で、底部が欠損。	ロクロ整形痕が僅かに残るが器面は滑らか。 茶褐色(ロクロ回転不明)	丁寧に調整されている。 茶褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.6
35－2	(土) 坏	—— —— 6.0	高台付坏の底部で、口縁は欠損。丸みのある器形になると思われる。	ロクロ整形痕が僅かに残る。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨 器面滑らか。	糸切りの後付け高台。高台はあまり高くない。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
35－3	(土) 坏	15.2 —— ——	足高高台の坏で、高台部の一部欠損。丸みを帯びて展開する。底部が極めて厚い。	ロクロ整形痕を残すが、調整が行なわれ滑らか。 茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨 器面滑らか。	一部欠損するが高台は外反すると思われる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
35－4	(須) 坏	13.0 —— ——	小形の坏で、器厚が厚くほぼ直線状に外反する器形を成す。口縁がさらに外反する。	ロクロ整形痕顕著。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著であるが調整により滑らか。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入　0.6
35－5	(須) 坏	15.4 13.2 8.7	浅い坏で、胴部から口縁部にかけての反りが強い。底部の一部欠損。	ロクロ整形痕顕著。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著。 青灰色	糸切りの後ヘラ削りを行なった可能性あり。	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入 0.3~0.5
35－6	(土) 蓋	—— —— 32.5	蓋の一部のみの資料で、かえしが僅かにみられる。	器面は滑らかに調整。 黄茶褐色（ロクロ不明）	器面は滑らかに調整。 黄茶褐色	————	焼成：やや良 胎土：砂粒混入 器厚：0.6～0.9

12、第14号住居址

遺構（第36図、図版十四）

本住居址は、調査区中央部に位置し、水田床面下部の黄色ローム層と黒褐色土層中に検出された。第９・11・12・16・18・21号住居址と極めて複雑な複合関係を成しており、その状況を見ると、第９号住居址の下部に第12号住居址が存在し、さらにその下部に本住居址が存在している。また、本住居址の下部には第18号住居址がある。第16号住居址は第11号住居址に切られているが、本住居址は第16号住居址に切られている。第21号住居址は、本住居址に切られたものと思われるが、判然としない。従って、把握できる限りの新旧関係は、21住→18住→14住→16住→12住→11



第36図　第14号住居址実測図〔Ｈ－14住〕（１：60）

(cm)

規模 ＼ pit・No.	P1	P2	P3
長径・短径	30・26	32・44	34・35
深	22	25	23

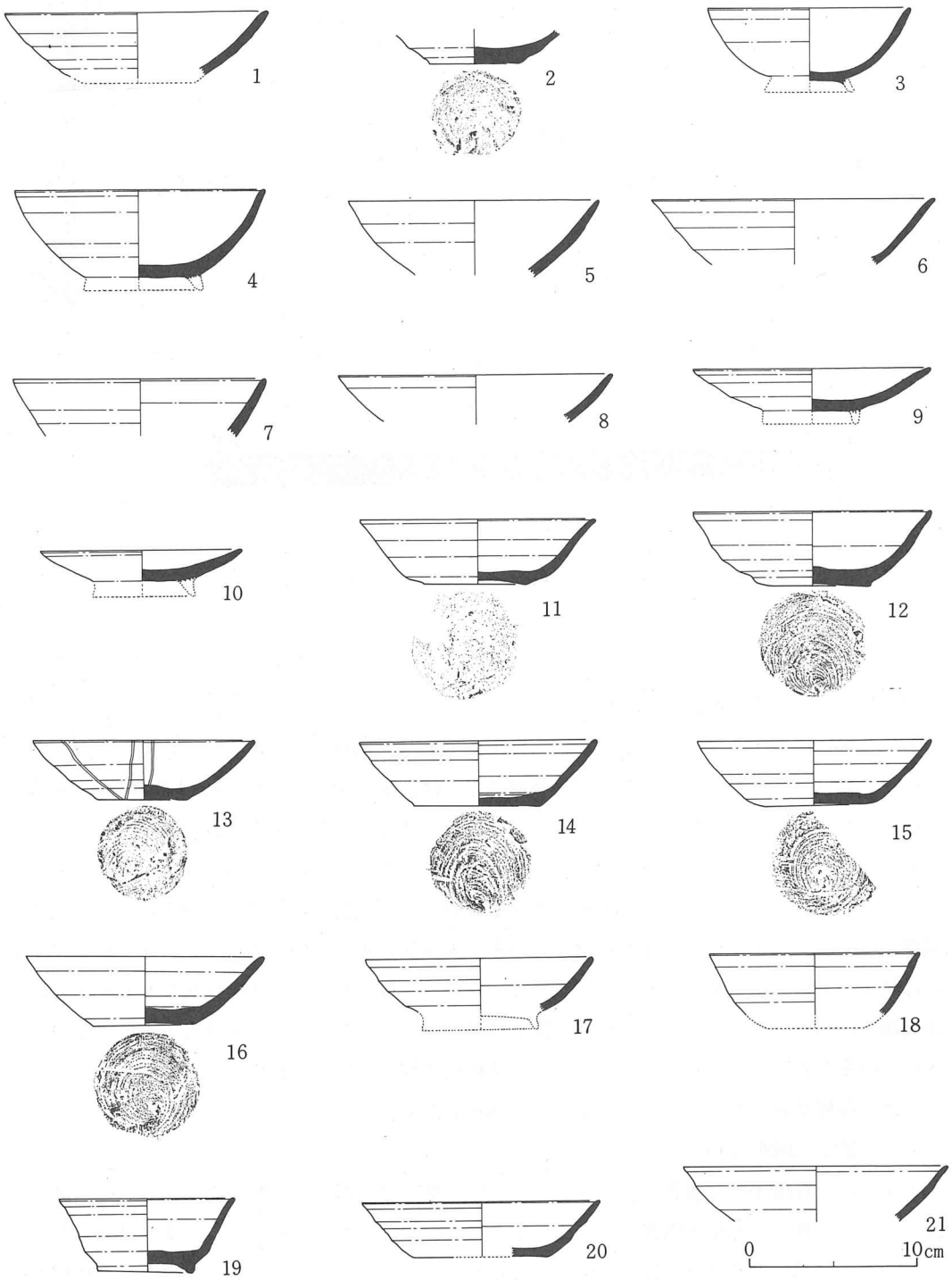
住→９住となる。今後の検討も必要かと思われる。

本住居址の現存する箇所は、プランの東側半分であり、西側は切り合いにより存在していなかった。平面プランは、南北541cmを測る隅丸方形ないしは隅丸長方形になると思われる。壁高は27cmと深い。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－90°－Ｅでほぼ東向とみてよい。カマドは、東壁中央よりやや南側に位置し、比較的良好な状態で検出することができた。主軸方向に90cm、幅は床面に接する部分で120cm、袖石部で最大70cmを測る。石組みを基調にするが、大量の粘土により補強している。火床面は東壁に向って上り、火床上面及び下部には焼土が堆積していた。床面は、東壁に近い程ローム層となり、第18号住居址が存在する部分は黒褐色の貼り床になっており、全体に極めて固い床であった。残存する壁は、ローム層を掘り込んでいるためしっかりしていた。柱穴は３基検出され、P_1～P_3ともに底部まで突き固めたように固く良好であった。床面上には扁平礫が存在した。

遺物（第37・38図、図版十四）

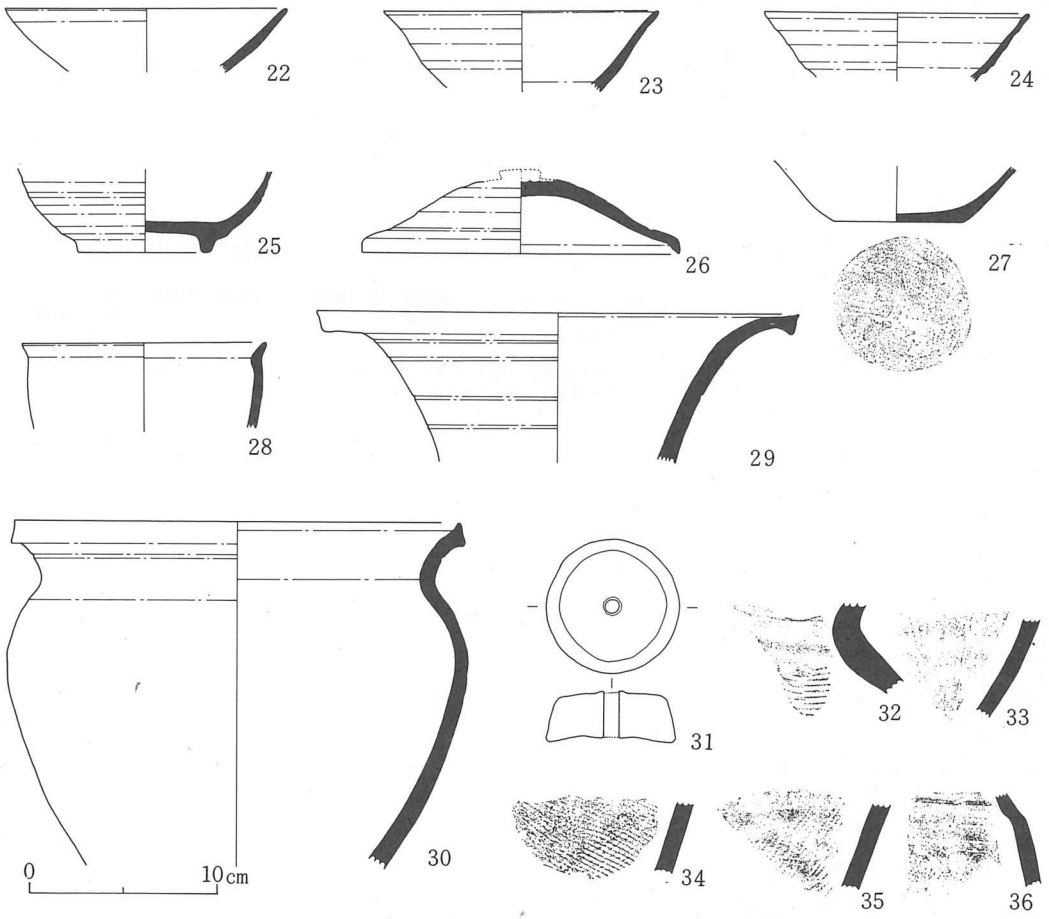
本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・皿・甕、須恵器の坏・長頸壺・蓋・甕・紡錘車がある。出土状態は、カマド内部及び周辺に集中しており、また扁平石周辺にも僅かに見られた。

土師器と須恵器の割り合いは、圧倒的に須恵器が多く、須恵器に土師器が伴うという様相を見せていた。１～８は土師器の坏で、２と５を除いては内面黒色が成されている。１・６～８は、



第37図　第14号住居址出土遺物実測図（１：４）

胴部から口縁部にかけてほぼ直線状になっており、口縁そのものに至って僅かに外反している。３・４は高台付であり、５～８も高台が付いていたのではないかと思われる。３は椀状の丸味をもっており、口縁部がやや肥厚している。外面・内面ともに他に比較して極だって良好な整形が行なわれている。９と10は土師器の皿形土器で、内面黒色であり、高台が付いている。底部からゆるやかに外反し、口縁部に至っている。整形が極めて良い。11～24は須恵器の坏で、13と20は中でも浅い。19は高台が付いており、茶椀状の特異な器形をなし、口縁直径10.5cm、器高4.4cm、底径5.5cmと小形であり、胎土には夾雑物が混入し、表面がアバタ状になっている。胎土から見て当地方で焼成されたと思われる。25は壺形土器と思われ、底部が内部に丸く湾曲しており高台が付けられている。整形は大変良く、胎土も精選されている。26は須恵器の蓋でかえしが付く。27は土師器の甕で、内外面及び底部はヘラ削りにより調整されており、黄褐色を呈し、胎土に砂粒が混入している。28は須恵器の甕で、僅かに口縁部が「く」の字状に外反し、その分だけ内側に張り出している。頸部直下が僅かに湾曲するが、あまり脹らみをもたずに底部に至っている。口



第38図　第14号住居址出土遺物実測図（１：４）

縁部直径は13cmを測る。29・30・32～36は須恵器の甕で、29は長頸状の頸部から口縁部の資料で、口唇は折り返しとなり肥厚している。外面には平行する沈線状の整形痕が残っている。口縁はラッパ状に大きく外反しており、直径25.5cmを測る。胴部は欠損しているが大きく丸味をもつものと思われる。30は口縁部直径23.8cmを測り、口唇は肥厚し口縁部は「く」の字状に外反する。頸部の直下が最大径で24.4cmを測り、大きく張り出している。胎土には砂粒が混入しているが、滑らかで整形・焼成とも良好である。31は須恵質の紡錘車で、直径7.1×7.1cm、厚さ2.4cmで、中心部に直径0.8cmの穴があけられている。表面は丸味を帯び、裏面は表面の丸みに沿って平行するように内側にカーブしている。

第16表　第14号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
37－1	(土) 坏	15.6 —— ——	ほぼ直線状に展開し、口縁がやや肥厚する。足高高台の坏になる可能性もある。	ロクロ整形痕が残る。 赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨 器面滑らか。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
37－2	(土) 坏	—— —— 5.3	坏の底部の資料。 全体にかなり厚手になると思われる。	ロクロ整形痕が顕著。 茶褐色 （ロクロ右回転）	磨きが成されている。 茶褐色	糸切り底 極めて厚い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.9
37－3	(土) 坏	12.0 —— ——	椀状の丸みをもつ坏で、口縁がやや肥厚する。高台部欠損。	微妙な器体変化はあるが丁寧な調整が成されている。茶褐色（ロクロ右）	内面黒色研磨で、極めて丁寧に調整され滑らか。	糸切りの後付け高台。高台部欠損。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
37－4	(土) 坏	14.9 —— ——	椀状の丸みをもつ高台付の坏で、底部から口縁に対してしだいに薄くなる。	比較的丁寧に調整されており、ロクロ痕は目立たない。茶褐色(ロクロ右)	内面黒色研磨	糸切りの後付け高台。高台部欠損。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
37－5	(土) 坏	14.9 —— ——	胴部がやや丸みをもつが、ほぼ直線状に外反する。	調整により滑らか。 赤褐色 （ロクロ右回転）	器面滑らかに調整。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
37－6	(土) 坏	16.9 —— ——	底部からほぼ直線状に展開するが、口唇がやや外反する。	ロクロ整形痕僅かに残す。 一部黒色研磨　茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
37－7	(土) 坏	15.0 —— ——	ほぼ直線状に、しかも急な立ち上がりをみせる。全体に器厚が厚い。	滑らかに調整 茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.7
37－8	(土) 坏	16.3 —— ——	ほぼ直線状に展開し、口唇が平になる。	滑らかに調整 茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
37－9	(土) 皿	14.2 —— ——	底部よりゆるやかに外反し、口縁が水平に近くなる。	僅かにロクロ整形痕を残すが極めて丁寧な調整。 茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨 極めて丁寧な調整	高台部欠損	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.6
37－10	(土) 皿	12.0 —— ——	9よりさらにゆるやかに外反する。	口縁直下に僅かなロクロ整形痕を残すのみで極めて丁寧な調整。茶褐色	内面黒色研磨 極めて丁寧な調整 （ロクロ右回転）	高台部欠損	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.7
37－11	(須) 坏	14.0 3.9 6.0	胴中央部より、ゆるやかな「く」の字状に口縁が外反する。底部中央がやや薄くなる。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕が残るが、全体に滑らか。 青灰色	糸切り底 中央部がやや盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
37－12	(須) 坏	14.1 4.4 6.5	比較的深みがあり、全体の整形（器形変化）が荒い坏。底部が厚い。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著であるが、滑らかに調整。 青灰色	糸切り底。底部全体が極めて厚い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.6
37－13	(須) 坏	13.2 3.6 5.7	小形で浅い坏。底部からやや内湾ぎみに展開する。器厚にばらつきがある。	ロクロ整形痕顕著 火襷　青灰色 （ロクロ右回転）	外面に比較して滑らかな調整を行なっている。 火襷　青灰色	糸切り底 中央部が極端に厚くなる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5

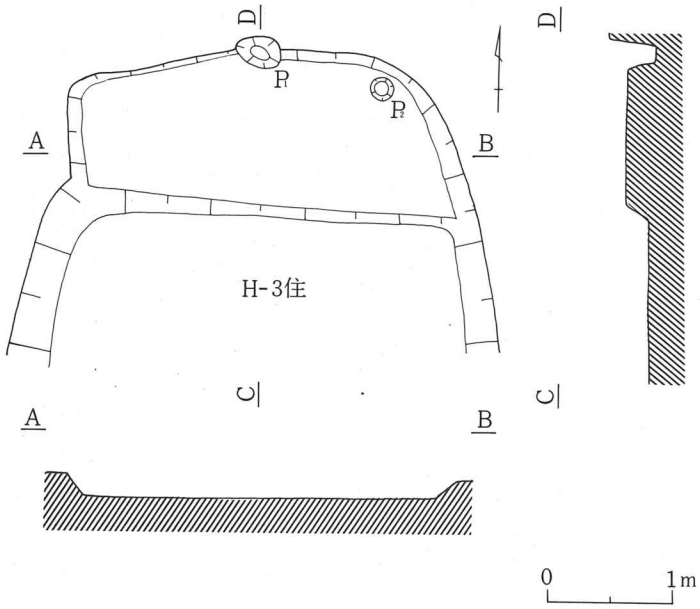
挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	底部	焼成・胎土他
37－14	(須)坏	14.1 3.9 7.5	底部から直線状に口縁まで外反する。ロクロ痕が目立つ。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著 青灰色	糸切り底 中央部が薄い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
37－15	(須)坏	13.9 3.8 6.4	底部よりやや内湾しながら口縁部まで展開する。口唇は丸みを帯びる。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著 青灰色	糸切り底。内面の周囲が凹む。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
37－16	(須)坏	14.2 4.1 6.0	底部が厚く、口縁部までやや内湾ぎみに展開する。	ロクロ整形痕が残る。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕が残るが、比較的丁寧に調整。 青灰色	糸切り底 かなり厚い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.7
37－17	(須)坏	13.6 —— ——	内湾ぎみに口縁まで展開する。底部欠損。高台が付けられていた可能性がある。	ロクロ整形痕残る。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕が残る。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
37－18	(須)坏	12.6 —— ——	口径が小さい割り合いに深い器形を成している。椀形に近い。	ロクロ整形痕が残る。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕が残る。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入　0.5
37－19	(須)坏	10.5 4.4 5.5	底部からやや外反しながら展開する。茶椀形を呈するが坏の分類に入るものと思われる。	自然釉の付着によりロクロ痕がかなり消えている。暗青色（ロクロ右回転）	丁寧な調整をしているが胎土が荒いためざらついている。青灰色	胴部に比較してかなり厚く、高台が付けられる。	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入　0.4
37－20	(須)坏	14.2 3.3 8.1	底径が大きく扁平な器形を成す。底部から直線状に口縁まで展開。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	調整が行なわれ器面は滑らか。 青灰色	糸切り底	焼成：良好 胎土：小石等多量に混入　0.5
37－21	(須)坏	15.8 —— ——	丸みを帯びながら展開するが、口縁直下は括れ、口縁は外反する。	口縁直下にロクロ整形痕顕著。白灰色 （ロクロ右回転）	荒い調整が行なわれている。 白灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
38－22	(須)坏	15.0 —— ——	やや内湾しながら展開する。	比較的丁寧な調整が行なわれている。青灰色 （ロクロ右回転）	比較的丁寧な調整が行なわれている。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
38－23	(須)坏	14.1 —— ——	口縁直下で、ゆるく「く」の字状に外反するが、全体にほぼ直線状に展開する。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	調整が行なわれており、ロクロ整形痕が消えている。青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5～0.6
38－24	(須)坏	14.1 —— ——	ほぼ直線状に口縁まで展開する器形で、口唇は丸みを帯びる。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	外面に比べればロクロ痕が少なく滑らか。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.4
38－25	(須)長頸壺	—— —— 7.0	長頸壺の底部と思われるが、確実なことは言えない。かなり丸みを帯びる器形となる。	ロクロ整形痕が残る。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕が残る。 青灰色	丁寧な整形により高台が付けられている。	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.4～0.6
38－26	(須)蓋	—— —— 17.0	比較的大形の坏とセットになる蓋。かえしが付き、山形状の器形となる。鈕欠損。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ右回転）	丁寧な調整が行なわれている。		焼成：やや良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
38－27	(土)甕	—— —— 7.0	甕の底部で他は欠損している。全体器形不明	ヘラ削りにより整形。 黄褐色	ヘラ削りにより整形 黄褐色	ヘラ削り底	焼成：良好 胎土：砂粒・小石混入 0.4~0.5
38－28	(須)甕	13.0 —— ——	かなり小形の甕で、口縁が僅かに外反し、肩をあまり張らずに底部に至るものと思われる。	比較的よく調整されている。青灰色 （ロクロ右回転）	比較的よく調整されている。青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
38－29	(須)甕	25.5 —— ——	中形の甕の口縁部で、他は欠損している。自然釉が全面に付着している。受口状。	横ナデ整形が丁寧に行なわれている。 黒灰色	横ナデ整形が行なわれている。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.9
38－30	(須)甕	23.8 —— ——	小形の甕で、口縁が「く」の字状に外反し、肩部が最も張らむ器形を成す。	タタキとナデの整形痕がみられる。 青灰色	タタキとナデの整形痕がみられる。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6～1.0
38－31	(須)紡錘車	7.1×7.1 厚さ2.4	ロクロにより造られた須恵質の紡錘車。				
38－32	(須)甕		破片				

13、第15号住居址

遺構（第39図、図版十四）

本住居址は、調査区の中央部に位置し、水田床面の下部で検出された。第２・３・21号住居址と複合関係を成している。本住居址は、第３号住居址に切られ、また、本住居址と第３号住居址は、第２号住居址を切って存在し、また第21号住居址は、本住居址の一部を切って存在していたことから、新旧関係は、２住→15住→21住→３住ということになる。

すでに第３号住居址に、プラン南側のほとんどが切り取られてしまっており、北側の一部が検出できただけであった。平面形態は、東西380cmで、隅丸方形ないしは隅丸長方形であったかと思われる。主軸方位は、カマドが東側にあったと想定し、北側の壁を基準にして測定すると、N－90°－Eを測り、ほぼ方位を基準に構築されたものと思われる。床面は、部分的に固い面を残すが、大部が軟弱であった。ピットは２基検出されている。



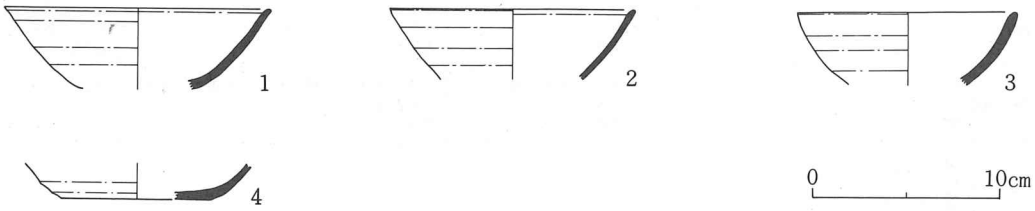
第39図　第15号住居址実測図〔H－15住〕（１：60）

遺物（第40図・図版十四）

本住居址からは、土師器の坏が少量出土しているだけで、他の遺物は出土しなかった。恐らく住居址の切り合いのためであろう。１～４は全て内面黒色である。１～３は器形に丸味をもっており、ロクロ整形痕が顕著である。４は底部の資料であるが糸切り底かどうかは判明しない。

(cm)

規模 ＼ pit・No.	P1	P2
長径	37	19
短径	24	19
深	38	17



第40図　第15号住居址出土遺物実測図（１：４）

第17表　第15号住居址出土遺物一覧表

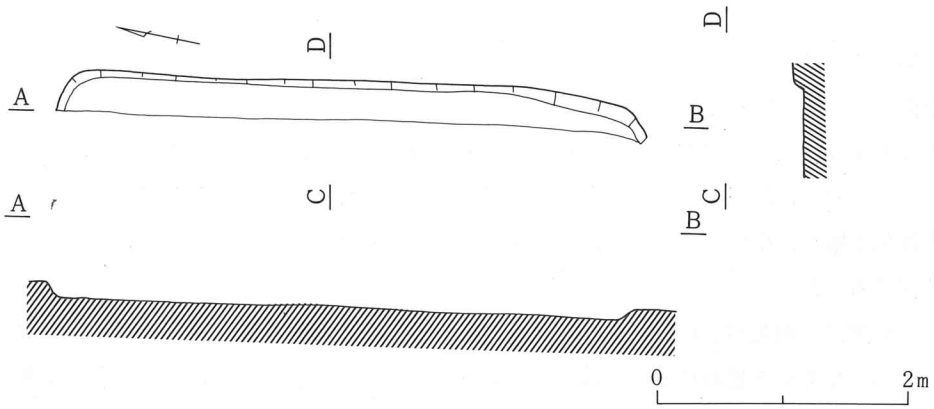
挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
40－1	(土) 坏	14.2 —— ——	椀状に丸みをもちながら展開し、口唇がやや外反する。器厚はほぼ一定。	滑らかに調整されている。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
40－2	(土) 坏	13.1 —— ——	やや丸みを帯びながら展開する。口縁に至る程厚くなる。全体に薄手。	ロクロ整形痕が残るが滑らかな調整。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
40－3	(土) 坏	11.7 —— ——	椀状にかなり丸みをもって内湾しながら展開する。口縁部に至る程厚くなる。	滑らかに調整されている。暗茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
40－4	(土) 坏	—— —— 8.0	比較的大形の坏底部で他は欠損している。	ロクロ整形痕が胴部に残る。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨	糸切り底 全体に薄い。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4

14、第16号住居址

遺構（第41図、図版十四）

本住居址は、調査区の中央部に位置し、水田床面の下部で検出された。黄色ローム層を掘り込んで構築されていたため検出は比較的容易であったが、複雑な複合関係を成しており、その箇所の検出は難しかった。複合関係は、第11・13・14・17・18号住居址と成し、本住居址は、第18号住居址上に貼り床をする第14号住居址を切り、第11号住居址に切られている。また、第17号住居址を本住居址は切っている。従って新旧関係は、18住→14住→17住→16住→11住になるかと思われるが、第13号住居址は、カマドしか存在していないため、新旧関係の位置をどこに置くかは不明である。

本住居址は、東側の壁とその直下の床が検出されただけである。平面形態は、南北471cmを測り、隅丸方形ないしは隅丸長方形のプランになるかと思われる。壁高は、8cmであるが、あまり締っ

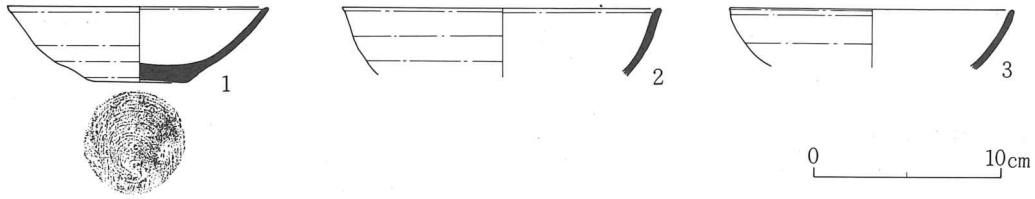


第41図　第16号住居址実測図〔H－16住〕（1：60）

てはいなかった。床面は、壁直下に見られたが、僅かに固い面が残るだけであり、切り合いによる撹乱の方が多かった。カマドは検出できなかった。

遺物（第42図、図版十四）

本住居址より出土した遺物は、土師器の坏であり、壁際に位置するもののみを取り扱った。1はほぼ完形であり、滑らかな湾曲を成している。ロクロ整形痕を部分的に残すが、丁寧な調整が行なわれている。底部は糸切りで、ロクロは右回転である。胎土に小石が混るが焼成良好な資料である。2はかなり椀状に丸みをもつ坏で、口縁部直径17cmと大形である。3は口縁部が内湾しているが、器形の形態は1と近似するものである。



第42図　第16号住居址出土遺物実測図（1：4）

第18表　第16号住居址出土遺物一覧表

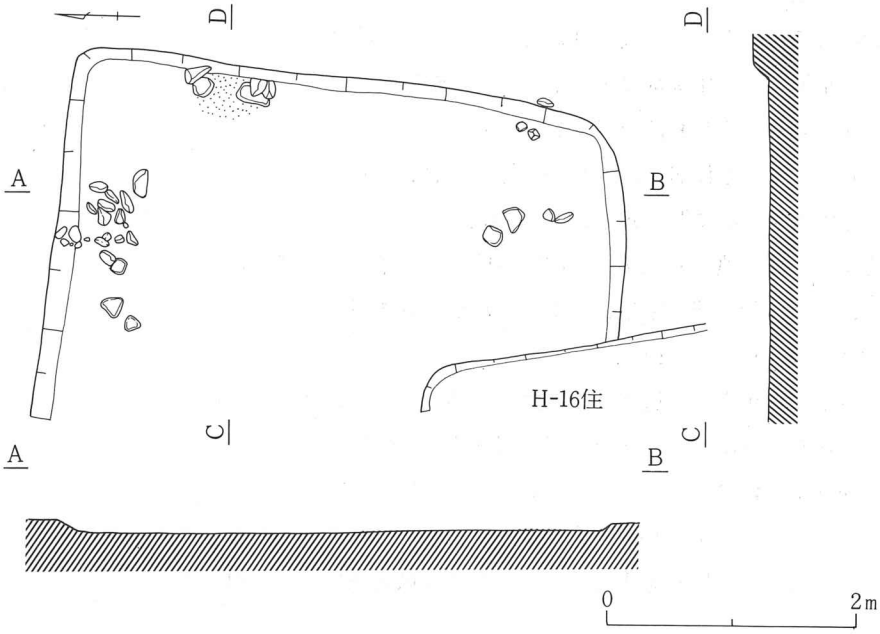
挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
42－1	(土)坏	13.3 4.0 5.0	胴中央部で張らみ、そこからゆるやかに丸みを帯びながら展開する。	ロクロ整形痕を部分的に残すが滑らかな調整をしている。赤褐色	内面黒色研磨（ロクロ右回転）	胴部に比べかなり厚い。糸切り底	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4
42－2	(土)坏	17.0 —— ——	椀状に丸みを帯びながら口縁まで立ち上がる。器厚はほぼ一定。	ロクロ整形痕を僅かに残すが滑らか。茶褐色（ロクロ右回転）	滑らかに調整されている。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
42－3	(土)坏	15.1 —— ——	2と同類で椀状に丸みを帯びて口縁まで立ち上がる。器厚はほぼ一定。	ロクロ整形痕を僅かに残すが滑らか。茶褐色（ロクロ右回転）	滑らかに調整されている。内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4

15、第17号住居址

遺構（第43図、図版十四）

本住居址は、調査区中央部に存在する住居址群の北端に位置し、水田床面の下部より検出された。この付近一帯は、黄色ローム層が厚く堆積している地域であるが、本住居址の西側から西方へ黒褐色土層が河岸線まで続いている。複合関係は、本住居址が、第16号住居址に切られるという状況であった。

平面形態は、南北471cmであり、西壁は検出できなかったが、想定すると隅丸方形ないしは隅丸長方形になるかと思われる。主軸方位は、カマドを中心としてN－90°－Eで、ほぼ東向きにカマド位置をとっている。壁高は、12cmである。床面は、タタキ等は見られなかったが、比較的良く締っていた。カマドは、東壁の北側に位置しており、全容を止めないが袖石が両側に残ってい



第43図　第17号住居址実測図〔Ｈ－17住〕（１：60）

た。内部には、僅かな焼土が残っていた。北壁際の床面上には、河原石が集中しており、床面にくい込む状態のものもあった。また、南東コーナー付近にも礫が存在した。

尚、本住居址からは、土師器の細片が出土しているが、図上復元をすることはできなかった。

16、第18号住居址

遺構（第44図、図版十五）

本住居址は、調査区の中央部に位置し、水田床面の下部で検出されたが、極めて複雑な複合関係を呈しており、その中にあって最下部より検出された。複合関係は、第９・11・12・14・16・21号住居址と成しており、第14号住居址以外は間接的な関係を呈するものである。本住居址の上面に第14号住居址が貼り床をして構築していた。この第14号住居址の上面に第９～12・16号住居址が存在している。これらの新旧関係を見ると、21住→18住→14住→16住→12住→11住→９住となるものと考えられる。

平面形態は、東西328cm、南北369cmを測る隅丸の長方形を呈しているが、南壁が最も短く、北側に向って徐々に広がっており、台形状に近い不正長方形と見ることもできる。プランの南東コーナーには、100×85cmの大きな土壙が存在しており、本住居址に伴うものかどうか確認できなかった。床面は、南北に切ってカマド側半分は黄褐色ローム、西側は黒褐色土であり、いずれも一様に極めて固く締っており、移植ゴテが刺さらない程であった。この土質の違いは、この付近

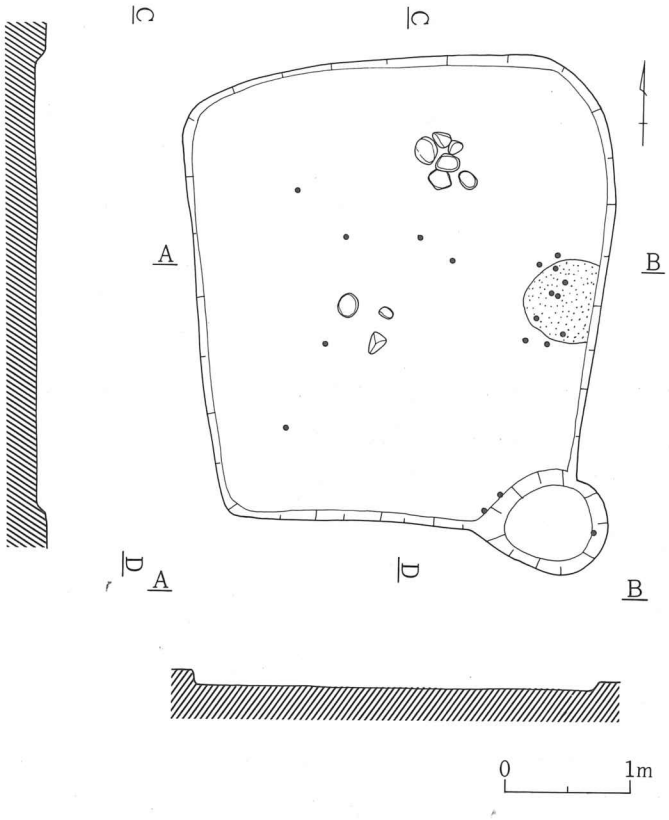
一帯の、黄色ロームと黒褐色土の変化する箇所に当っていたためであり、本住居址の構築の時の人為的なものではない。壁高は８cmであり、やはり床面の土質の違い通りの変化が見られた。カマドは、東壁のほぼ中央部に位置し、主軸方位に対し63cm、幅65cmを測る。すでに全容を止めていないが、焼土により範囲を確定した。北壁に近い床面上には、扁平な河原石が敷き並べるように存在しており、本住居址の何らかの施設と思われる。また、中央部にも存在した。尚、主軸方位は、カマドを中心にしてＮ－90°－Ｅを示す。

本住居址は、一連の複合関係を成す住居址群の中にあっては古く位置づけることができるものであり、また、最下部で検出されたにもかかわらず保存状態が大変良いものであった。

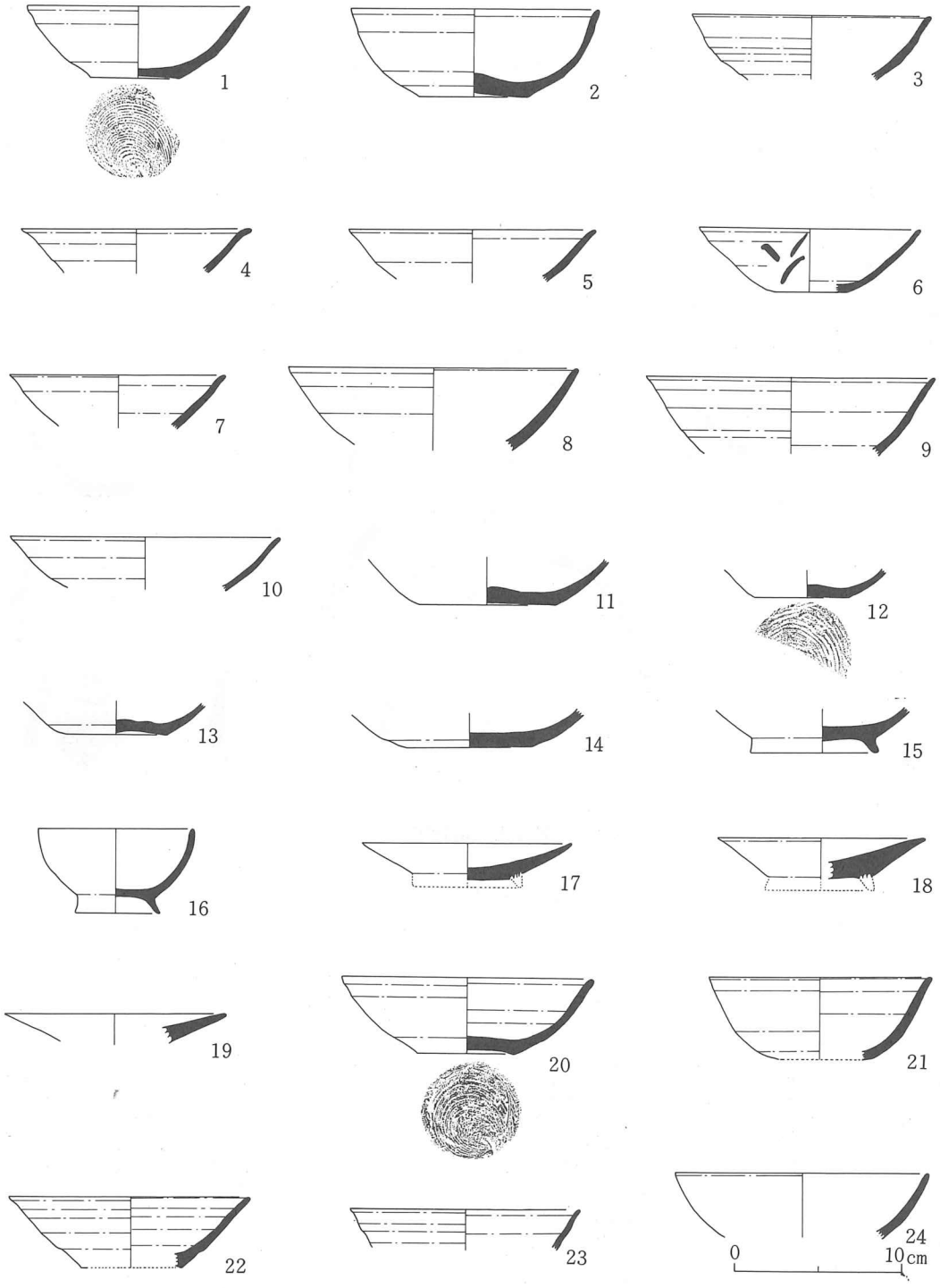
遺物（第45・46図、図版十五）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・皿・甕、須恵器の坏・甕であり、床面全体から出土しているが、特にカマド内及び周辺部と床面中央部、それに土壙付近に集中して見られた。

１～16は土師器の坏で、２・３・６・７・９以外は内面黒色である。器形は、内湾して丸味の強いもの１～３・７～10や、直線に近い状態で口縁部まで至るもの４～６がある。１は底部まで良く残っており糸切りを成している。２は口縁直径14.7cmに対して、5.2cmと深い。８～10は、大形の坏で、口縁直径は、８が17.2cm、９が17.2cm、10が18.2cmを測る。６は器面に墨書が見られるものであるが、判読はできない。11～15は底部の資料で、いずれも糸切りが行なわれている。15は高台付の坏で、本住居址からは高台の付くものは少なかった。16は口縁部直径9.3cm、器高５cm、底径５cmの非常に小形の坏で、形態から見て椀としてもよいように思える。器厚は0.4cmと薄いが焼成は良好で、外面は黄色～茶褐色をしている。ロクロ整形痕がほとんど見られず、内外面ともに極めて良好な調整をしている。高台はやや外反ぎみに付けられており、先端が薄くなってい

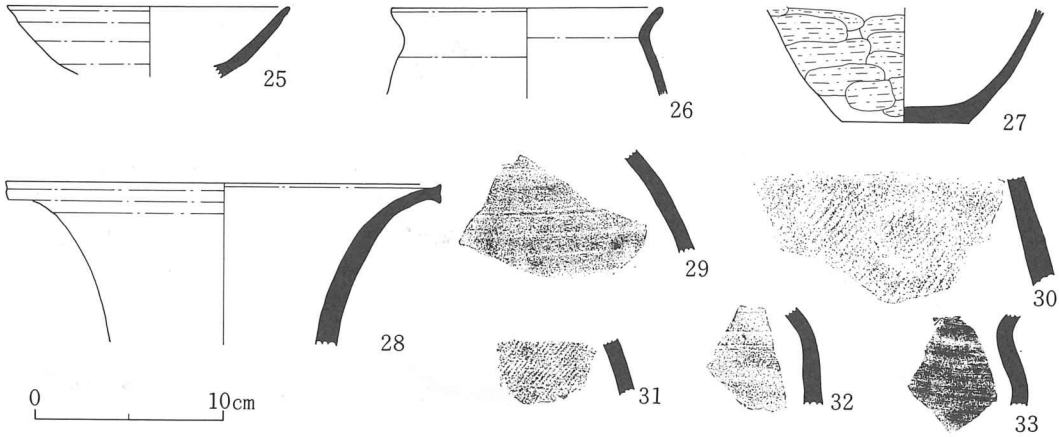


第44図　第18号住居址実測図〔Ｈ－18住〕（１：60）



第45図　第18号住居址出土遺物実測図（１：４）

る。17～19は土師器の皿形土器であり、いずれも内面黒色であるが、色調がうすい。器形は、底部外面がほぼ平らで高台が付き、高台の付け口から口縁に向って直線状に至っている。また内面も中心に向って口縁部からほぼ直線状に整形されているが、底部の厚さが17は0.7cm、18が0.7cm、19が0.5cmと厚いため、内面は外面の急な立ち上りに対して皿状に平らに近い状態になっている。20～25は須恵器の坏であり、土師器に比較すると出土量は少ない。20は口縁部直径15cm、器高14.5cm、底径5.8cmを測り、底部は糸切りである。ロクロ整形痕を残すが、内外面ともよく調整されており、灰白色を呈し、焼成良好の資料である。22と23は、丸味をもたず直線状に立ち上っており、ロクロ整形痕を強く残している。26・27は土師器の甕で、口縁部と底部の資料である。27はヘラ削りが行なわれている。28～33は須恵器の甕で、28は口縁部から頸部にかけての資料であり、口縁が折り返しにより肥厚し、段状にくびれが見られる。



第46図　第18号住居址出土遺物実測図（１：４）

第19表　第18号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
45－1	(土)坏	13.3 4.2 5.3	ゆるやかに内湾しながら展開する器形で、口縁直下に括れがみられる。	ロクロ整形痕が僅かにみられる。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨	糸切り底 中央部が薄くなる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
45－2	(土)坏	14.7 5.2 6.4	椀状にかなり湾曲し、胴中央部より垂直状に立ち上がる。胴部は薄手。底部は厚手。	口縁直下に段状のロクロ痕が残る。暗茶褐色 （ロクロ右回転）	比較的滑らかに調整されロクロ整形痕がみられない。	糸切り底 厚手	焼成：やや良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
45－3	(土)坏	14.2 —— ——	丸みを帯びながら口縁まで展開する。	胴中央部にロクロ整形痕顕著。茶褐色 （ロクロ回転不明）	比較的滑らかに調整。 茶褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
45－4	(土)坏	13.7 —— ——	胴中央より直線状に口縁に至る。口縁は「く」の字状に外反。	ロクロ整形痕を残す。 茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
45－5	(土)坏	14.6 —— ——	やや丸みを帯びるが直線状に口縁に至る。口縁が微妙に外反。	ロクロ整形痕が残る部分はあるがほぼ滑らか。 茶褐色(ロクロ回転不明)	内面黒色研磨	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	底部	焼成・胎土他
45－6	(土) 坏	13.1 3.8 4.8	底部よりほぼ直線状に展開する。全体に薄手で、器面に墨書がある。	ロクロ整形痕を僅かに残すが器面は滑らか。 茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	僅かに残存するだけなので詳細は知れない。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
45－7	(土) 坏	12.8 —— ——	ほぼ直線状に口縁部に至る。口縁直下がやや括れる。	滑らかな調整が行なわれている。赤褐色 （ロクロ回転不明）	滑らかな調整が行なわれている。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
45－8	(土) 坏	17.2 —— ——	大形の坏。椀状にゆるやかに湾曲しながら展開する。 口縁に変化なし。	滑らかに整形が行なわれている。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
45－9	(土) 坏	17.2 —— ——	胴中央部がやや脹らみ、そこから口縁まで外反する。	ロクロ整形痕が僅かに残るが器面滑らか。赤褐色 （ロクロ右回転）	器面滑らかな調整。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
45－10	(土) 坏	18.2 —— ——	微妙に脹らみながら展開する。 口縁が僅かに外反。 全体に薄手。	僅かにロクロ整形痕が残るが滑らか。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
45－11	(土) 坏	—— —— 8.1	大形坏の底部と僅かな胴部までの資料。底部はかなり厚い。	滑らかな調整がみられる。 暗茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切り底	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.7
45－12	(土) 坏	—— —— 5.5	坏の底部資料。 丸みを帯びて展開すると思われる。	滑らかに調整。 茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切り底	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
45－13	(土) 坏	—— —— 6.0	坏の底部資料。 丸みを帯びて展開すると思われる。	滑らかに調整。 外面黒色研磨。 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切り底	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
45－14	(土) 坏	—— —— 7.5	大形坏の底部。 11に近似するかなり大形の坏になると思われる。	滑らかに調整。 暗茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	糸切りの後ヘラ削り。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
45－15	(土) 坏	—— —— 7.5	高台付坏の底部。	滑らかに調整。 茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	高台がやや外反する。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
45－16	(土) 坏	9.3 5.0 5.0	小形の椀形土器そのものといえるが、坏として分類する。 高台が付き極めてまろやか。	滑らかに調整を行なっている。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。 極めて丁寧に調整されている。	高台が外反する。 足高。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
45－17	(土) 皿	12.5 —— ——	高台を欠くが、直線状に展開する皿形土器。底部が厚く、口縁に近くなる程薄くなる。	極めて丁寧な調整が行なわれている。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	高台が欠損している。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.7
45－18	(土) 皿	12.4 —— ——	底部がかなり厚く、口縁に至って尖る皿形土器の破片。	極めて丁寧な調整が行なわれている。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	高台が欠損	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.7
45－19	(土) 皿	13.2 —— ——	底部がかなり厚く、口縁に至って尖る皿形土器の破片。	極めて丁寧な調整が行なわれている。黄褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	底部全体が欠損	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
45－20	(須) 坏	15.0 14.5 5.8	底部から口縁にかけて内湾しながら展開する。胴部に対して底部が厚くなる。	ロクロ整形痕が残る。 灰白色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕は残るが滑らかに調整している。 灰白色	糸切り底 中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.5
45－21	(須) 坏	13.3 4.9 5.2	全体に丸みのある器形を成し、口径に対して深いのが特徴である。	ロクロ整形痕を残す。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕を残すが、滑らかに調整している。 青灰色	糸切り底と思われるが欠損している。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
45－22	(須) 坏	14.4 4.2 6.0	底部から直線状に口縁に至る器形を成す。 底部欠損。	ロクロ整形痕顕著。 青灰色 （ロクロ右回転）	ロクロ整形痕顕著。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
45－23	(須) 坏	13.7 —— ——	口縁部の資料であるが、底部から直線状に展開する器形になるかと思われる。	ロクロ整形痕顕著。 青灰色 （ロクロ回転不明）	ロクロ整形痕顕著。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
45－24	(須) 坏	15.1 —— ——	椀状に丸みのある器形になる。	器面は滑らかに調整されている。青灰色 （ロクロ回転不明）	滑らかに調整されている。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整			焼成・胎土他
				外面	内面	底部	
46－25	(須)坏	15.0 —— ——	椀状に丸みのある器形になる。底部付近に至る程厚手になる。口縁直下に括れがある。	ロクロ整形痕顕著 青灰色 （ロクロ回転不明）	比較的滑らかに調整されている。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
46－26	(土)甕	13.2 —— ——	口縁部が「く」の字状に外反する甕の口縁部資料。口縁は丸みをもつ。	ナデ整形により器面滑らかである。茶褐色	ナデ整形により器面滑らか。黒褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.7
46－27	(土)甕	—— —— 6.8	底部と胴部の一部を残す資料。中形の甕になると思われる。	横方向を主体としたヘラ削り痕顕著 赤褐色	ナデ整形が行なわれている。 暗茶褐色	ヘラ削り ほぼ水平	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
46－28	(須)甕	23.1 —— ——	甕の口縁から頸部にかかる部分の資料。	自然釉が全面に付着し、黒褐色を呈している。	自然釉が付着し、灰白色部分が多い。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6～1.2
46－29～33	(須)甕		破片				

17、第19号住居址

遺構（第47図、図版十五）

本住居址は、調査区の南部で、河岸線にやや寄った所に位置し、現状は畑であったが、かつて造成された水田の床面直下で検出された。黄色ロームが堆積する地点であるが、大礫も所々に点在していた。第22号住居址を切って構築されており、新旧関係は、22住→19住となる。

平面形態は、東西400cm、南北443cmを測り、南北にやや長い隅丸長方形を成し、特に南西コーナーは丸味が強い。主軸は、カマドを中心にしてN－90°－Eである。壁高は、14cmを測り、全体にほぼ平均しているが、河岸線に沿って地山がやや傾斜しているため、僅かに東側が深くなっている。カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、主軸方位に沿って100cm、幅80cmで、すでに全容を止めてはいなかったが、火床部が良く残っており、焼土の堆積が良い状態で見られ、また、カマドに使用したと見られる礫が焼土内や手前に散乱していた。床面は、全体に極めて良好な状態で残っており、固く良く締っていた。特にカマドの手前からプランの中央部にかけては固さが目立った。柱穴は、壁にかけて３基、東壁側に２基検出された。コーナーにあるP_1・P_3・P_5は、他の２基に比較して規模が大きく深い。P_5の底部には、扁平な河原が置かれていた。

遺物（第48・49図、図版十五・十六）

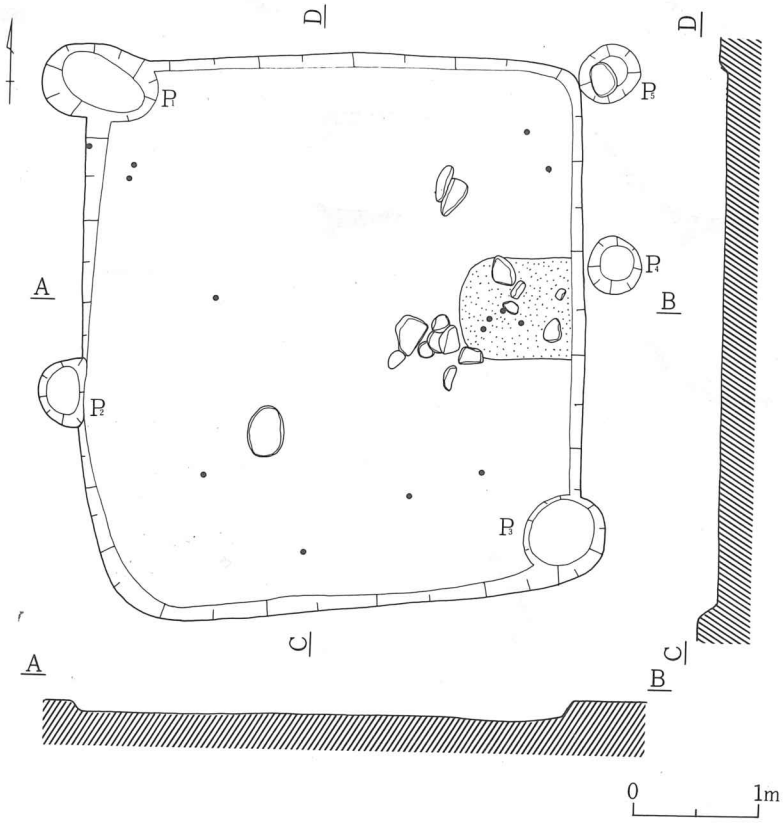
本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕・鉢であり、カマドを中心に各所から大量に出土した。土師器と須恵器の割り合いは、圧倒的に土師器が多く、僅かに須恵器が伴うというあり方を示していた。

１～15は土師器の坏で、全て内面黒色であるが１は、漆状の茶褐色を呈しており、他の様相と異なっている。12～15は足高高台の坏である。器形は、浅い皿状の１や２～４・６・７のほぼ一般的に見られる規模のもの、また、５・８～11のように中形～大形の分類になるものなどバラエティーがある。１は口縁部直径14.2cm、器高3.5cm、底径5.1cmを測り、内面の底面にかかる部分

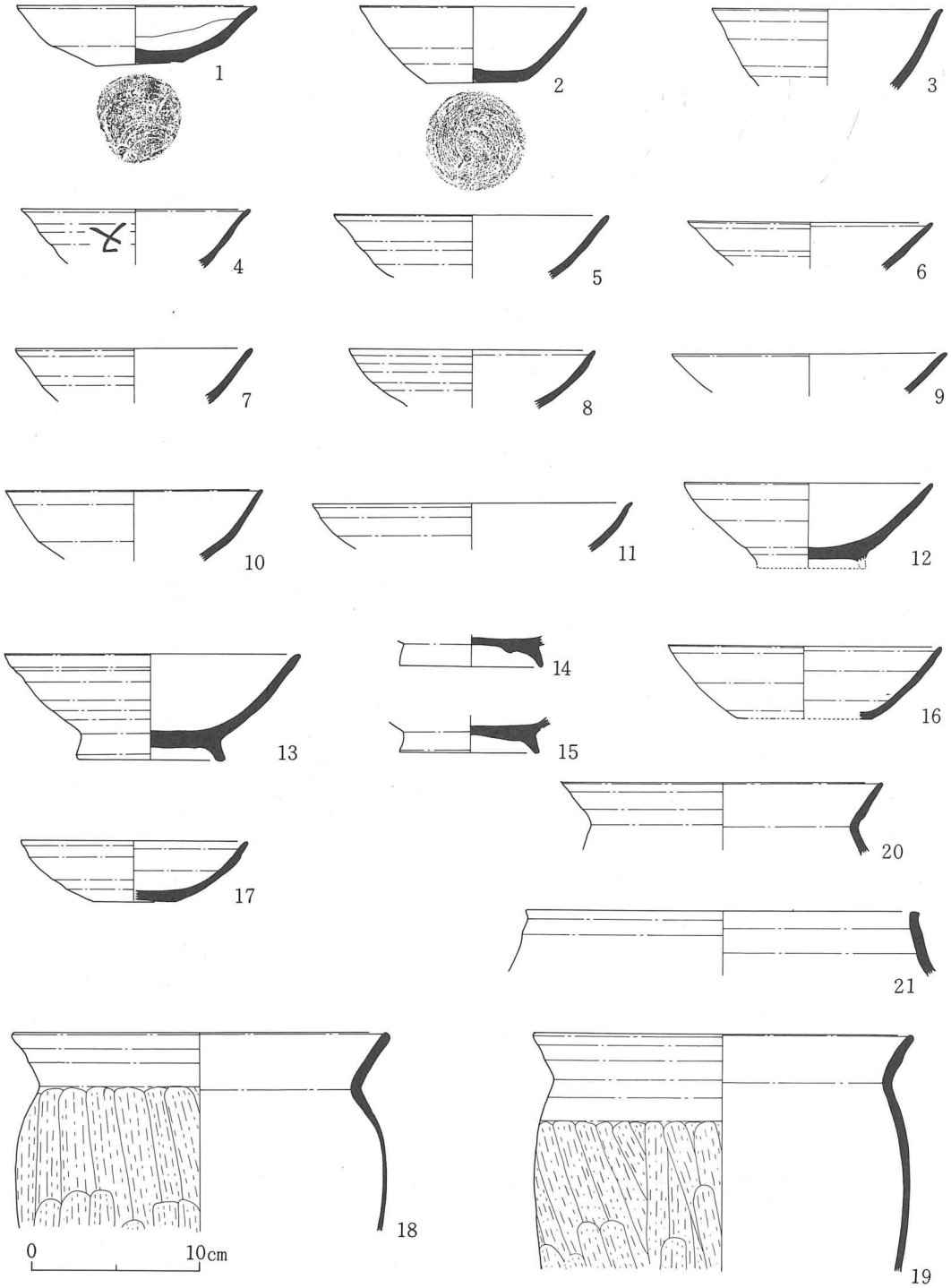
に大きく稜がみられる。底部は、ロクロが静止している時に糸で切られている。2は口縁部直径13.4cm、器高4.5cm、底径5.8cmを測り、ロクロ整形痕があまり見られず丁寧な調整が行なわれている。糸切り底で、ロクロ回転は右廻りである。13は口縁部直径17.5cm、器高6.2cm、底径8.5cmで、足高高台。坏の中にあってはやや大形の資料である。ロクロ整形による外面の器形変化が目立ち、特に口縁部から胴部にかかる部分にはくびれ部が生じ、さらに胴部下半においても激しく残っている。内面は丁寧な調整が成されている。14の高台部は、高台の貼り付けによる段が生じている。4は墨書土器で、「又」と判読できるものである。16・17は須恵器の坏で、図上復元できたものはこの2点である。16は薄手で大形、17は薄手で器形に丸味があり、口縁がさらに薄くなっている。18～21は土師器の甕である。18～20はほぼ同じ形態を成すもので、頸部から口縁部の外反する角度も一定している。また、口縁部直下と頸部が厚く、胴部に至るに従ってかなり薄くなるのも共通した特徴である。調整は、18と19が胴部に幅広のヘラ削りが行なわれている。18の口縁部、19の胴上半部と20は、横ナデ調整が成されている。21は無頸の甕と思われ、口縁部から直線状に広がりながら胴部を形成している。口唇は

規模 ＼ pit・No.	P1	P2	P3	P4	P5
長径・短径	86・60	37・54	64・72	43・46	50・43
深	25	13	25	12	15

(cm)

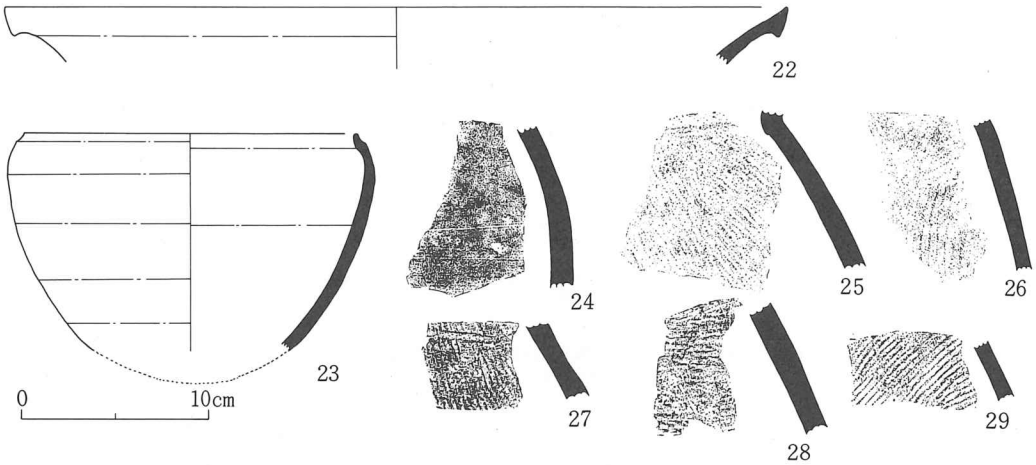


第47図　第19号住居址実測図〔H－19住〕（1：60）



第48図　第19号住居址出土遺物実測図（１：４）

丸味をもたず平坦である。22は須恵器の甕で口縁部直径41.7cmを測る。23は須恵器の鉢形土器で、口縁部直径17.7cm、底部は欠損しているが器高の推定は13～13.5cm程になるかと思われる。口縁部は、段が付き、僅かに立ち上がり、段の直下が大きく張り出して丸味をもちながら底部に至っている。器厚0.4～0.7cmを測り、内外面とも極めて良く整形され、焼成も良く青灰色を呈している。24～29も須恵器の甕であり、表面にタタキ目がみられるものである。



第49図　第19号住居址出土遺物実測図（１：４）

第20表　第19号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
48－1	(土) 坏	14.2 3.5 5.1	全体にゆがみがあり、底部直上のヘラ削りにより段ができている。	丁寧なナデ調整が行なわれ、底部直上にヘラ削りが一周する。赤褐色	ナデにより極めて丁寧な調整を行なっている。赤褐色（ロクロ右回転）	糸切り底	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5～0.6
48－2	(土) 坏	13.4 4.5 5.8	底部から微妙に内湾しながら展開する。比較的深い。	滑らかに調整が行なわれている。赤褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切り底 中央部がやや脹らむ。	焼成：良好 胎土：小石混入 器厚：0.4～0.5
48－3	(土) 坏	13.7 —— ——	底部から口縁部までやや内湾しながら展開する。立ち上がりが急な器形。	ロクロ整形痕を各所に残す。赤褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
48－4	(土) 坏	13.6 —— ——	器面変化はあるが、全体にほぼ直線状に口縁に至る。口唇は外反する。「又」字墨書	ロクロ整形痕顕著。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
48－5	(土) 坏	16.3 —— ——	やや内湾状に展開する。口唇は丸みを帯びる。	ロクロ整形痕顕著。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
48－6	(土) 坏	14.5 —— ——	直線状に口縁まで展開する。胴中央部よりやや薄くなる。	ロクロ整形痕が残る。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
48－7	(土) 坏	14.0 —— ——	胴下部がやや脹らむが、ほぼ直線状に展開する。	ロクロ整形痕が残る。赤褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
48－8	(土) 坏	14.5 —— ——	椀状に内湾しながら展開する。口縁がやや薄くなる。	ロクロ整形痕顕著。 茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
48－9	(土) 坏	16.3 —— ——	ほぼ直線状に展開し、口唇が尖る。	滑らかに調整されている。 茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
48－10	(土) 坏	15.3 —— ——	椀状に内湾しながら展開する。胴中央部に屈曲に近い変化がある。口唇が尖る。	部分的にロクロ整形痕が残る。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
48－11	(土) 坏	19.0 —— ——	湾曲して丸みをもちながら展開する。口縁が外反し、僅かに括れがみられる。	ロクロ整形痕が残る。 茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
48－12	(土) 坏	14.7 —— ——	底部からゆるやかに口縁部まで外反する。	滑らかに調整が行なわれている。赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切りの後付け高台。 高台部欠損	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
48－13	(土) 坏	17.5 6.2 8.5	底部から滑らかに外反する大形の足高高台付の坏。	調整されているがロクロ整形痕が残る。茶褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切りの後付け高台	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
48－14	(土) 坏	—— —— 8.5	足高高台の坏の高台部。 基部から外反。	高台の取り付け時の整形痕が明瞭。	内面黒色研磨。	糸切りの後付け高台	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
48－15	(土) 坏	—— —— 8.0	足高高台付坏の高台部。 基部より外反する。	高台取り付け時の整形痕がみられる。赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切りの後付け高台	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
48－16	(須) 坏	16.2 4.2 7.9	内湾ぎみにはなるが、ほぼ直線状に展開する器形を成す。口縁直下がやや厚い。	ロクロ整形痕が残る。 青灰色 （ロクロ右回転）	滑らかな調整ではあるがロクロ整形痕が残る。	糸切りの後付け高台	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
48－17	(須) 坏	13.4 3.6 4.9	椀状の丸みをもち、底部から滑らかに外反する。口縁直下が幾分変化する。	ロクロ整形痕が残る。 青灰色 （ロクロ右回転）	滑らかな調整ではあるがロクロ整形痕が残る。	糸切り底	焼成良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.6
48－18	(土) 甕	22.3 —— ——	口縁が「く」の字状に外反し、肩部にやや張りをもって下部に至る。胴部は極めて薄い。	口縁は横ナデ。胴部は縦状のヘラ削り調整。 赤褐色	ナデ調整により比較的滑らか。 赤褐色	糸切り底	焼成良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.6
48－19	(土) 甕	22.5 —— ——	口縁が「く」の字状に外反する。胴部はあまり張らない器形になる。	口縁・頸部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。 黄褐色	ナデ調整により比較的滑らか。 黒褐色	欠損して不明であるが、かなり小さいと思われる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.7
49－20	(土) 甕	19.1 —— ——	口縁が「く」の字状に外反する。肩部が僅かに張り出す器形になると思われる。	横ナデ調整。胴部不明。 黄褐色	横ナデ調整。 黄褐色	欠損して不明であるが、かなり小さいと思われる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
49－21	(土) 甕	23.3 —— ——	甕の頸部と思われ、口縁から胴部に対して変化がない。胴部は若干張ると思われる。	横ナデ調整。 赤褐色	横ナデ調整。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.5～0.6
49－22	(須) 甕	41.7 —— ——	大形の甕の口縁部で、折り返し口縁になる。	横ナデ調整。 暗青灰色	横ナデ調整。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：精選 器厚：0.7
49－23	(須) 鉢	17.7 —— ——	浅鉢形の器形を成す。口縁は僅かに立ち上がり、直下に段をもつ。胴部は湾曲する。	ロクロ整形痕が僅かに残るが丁寧な器面調整。 青灰色（ロクロ右回転）	丁寧なナデ調整が行なわれており、器面は滑らか。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.7
49－24～29	(須) 甕		破片				

18、第20号住居址

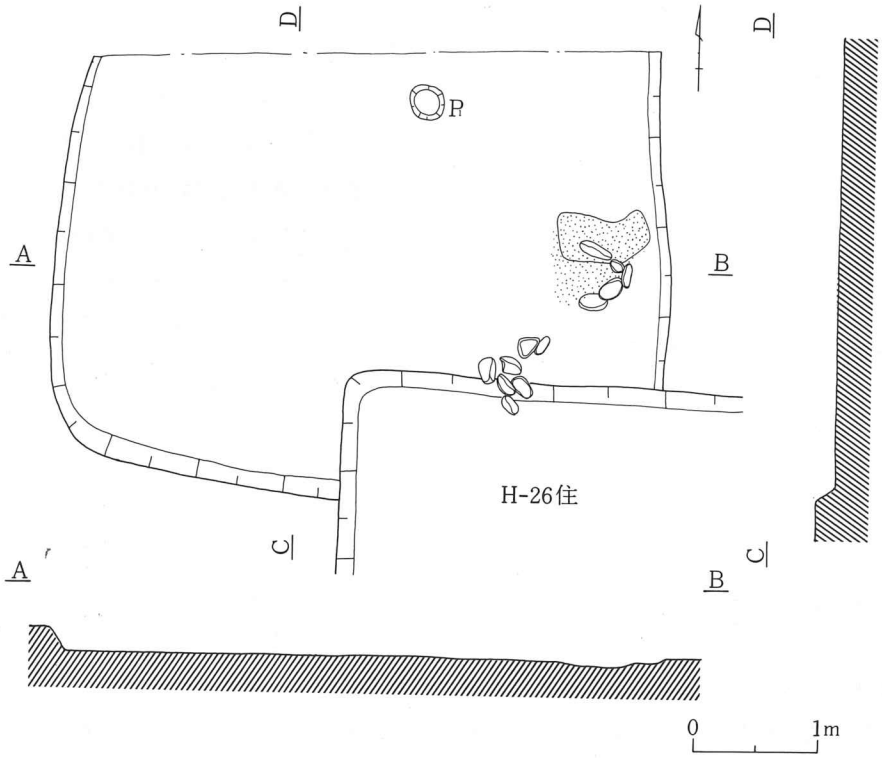
遺構（第50図、図版十六）

本住居址は、調査区の中央部に位置し、水田の床面下部より検出された。層位は、黒褐色土層中である。第９・12・26号住居址と複合関係をもっており、第９号住居址の上に貼り床を成す第12号住居址が存在しており、この２棟の下部に本住居址の北側がかかり、南東部は第26号住居址に切られていた。従って新旧関係は、20住→12住→９住、もう一方は20住→26住であるが、第26号住居址と第９・12号住居址の新旧関係はつかめなかった。

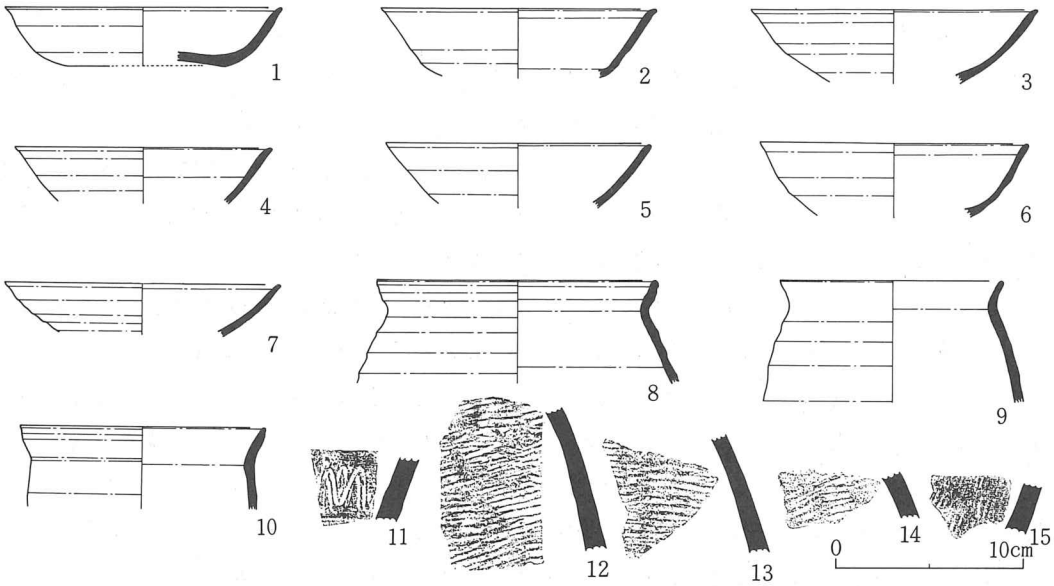
平面形態は、東西489cm、南北は不明であり、隅丸方形ないしは隅丸長方形になるものと思われる。主軸は、カマドを中心にしてＮ－90°－Ｅで、ほぼ真東にカマドが向く構造となっている。壁高は９cmで比較的浅い。カマドはすでに撹乱され、全容を止めていないが、取り囲むように礫が置かれていた。内部には多量の焼土と炭が堆積していた。カマドの北脇には、焼土が混入する灰の大きな固まりが存在した。床面は、確認しえたプラン全体にわたって極めて固く締っている状態であった。中央部から西側は、自然礫の突出が目立っていたが、これを覆うように黒褐色土の床が確認された。カマドの南側には、河原の小礫が床

規模＼pit・No.	P1
長径・短径	27・29
深	15

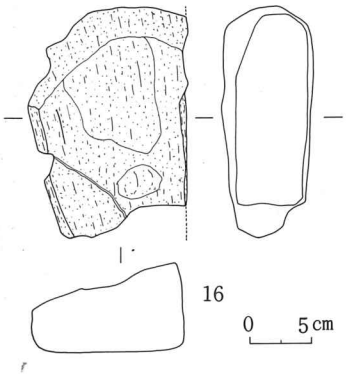
(cm)



第50図　第20号住居址実測図〔Ｈ－20住〕（１：60）



第51図　第20号住居址出土遺物実測図（１：４）



第52図　第20号住居址出土遺物実測図（１：６）

に刺さる状態で集中して見られ、本住居址の何らかの施設かと思われる。柱穴は、プランの中央部に当る位置で検出された。

遺物（第51・52図、図版十七）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の甕、塼、炭化米、炭化種子があり、出土量は多量であったが、図上復元可能なものは少なかった。出土地点は、カマド内及び周辺と南壁、礫集中箇所に多かったが、ほぼ全体にわたって出土していると見てよい。

１～７は土師器の坏で、６だけが内面黒色である。１・３・６が丸味を帯びる器形であるが、その他はほぼ直線的に口縁部まで立ち上っている。８～10は土師器の甕で、８と９は口縁部から頸部まで良く似た形態をしており、８は頸部から大きく、また、９はやや広がりぎみに胴部が湾曲している。いずれもロクロ整形痕を顕著に残している。10は小形の甕で、胴部はあまり張らない。11～15は須恵器の甕で、11は波状文、12～15はタタキ目が成されている。16はカマドの北側の焼土が混る灰の中から出土した塼である。すでに原形を止めておらず、現存の長

さは17×12.5cm、厚さ６～７cmで、胴土はもろい礫が混入したり砂粒などが混入して荒い。茶褐色を呈し、焼成されたものと考えるが、本住居址のカマドの袖として利用したと思われ、二次的な焼成も受けており、非常にもろい。塼は、第３号住居址の床面からも出土しており、ほぼ同様の胎土や色調を示すが、厚さが異なっているものである。

炭化米は、焼土混りの灰の中から固まるようにまとまって出土した。この灰そのものは、カマドから出して寄せられたものと思われ、その中に混入していたものであると思われる。量は僅かである。また、炭化米と同時に、同じ灰の中から長さ0.3cm、幅0.2cm程の楕円紡錘状の種子が出土しており、１粒づつ分離はしておらず固まりになっている。この種子は薄いカラをかぶっており現状は非常にもろくなっているが、炭化米よりも保存状態が良い。まだ、専門的なデーターを出してないので詳細は不明であるが、今後の鑑定の結果をまちたいと思っている。

第21表　第20号住居址出土遺物一覧表

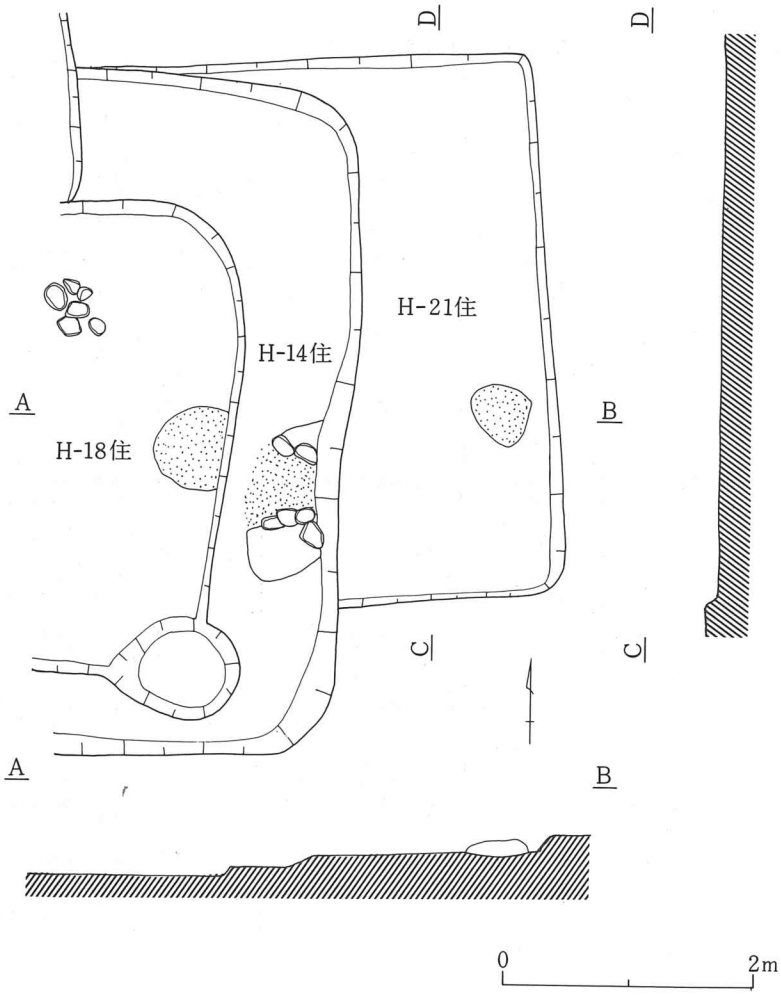
挿図番号	器種	法量	器形	整形調整			焼成・胎土他
				外面	内面	底部	
51－1	(土)坏	14.8 3.1 8.4	底部が小さく、口縁部まで立ちぎみに外反する。口縁はさらに外反する。	ロクロ整形痕が残るが、滑らかに調整。赤褐色（ロクロ右回転）	滑らかに調整。赤褐色	糸切り底中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
51－2	(土)坏	14.7 3.7 8.4	底部よりほぼ直線状に展開する。口縁がさらに外反。	ロクロ整形痕が残るが、滑らかに調整。赤褐色（ロクロ右回転）	滑らかに調整赤褐色	欠損して不明であるが糸切り底と思われる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
51－3	(土)坏	15.2 —— ——	胴中央部にやや脹らみをもちながら口縁まで展開する。口縁が僅かに外反。	ロクロ整形痕顕著。赤褐色（ロクロ右回転）	滑らかに調整赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.5
51－4	(土)坏	13.7 —— ——	やや湾曲しながら展開する。口縁に近い程厚くなる。	ロクロ整形痕顕著。赤褐色（ロクロ右回転）	滑らかに調整赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
51－5	(土)坏	14.1 —— ——	やや湾曲しながら展開する。器厚はほぼ一定している。	ロクロ整形痕を残すが、丁寧に調整され滑らか。赤褐色（ロクロ右回転）	丁寧に調整され滑らか。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
51－6	(土)坏	14.3 —— ——	胴下半に丸みをもちながら口縁まで展開する。器面の凹凸が多くみられる。	ロクロ整形痕顕著。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨丁寧な調整	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.4
51－7	(土)坏	14.7 —— ——	微妙に湾曲しながら展開。器厚はほぼ一定。	ロクロ整形痕顕著。暗茶褐色（ロクロ回転不明）	丁寧に調整され滑らか。暗茶褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
51－8	(土)甕	14.9 —— ——	口縁が「く」の字状に外反し、胴部がかなり脹らむ器形になる。厚さや器面の変化が大きい。	ロクロ整形痕顕著であるが横ナデが行なわれている。暗茶褐色（ロクロ不明）	横ナデ調整が行なわれ、器面滑らか。茶褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
51－9	(土)甕	11.9 —— ——	口縁が「く」の字状に外反し、胴部はあまり張らない器形になる。	ロクロ整形痕が顕著。横ナデが見られる。茶褐色	横ナデ調整が行なわれ、外面に比較すれば滑らか。暗茶褐色でスス付着。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
51－10	(土)甕	13.0 —— ——	口縁は、内湾しながら「く」の字状に展開する。胴部は張り出さずほぼ直線的。	ロクロ整形痕が残るが丁寧な横ナデ調整。茶褐色	横ナデ整形赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
51－11～15	(須)甕		破片	11は波状文、他はタタキ目がみられる。			
52－16	塼		長方塼になると思われる。	茶褐色を呈し、ヘラ状工具による調整痕が残る。	ヘラ状工具による調整痕が残る。		夾雑物が多量に混入しており全体が荒い。

19、第21号住居址

遺構（第53図、図版十八）

本住居址は、調査区の中央部に位置し、水田の床面下部より検出された。黄色ローム層に掘り込んであったが、覆土がやはり黄色ロームが主体を成していたため検出が非常に難しかった。本住居址は、第14・18号住居址と複合関係を成しており、第18号住居址を構築する時に本住居址を切り、また、第14号住居址の構築の時に、第18号住居址に貼り床を行ない、東壁を築く時に本住居址を切っている。従って新旧関係は、21住→18住→14住ということになる。

平面形態は、東西は切られて不明であり、南北432cmで、隅丸方形ないしは隅丸長方形であったかと思われる。主軸方位は、カマドを中心にしてN－85°－Eであり、真東よりやや北に寄っている。壁高は、12cmを測るが、床に群があるため高低の差がある。カマドは、東壁中央部よりやや南寄りで検出されたが、撹乱を受け全容を知ることはできない状態であった。焼土が存在し、かろうじて位置だけは確認ができた。床面もすでに撹乱され、確定できない状態であった。



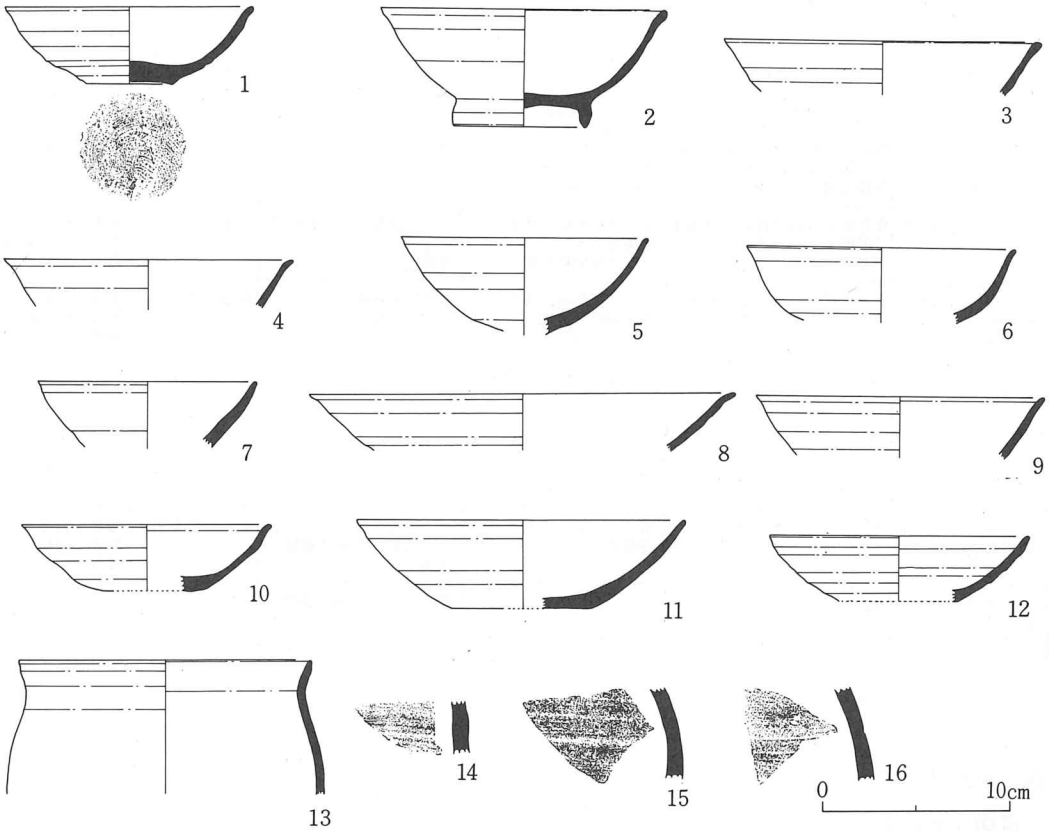
第53図　第21号住居址実測図〔H－21住〕（1：60）

遺物（第54図、図版十八）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕があり、撹乱を強く受けた住居址にしては、出土量が多かった。出土地点は、南東コーナーに集中していた。

1～11は土師器の坏で、9を除いては内面

黒色である。１は口縁部直径13.2cm、器高４cm、底径4.6cmであり、底部は糸切りが成されている。底部内面はやや盛り上っており器厚１cmを測る。内外面ともに丁寧に調整されているが、外面にはロクロ整形痕が顕著に残っている。１と同様な形態をもつものに10がある。３・８・11は極めて大形の坏で、８は口縁部直径22.7cmを測る。12は須恵器の坏であり、図上復元可能な資料は１点だけであった。薄手でロクロ整形痕が目立つ。13は土師器の甕で、口縁部は外反するが、あまり急激ではない。器厚は0.5cmと薄手であるが、一定している。14～16は須恵器の甕であるが、タタキ目のみられない資料である。



第54図　第21号住居址出土遺物実測図（１：４）

第22表　第21号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整			焼成・胎土他
				外面	内面	底部	
54－１	(土)坏	13.2 4.0 4.6	底部から内湾しながら口縁部まで展開する。口縁が外反。底部が極めて厚くなる。	ロクロ整形痕顕著。茶褐色（ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	糸切り底中央部が盛り上がる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
54－２	(土)坏	15.1 6.2 7.0	底部から内湾し、胴中央から外反する足高高台の坏。器厚は全体に薄い。	丁寧な調整が行なわれているがロクロ整形痕が残る。茶褐色（ロクロ右）	内面黒色研磨が成され、滑らか。	足高高台。高台の先端が尖る。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	内面	底部	焼成・胎土他
54－3	(土) 坏	16.7 —— ——	口縁部の資料で、ほぼ直線状に展開する。口唇は肥厚する。	外面黒色研磨 ロクロ整形痕が目立つ。 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。 滑らか。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.4
54－4	(土) 坏	15.3 —— ——	口縁部の資料で、ほぼ直線状に展開し、口唇が外反する。	ロクロ整形痕が残るが丁寧な調整。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
54－5	(土) 坏	13.1 —— ——	椀状にかなり丸みをもつ器形で、底部から口縁にかけて薄くなる。	ロクロ整形痕がみられるが、丁寧な調整。 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。 丁寧に調整されている。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.7
54－6	(土) 坏	14.3 —— ——	椀状に口縁まで展開する器形で、口縁は外反する。	丁寧な調整が行なわれ、器面滑らか。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。 丁寧に調整されている。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
54－7	(土) 坏	11.6 —— ——	口縁部付近に至ってやや内湾する器形で、口縁は薄くなるが全体に厚手。小形。	ロクロ整形痕が残るが丁寧な調整。赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。 丁寧に調整されている。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.6
54－8	(土) 坏	22.7 —— ——	極めて大形の坏で、胴部が僅かに張らむが、外反が強い。口縁は強い外反を呈する。	ロクロ整形痕が残るが丁寧な調整。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
54－9	(土) 坏	15.3 —— ——	底部からほぼ直線状に口縁まで展開する。口縁はやや外反する。	ロクロ整形痕が残る。 赤褐色 （ロクロ回転不明）	丁寧な調整が行なわれている。 赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4
54－10	(土) 坏	13.3 3.5 5.0	小形の坏で口縁直下が屈曲して大きく立ち上がる。	ロクロ整形痕が残るが丁寧な調整。茶褐色 （ロクロ回転不明）	内面黒色研磨。 丁寧な調整が行なわれている。	糸切り底	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.3～0.5
54－11	(土) 坏	17.5 4.7 7.3	大形の坏で、底部から椀状に丸みをもちながら口縁まで展開する。	丁寧な調整が行なわれている。赤褐色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。 丁寧な調整が行なわれている。	糸切りの後ヘラ削りを行なっている。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.8
54－12	(須) 坏	13.8 3.5 6.2	椀状に丸みをもちながら展開する。	ロクロ整形痕顕著。 青灰色 （ロクロ右回転）	内面黒色研磨。	ヘラ削りの痕跡がみられる。	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.4～0.5
54－13	(土) 甕	15.6 —— ——	口縁が「く」の字状にゆるく外反し、胴部は中央部が張らむ。	横ナデにより丁寧に調整 茶褐色	ロクロ整形痕がみられるが、比較的丁寧に調整。 青灰色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
54－14～16	(須) 甕		破片		横ナデにより丁寧に調整。		

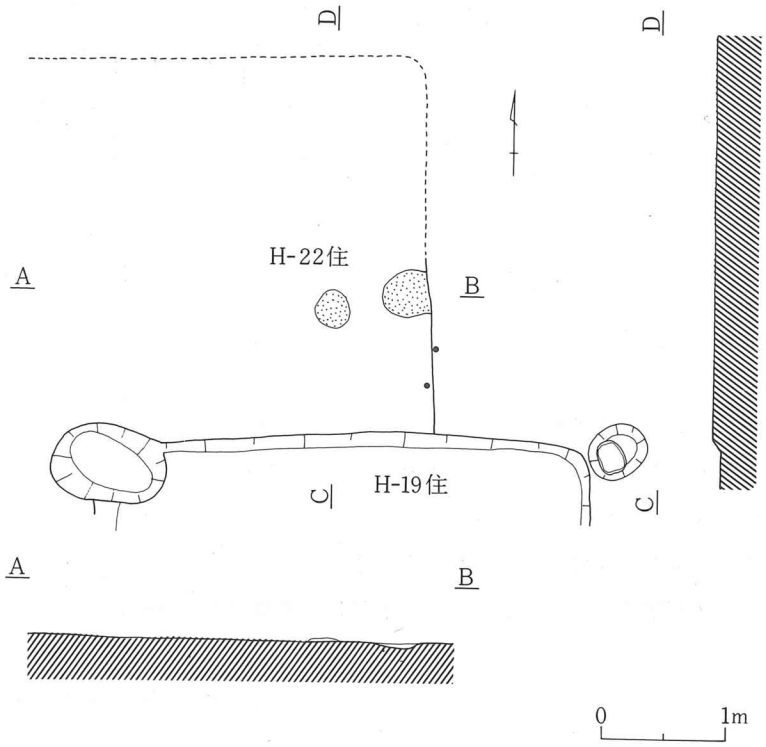
20、第22号住居址

遺構（第55図、図版十八）

本住居址は、調査区南部の鹿曲川河岸段丘線寄りに位置しており、現状は畑であったが、かつて造成された水田の床面下部で検出された。この付近は、黄色ローム層が堆積している所であり、また、所々に大礫も散在していた。第19号住居址と複合関係をもっており、本住居址が切られていた。従って22住→19住となる。すでに床面の大部分を含め、その上面が撹乱されており、カマドに残る僅かな焼土によって、住居址の存在を確認した。

平面プランは、隅丸方形ないしは隅丸長方形であったと思われるが、カマドと第19号住居址の間に僅かに壁の痕跡が残るだけであるため、規模を推定することすらできない状態であった。

カマドは、東壁に位置していたことは確実であり、焼土の範囲は、東西60cm、南北38cmを測る。



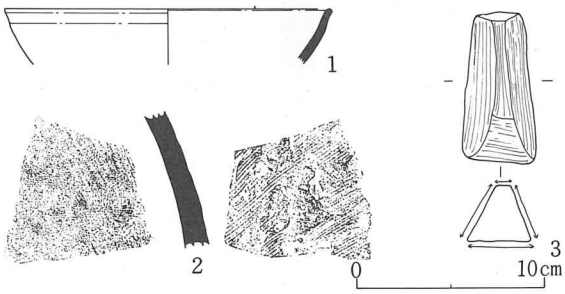
第55図　第22号住居址実測図〔Ｈ－22住〕（１：60）

カマドに残る焼土の西側に、さらに焼土が存在していた。床面は、この２ケ所と第19号住居址の間に僅かに存在しており、この部分は固く締っていた。その他は全く検出できない状態であった。

遺物（第56図、図版十八）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏と須恵器の甕、砥石があり、図示した以外にも本住居址内と思われる地点から出土しているが、撹乱の激しい住居址であるため、焼土内及び、第19号住居址との間の遺物のみを取り扱い、その中でも図上復元可能なもののみを示した。

１は土師器の坏で、口縁部直径が17.4cmと比較的大形の分類に入るものである。２は須恵器の甕で、内面には篦歯状工具による調整痕が見られる。３は凝灰岩製の砥石で、各面全てに使用痕が認められる。



第56図　第22号住居址出土遺物実測図（１：４）

第23表　第22号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量(cm)	器形	整形・調整 外面	整形・調整 内面	整形・調整 底部	焼成・胎土他
56－1	(土)坏	17.4 ―― ――	椀状に丸みをもつ器形で口縁直下に段をもつ。口縁がやや外反。	口縁直下にロクロ整形痕を残すが全体に丁寧な調整。赤褐色(ロクロ不明)	丁寧な調整を行なっている。赤褐色	欠損して不明	焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5

挿図番号	器種	法量	器形	整形・調整			焼成・胎土他
				外面	内面	底部	
56－2	(須)甕		破片	タタキ目がみられる。	箆状工具による調整がみられる。		焼成：良好 胎土：砂粒混入 器厚：0.5
56－3	砥石		凝灰岩製で、各面とも使用痕がみられる。				

21、第23号住居址

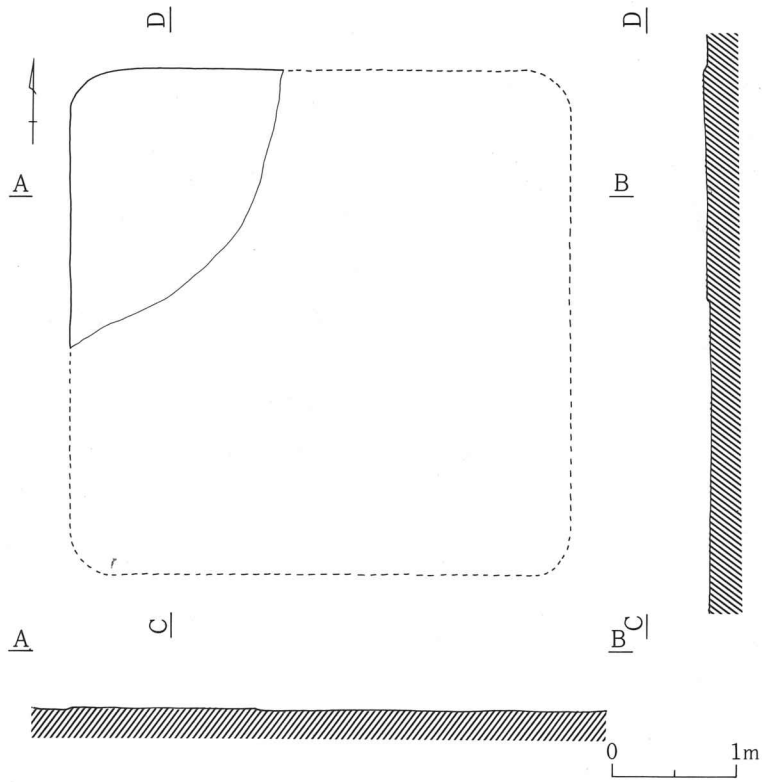
遺構（第57図）

本住居址は、調査区南部の鹿曲川河岸段丘線に寄った所に位置し、現状は畑であったが、かつて造成された水田の床面直下で検出された。黄色ローム層と黒褐色土層が入り混る混同層的な地点であり、また、大礫も所々に散在していた。

住居址はすでにほぼ全体が撹乱を受けており、僅かに床が残るだけであった。グリッド掘りの精査の時点で、この地点に遺物が集中して出土することに着目し、遺構の存在を確信して当ったところ、床面の一部が検出されたものであった。

床面は、北西部のコーナー付近が確認できた。従って、本住居址は、この地点から東側に広がりをもつものと想定した。

遺物は、土師器の坏・甕が主体であり、図上復形可能なものもあったが、本住居址の状況を考慮して取り扱わなかった。



第57図　第23号住居址実測図〔H－23住〕（1：60）

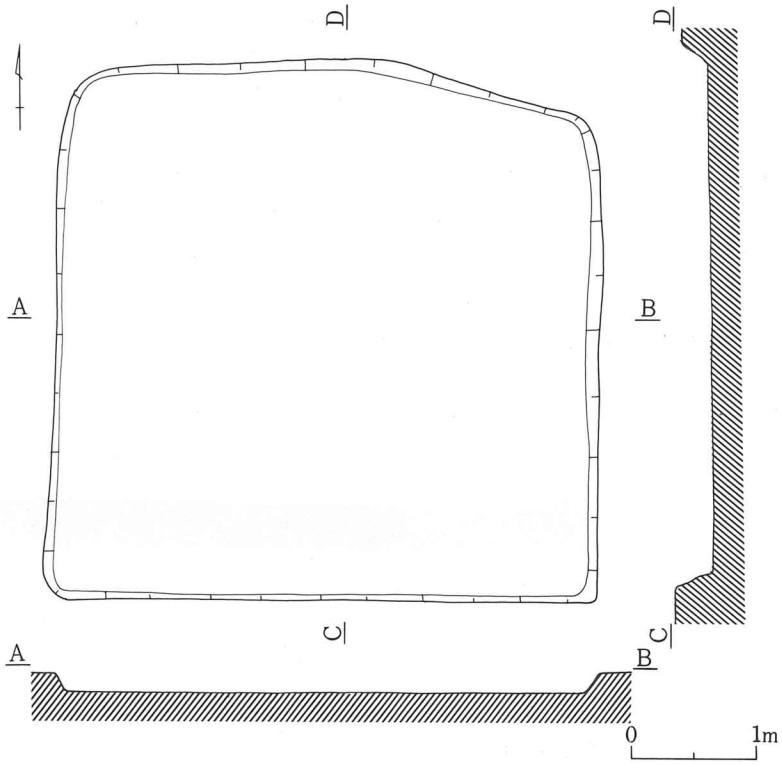
22、第24号住居址

遺構（第58図、図版十八）

本住居址は、調査区の南部に位置し、現状は畑であったが、かつて造成された水田の床面下部で検出された。黄色ローム層であっても、砂が多量に混入した土質であり、これを掘り込んで構築してあった。第25号住居址を切って存在し、新旧関係は、25住→24住となる。

平面形態は、東西430cm、南北430cmの隅丸方形を呈しており、主軸方位は、N－90°－Eである。壁高は、14cmを測るが、南側から北側へやや傾斜する地点であるため、北側は浅くなっている。カマドは、第25号住居址と複合する東側壁の中央部に、黄褐色の灰と土が混同した固まりがみられただけであり、カマドの構造ないしは痕跡、あるいは焼土や炭などは存在しなかった。この箇所をカマドと判断しても良いかどうか疑問の残るところである。床面は、砂質ローム中に存在したが、軟弱であり良い状態とはいえなかった。壁は、比較的良好であり、第25号住居址との複合部分は、一部貼ってある部分が見られた。

遺物は、土師器の坏と甕の細片が出土しただけであり、図上復元はできなかった。

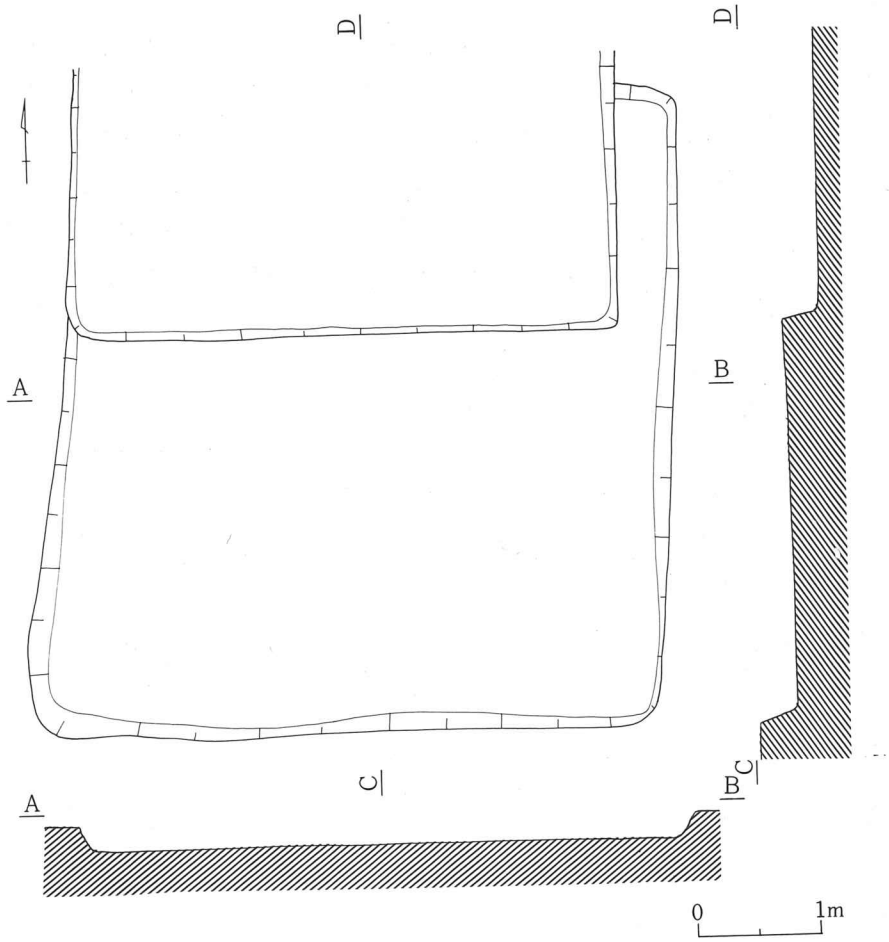


第58図　第24号住居址実測図〔H－24住〕（1：60）

23、第25号住居址

本住居址は、調査区南部に位置し、第24号住居址と複合関係を成して検出された。地山の土質等は、第24号住居址と全く同様である。

平面形態は、東西491cm、南北506cmで、南北にやや長い隅丸長方形を呈している。主軸方位は、N－92°－Eであり、ほぼ第24号住居址と同様である。壁高は26cmと比較的深いが、地山が南側から北側へゆるやかに傾斜しているため、北側がやや浅くなっていた。カマドは、東壁中央よりや



第59図　第25号住居址実測図〔Ｈ－25住〕（１：60）

や南側の東部分が、焼けて焼土らしい痕跡があっただけで、それらしき構造物は全く確認することはできなかった。床面は砂質であり、固い面はなかった。

遺物は、土師器の坏と甕、須恵器の坏の細片が出土しただけであり、図示することはできなかった。

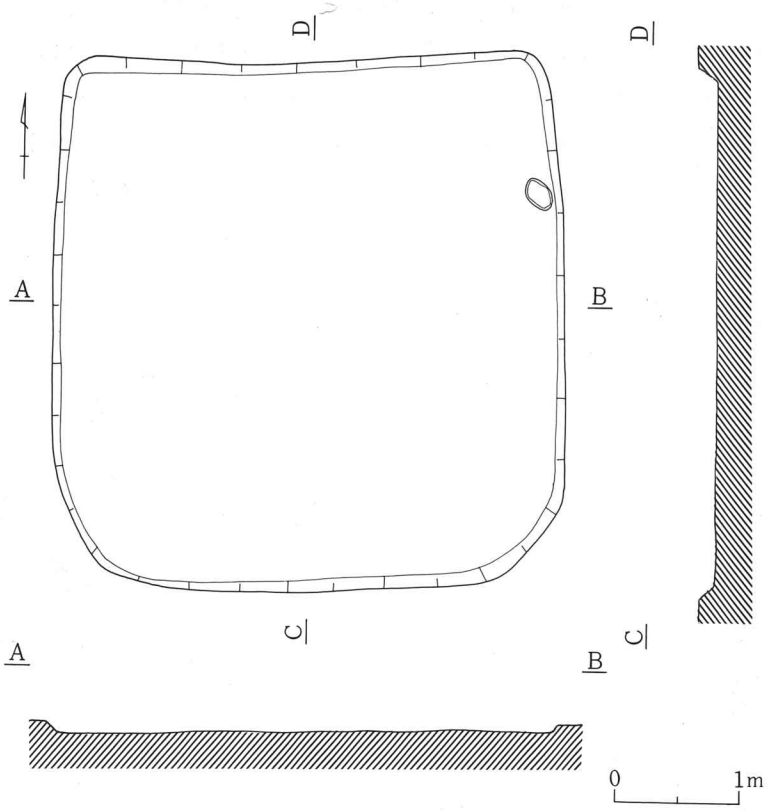
24、第26号住居址

遺構（第60図、図版十九）

本住居址は、調査区の中央部に位置し、水田の床面下部で検出された。一連の複合関係をもつ住居址が密集する中で、最も南側に当る。この付近は、東側から続く黄色ローム層が、黒褐色土層と入れ替る接点的な位置にあり、この接点箇所を掘り込んで構築されたものである。礫が極め

て集中する箇所は、本住居址の西壁あたりからであり、ここから鹿曲川河岸段丘まで連いている。本住居址は、第20号住居址を切って存在しており、20住→26住という新旧関係が成り立つ。

平面形態は、東西408cm、南北421cmを測り、南北にやや長い隅丸長方形を呈している。南東と南西コーナー部は、北側に比べ丸味がかなり強い。主軸方位は、N－90°－Eであり、カマドの確認はできなかったため、本遺跡全体の様相から東カマドと仮定し測定したものである。壁高は、16cmである。カマドの存在を確認できなかったが、東側壁下に礫が出土しており、床面が灰をかぶったように土質が異なっていた。もしかするとこの部分がカマドではなかったかと推測できるものである。床面は、全体に軟弱ではあったが東側には固い部分も見られ、西側は、黒褐色土層中の自然礫が突出しはじめていたため、形態はあまり良くなかった。壁も同様にロームと黒褐色土、黒褐色に混る礫など歴然と表われており、特に礫が混入している箇所はもろい状態であった。



第60図　第26号住居址実測図〔H－26住〕（1：60）

本住居址から出土した遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕があるが、細片であり図示することができなかった。

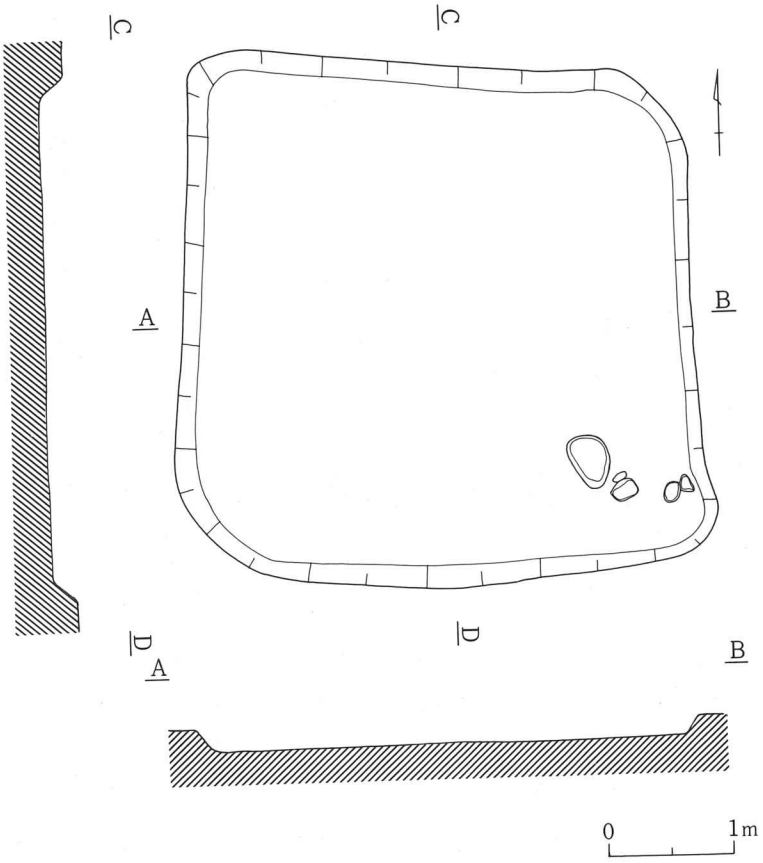
25、第27号住居址

遺構（第61図、図版十九）

本住居址は、調査区の中央部に位置し、水田の床面下部で検出された。第3号住居址の南側で第26号住居址の東側に隣接する位置に当る。この地点は黄色ローム層が厚く堆積しており、これを掘り込んで構築されていた。

平面形態は、東西420cm、南北415cmを測り、北側の壁がやや短かく、また、北東部コーナーと南西部コーナーは丸みが他に比べ強いが、ほぼ隅丸方形を呈していると見てよい。主軸は、カマドとみられる地点を中心にして、N－90°－Eである。壁高は9cmとやや浅い。カマドは、すでに全容を止めておらず、礫が散在しているだけであり、また、焼土や炭も存在していなかったため、カマドと認定して良いか疑問が残った。ただ灰らしい土質が確認できただけである。床面は、黄色ローム上に存在したが、軟弱であり、あまり良好な状態ではなかった。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕が細片で出土しているが、図上復元に耐えうるものがなく図示できなかった。



第61図　第27号住居址実測図〔H－27住〕（1：60）

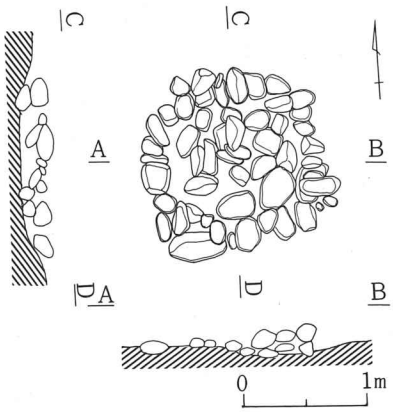
26、第1号配石址（第62図、図版十九）

本址は、第13号住居址の北西側に接して検出された。平面形態は、東西158cm、南北145cmのほぼ方形状に長楕円形の河原石を配置してあった。深さは、地山から5～8cm掘り込み、土壙を作ってあり、土壙の底面から25cm程の所まで河原石を積んでいる。石は、小口部を中心に向けるように配置し、その内側は横口を中心に向けるようになっており、非常に規則性のある配置が行なわれていた。

内部からは、土師器の坏片が数点出土しているが、第13号住居址と切り合う位置にもあり、どちらに伴う資料か判断がつかなかった。

27、第２号配石址（第63図、図版二十）

本址は、調査区の中央部で、鹿曲川河岸段丘線に近い所で検出された。周囲は、黒褐色土中に大小の礫が多量に混入している層位であり、本址はこのような状態の中に位置していた。また、本址の南側に隣接して第３号住居址が存在しており、当初同一の遺構ではないかと考えたが、下部を掘り進むに従って、別の遺構であることが判明した。



第62図　第１号配石址実測図（１：60）

平面形態は、東西86㎝、南北156㎝、深さ15㎝を測る円形の土壙状の中に、大小の河原石が配置されており、環状的な配石址とも考えられるものである。中央部には、円礫を掘りくぼめた石臼（凹石）が置かれていた。

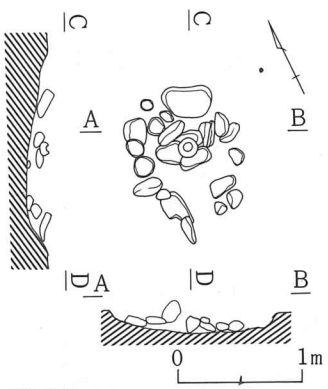
内部から骨の細片が多数出土し、また、北側の大礫の北東部からは、頭蓋骨の骨片が出土しているため、本配石址の性格は墓であったことにほぼまちがいはないものと思われる。また、土師器の坏の細片が20点ほど出土しているので、平安時代に比定できると考える。

28、第３号配石址（第64図、図版二十）

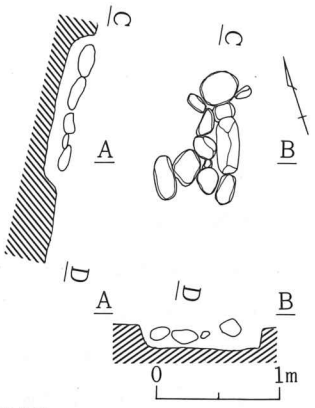
本址は、調査区の中央部で、第２号配石址の南側に隣接して検出された。

平面形態は、楕円形の土壙状の中に河原石を配置するという在り方をしており、土壙は、東西100㎝、南北125㎝、深さ15㎝を測る。配置された石は、北側に人頭大の円礫を置き、東側に楕円形の礫を横に立てて長方形に囲むような状態にあった。西側は石が抜かれた痕跡が見られた。内部及び南側には、円礫や楕円形の礫が小口を北側に向けて置かれていた。

内部から骨片が比較的多く出土しており、また、土師器の坏と甕の破片が出土しているところから、平安時代の墓ではなかったかと考えられる。



第63図
第２号配石址実測図（１：60）



第64図
第３号配石址実測図（１：60）

29、土壙群（第65図、図版二一）

本遺跡より検出された土壙は、合計13基を数える。検出地点は、調査区中央部の東側で１群（ＳＫ－１～５）、さらに、北西部のＳＫ－13も含め、最北端に１群（ＳＫ－６～13）の２群にわたっている。ＳＫ－１は、第Ⅲ章・第１節で記載したとおり縄文時代早期の土壙であるが、その他は、確実に時期を決定する手掛りを得ることはできなかった。平面形態は、楕円形が基本となっており、規模が大きく、浅いことが特徴である。

30、ピット群（第66図）

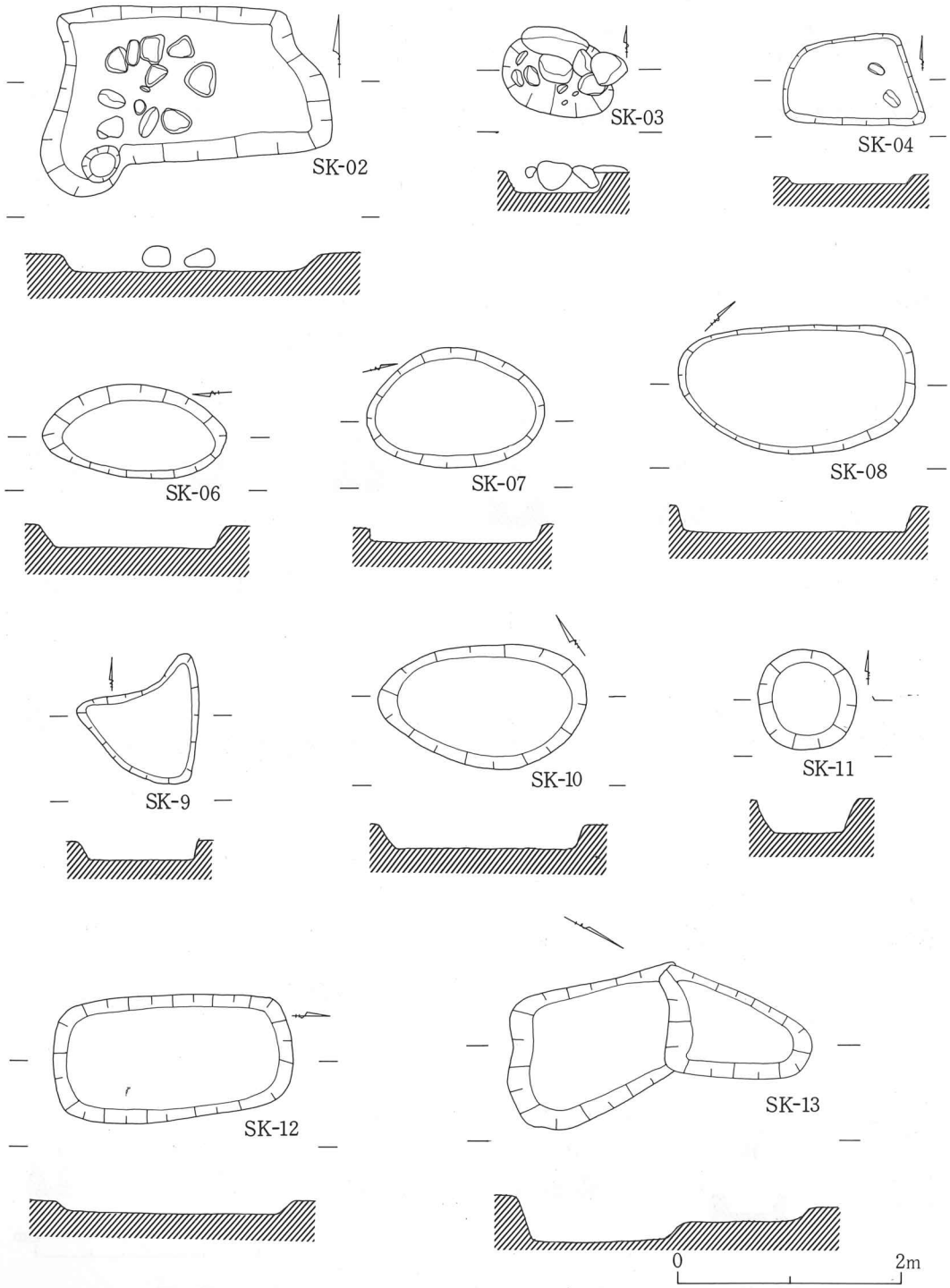
本遺跡より検出されたピットは、遺構に伴うもの以外で77基を数える。検出地点は、調査区中央部東側の土壙群が位置する所、それに、調査区北部の中央であり、北部の一群に多数集中している。平面形態は、円形が基本であり、その他楕円形や不正円形状のものも僅かに存在していた。規模は、直径50cmを越えるものは少なくて20～30cm内外が多く、また、深さは20～30cmを通常としている。ピットの相間関係は、現状では把握することができなかった。

31、製鉄関係遺物（図版二十）

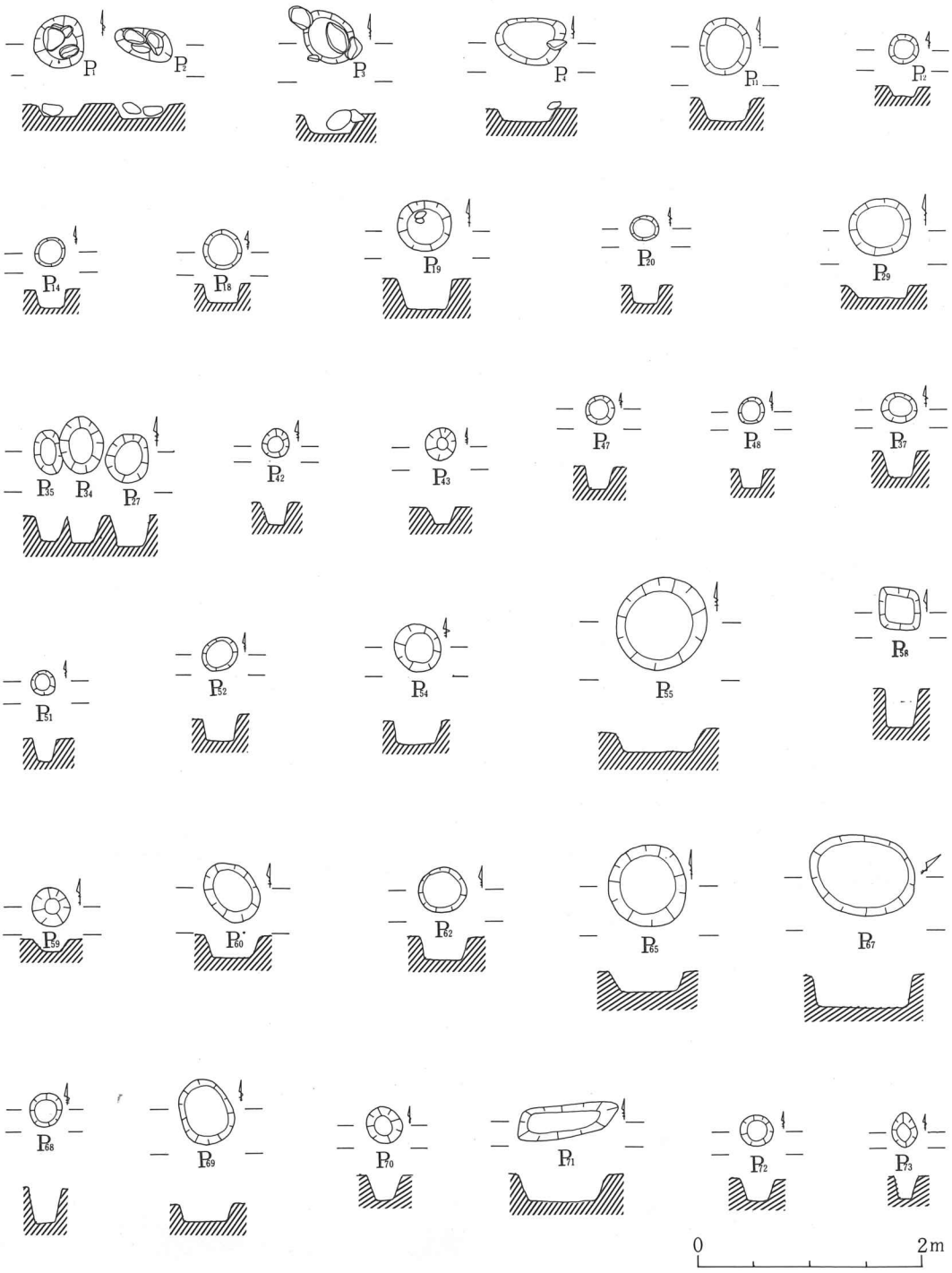
本遺跡から、製鉄址ではないかと思われる資料が出土した。出土地点は、第６号住居址と第７号住居址の中間で、河岸段丘線に近い所である。礫混りの黒褐色土層中に、東西40cm、南北30cmの範囲にわたって、ひとつの固まりとなって鉄滓が出土している。鉄滓は固まりになってはいたが、細かな鉄滓が集合するかたちで存在し、また、小石を抱え込んで固まっているものもった。鉄滓に接し、平安時代の薄手の土師器坏が出土し、また、鉄滓中から刀子の欠損品が出土している。この鉄滓から僅か離れた所から、吹子の羽口の破片が２点出土しており、この地点で行なわれたかどうかは判断できないが、岩清水遺跡に関係した製鉄址が近辺にあったかと思われる。なお、本遺跡からは、鉄枴や鉄釘、厚い板状の鉄、その他鉄製品が目立って出土しており、さらに凝灰岩製の砥石も５個体出土しているので、製鉄と鍛治の双方が行なわれていた可能性がある。

第４節　中世以降の出土遺物

本遺跡からは、以上記述してきた以外に、中世の内耳土器、陶磁器、かわらけ、近世の陶磁、石鉢、五輪塔、古銭などが出土している。特に内耳土器と陶磁器は、かなりの出土量がある。内耳土器は、器形がわかるまでに復元できるものは３個体あり、また図上復元できるものは10個体をはるかに越えている。これらは、第５号住居址の東側一帯に集中していた。また、砂質の胎土のかわらけもこの付近から出土していた。陶磁器も内耳土器出土地点に集中し、天目茶碗や黄瀬戸の皿、鉢片、常滑の甕片、伊万里の皿、茶碗、花器片、青磁の皿、茶埦片その他さまざまな種類が破片で出土している。また、古銭もこの付近から出土しており、何らかの遺構があったことを想起させる。



第65図　第２～４、６～13号土壙実測図〔ＳＫ－02～04・06～13〕（１：60）



第66図　第1～4・11～12・14・18～20・29・27・34・35・37・　27・29
42・43・47・48・51・52・54・55・58～60・62・65・67
～73号ピット実測図〔P_1 P_2…表示〕（1：60）

第24表　岩清水遺跡土壙一覧表

(cm)

遺構番号	平面 形態	平面 長径	平面 短径	底面 形態	底面 長径	底面 短径	断面 形態	断面 深径	備考
SK1	円形	110	114	円形	92	90	台形	40	小円礫が多数存在 山形押型文土器1個体出土
2	不整長方形	233	134	不整長方形	197	107	〃	15	底面に礫 土師器・須恵器の坏・甕片出土
3	〃	266	100	〃	232	86	〃	39	土師器坏出土
4	〃	125	75	〃	115	67	〃	6	底面に礫 土師器・須恵器の坏・甕片出土
5	不定形	218	160	不定形	189	142	〃	28	底は北側にやや傾斜
6	楕円形	166	85	楕円形	142	72	〃	22	
7	〃	156	108	〃	143	87	〃	7	
8	三角形	212	118	三角形	194	104	〃	22	三角形の特異な形態
9	不定形	107	93	不定形	195	77	〃	18	
10	楕円形	184	112	楕円形	156	90	〃	35	
11	円形	91	90	円形	67	60	〃	29	
12	長方形	214	110	長方形	185	188	〃	18	平面長方形で砂礫が混入
13	不整楕円形	265	105	不整楕円形	228	78	二段 台形	22 39	土壙2基の複合 一括本号とする

第25表　岩清水遺跡ピット一覧表

(cm)

遺構番号	平面 形態	平面 長径	平面 短径	底面 形態	底面 長径	底面 短径	断面 形態	断面 深径	備考
P1	楕円形	53	28	楕円形	32	17	台形	4	底面に礫
2	円形	47	45	〃	30	29	〃	10	底面に礫
3	楕円形	53	40	〃	40	30	〃	18	堀り切り部・底面に礫
4	〃	64	43	〃	45	32	〃	10	堀り切り部に礫
5	円形	68	60	円形	60	51	〃	18	堀り切り部に礫
6	〃	32	30	〃	28	25	〃	20	
7	〃	20	20	〃	16	15	〃	20	

(cm)

遺構番号	平面 形態	平面 長径	平面 短径	底面 形態	底面 長径	底面 短径	断面 形態	断面 深径	備考
P 8	円形	50	48	円形	40	40	台形	18	土師器坏片出土
9	〃	68	66	〃	60	58	〃	21	土師器・須恵器坏・甕出土
10	〃	90	87	〃	89	87	〃	18	須恵器甕片出土
11	楕円形	50	46	楕円形	38	33	〃	20	
12	円形	28	25	円形	20	17	〃	12	
13	〃	35	30	〃	30	26	〃	13	
14	〃	34	30	〃	27	25	〃	10	
15	長方形	21	16	長方形	16	7	〃	11	
16	円形	18	16	円形	15	13	〃	15	P_{18}に接する
17	〃	23	20	〃	20	18	〃	4	
18	〃	28	25	〃	24	23	〃	16	P_{16}に接する
19	〃	48	44	〃	42	38	〃	27	礫混入
20	〃	15	13	〃	10	7	〃	4	P_{21}に接する
21	〃	16	14	楕円形	14	9	〃	4	P_{20}に接する
22	〃	30	30	円形	25	24	〃	18	
23	〃	25	23	〃	23	22	〃	8	P_{24}と複合
24	〃	15	18	〃	13	14	〃	9	P_{23}と複合
25	〃	31	30	〃	28	25	〃	9	
26	〃	40	40	〃	36	35	〃	28	土師器坏片出土
27	〃	43	40	〃	35	32	〃	27	
28	楕円形	86	40	楕円形	63	32	〃	29	
29	円形	50	50	〃	47	38	〃	11	
30	楕円形	15	20	〃	13	18	〃	15	

(cm)

遺構番号	平面			底面			断面		備考
	形態	長径	短径	形態	長径	短径	形態	深径	
P31	円形	25	28	円形	20	20	台形	8	P_{32}に複合
32	〃	26	26	〃	20	20	〃	47	P_{31}に複合
33	〃	28	28	〃	25	23	〃	25	
34	楕円形	50	40	楕円形	40	30	〃	22	
35	〃	40	24	〃	32	19	〃	22	
36	円形	33	33	円形	19	19	〃	20	
37	楕円形	31	27	〃	21	19	〃	27	
38	円形	18	16	〃	14	10	〃	16	
39	〃	28	28	〃	18	18	〃	19	
40	〃	32	29	〃	28	25	〃	22	
41	〃	30	28	〃	24	25	〃	18	
42	〃	25	25	〃	13	15	〃	19	
43	〃	30	26	〃	10	10	〃	15	
44	〃	21	18	〃	14	9	〃	18	
45	〃	30	29	楕円形	28	19	〃	18	
46	〃	20	18	〃	15	14	〃	24	
47	〃	24	25	〃	14	17	〃	20	
48	楕円形	32	23	円形	17	17	〃	17	
49	円形	24	20	〃	18	16	〃	16	P_{50}と複合
50	楕円形	25	15	楕円形	17	10	〃	18	P_{49}と複合
51	円形	24	20	〃	20	12	〃	19	
52	楕円形	35	30	〃	26	20	〃	16	
53	方形	40	40	方形	36	36	〃	24	

(cm)

遺構番号	平面 形態	平面 長径	平面 短径	底面 形態	底面 長径	底面 短径	断面 形態	断面 深径	備考
P54	円形	40	40	円形	37	34	台形	19	
55	〃	35	33	〃	28	26	〃	16	
56	〃	23	20	〃	19	17	〃	18	
57	楕円形	68	40	楕円形	53	32	〃	20	P_{58}と関連性があるものと思われる。
58	方形	35	35	方形	30	22	〃	34	P_{57}と関連性があるものと思われる。
59	〃	35	33	〃	14	14	〃	12	
60	楕円形	56	43	楕円形	40	30	〃	20	
61	円形	24	22	円形	16	13	〃	20	土師器坏片出土
62	〃	44	40	〃	34	32	〃	20	土師器坏片出土
63	楕円形	40	32	楕円形	35	30	〃	21	
64	〃	55	43	〃	47	34	〃	21	
65	円形	30	30	円形	27	24	〃	14	
66	〃	23	23	〃	20	18	〃	12	
67	楕円形	89	72	楕円形	80	58	〃	29	
68	円形	30	30	円形	19	19	〃	32	
69	楕円形	57	46	楕円形	46	37	〃	17	
70	円形	33	17	円形	30	16	〃	21	
71	不整楕円形	83	28	不整楕円形	62	22	〃	24	細長い楕円
72	円形	30	28	楕円形	14	23	〃	19	
73	長方形	30	23	長方形	19	12	〃	19	
74	円形	37	35	円形	22	22	〃	17	
75	〃	69	78	楕円形	49	61	〃	17	土師器坏片・鉄釘出土
76	〃	32	30	円形	30	28	〃	18	P_{77}と接する。
77	〃	20	16	〃	15	14	〃	17	P_{76}と接する。 やや楕円傾向

第Ⅴ章　総　　括

本年度における発掘調査の経過及び成果は、すでに各章に記載してきたところであるが、その要点をここでまとめ、総括としたい。なお、分析にまで至らなかったことを付記しておきたい。

岩清水遺跡は、水田造成とその後畑に一部転用して深掘りをしている箇所があったため、遺構等の保存状態が良好とは言えなかったが、１・２例の住居址を除いては、複雑な複合関係を成していたとはいえ、良好な資料を得ることができた。

縄文時代の資料では、第１号土壙に伴って、山形押型文土器が出土し、全体の器形が把握できるまでに復元することができた。また、調査区中央部の平安時代住居址群の下部より、楕円押型文を主体にしながら、山形押型文や沈線文系土器、撚糸文土器が出土した。このうち楕円押型文土器は、口縁部から胴上半の接合資料であるため、図上復元をすることができた。これら一群の土器は、一定範囲に集中していたため、同時期に存在していたものと見てよく、共伴関係を明示する重要な資料である。望月町では、春日・新水Ａ遺跡・新水Ｂ遺跡に早期末葉の土器群が見られ、特に新水Ｂ遺跡においては、沈線文土器と貝殻腹縁文土器を主体にし、そこに押型文が加わるという様相を呈する第１・２・３・４号住居址と、沈線文土器と押型文土器が半数少量ずつ共伴する第５号住居址、それに、沈線文土器を主体に押型文土器が伴う土壙が40基以上検出されている。また、春日・金塚遺跡では、押型文土器を主体に沈線文土器と撚糸文土器が加わる第３・４号住居址と、沈線文土器を主体に押型文土器と撚糸文土器の加わる第５号住居址が検出されている。これらすでに調査が終了している遺跡を見ただけでも、８棟の住居址から、押型文土器と沈線文土器、それに撚糸文土器の共伴関係が明らかとなっており、長野県内全般から見ても、蓼科山北麓地域の特徴的な在り方として把握することができる。尚、遺構に伴わず、遺跡からの平面的な出土状態を示しているものに、更埴市鍋久保遺跡の資料があげられる。さらに、望月町春日・桂ノ久保遺跡や岩清水遺跡が出土量は少量ながら加えられる資料であり、また、北相木村栃原岩陰遺跡も良好な資料が得られている。しかし、蓼科山北麓地域の押型文土器の様相は、文様や胎土にかなり違いが見られるため、さらに資料の集積をまって詳細な検討を加えたいと思っている。

古墳時代の住居址は、第１・４号住居址の２棟が検出され、このうち第１号住居址は、焼失住居址であり、かなり保存状態が良く、土師器の坏・鉢・甕や須恵器の坏、さらに瑪瑙製の玉と滑石製の臼玉、砂岩製と凝灰岩製の砥石が出土しており、６世紀中～後葉の鬼高Ⅱ期に比定されるものである。蓼科山北麓地域には、古墳時代の住居址は、春日・後沖遺跡で４世紀中～後葉の御領式期に比定される５棟（いずれも玉つくり工房址をもつ住居址）が検出されているだけであり、極めて検出例が少ない。今後の資料増加を待って分析を行ないたいところであるが、特に岩清水遺跡の第１・４号住居址は、６世紀後半に比定されることで、本遺跡の東側に展開する御牧原台地での「望月牧」につながる馬の生産と生産に着手したと考えられる望月氏の母胎ともなる豪族の

問題がひかえており、これらの解明に向けて、重要な位置に置かれることは間違いないものと思われる。出土遺物の中に臼玉があることに注目したい。本遺跡の南東1600ｍの所に、瓜生坂祭祀遺跡が存在し、大形で作りの荒い臼玉が70点出土しているが、この資料とほぼ同類とみることができ、祭祀遺跡の資料が８世紀という考え方に一矢を投ずるものとして、今後の分析を待ちたいと思う。また、本資料の時期に祭祀遺跡の臼玉が比定されるものであれば、古東山道の経路についても、瓜生坂越えに確定できるものと思われる。

平安時代においては、住居址25棟が検出され、大部分が複合住居址であった。いずれも９世紀初頭から10世紀にかかるものである。特に調査区中央部は、切り合いや貼り床を行ない14棟が上下に複合していたため、プランの検出と同時に遺物の伴出関係も、調査上慎重さを要した。全体の遺構の中では、第３・７・18・19号住居址が整っているものである。遺物では、坏に見られるヘラ起しやヘラ削り底など、先行形態からの技法の影響が残るものが多く含まれていることが目立った。また第18号住居址で出土した、須恵器の茶碗形をした坏や、須恵質の紡錘車、土師器の小形の皿形土器など、この地方では今まで見られなかった資料も出土している。さらに、第２・３・20号住居址より塼が出土していたり、第20号住居址より炭化米や炭化種子も少量出土している。また、製鉄関係資料も出土するなど、蓼科山北麓地域で調査した今までの様相とはかなり内容の異なった在り方を示している。紙数の関係上本文により資料の提示をするだけに止まってしまったが、これらの詳細な歴史的背景を含めた分析を行なわなければならない責任を痛感している。

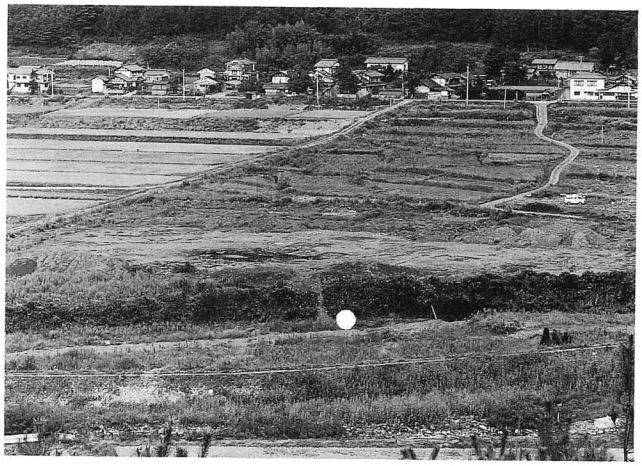
参考・引用文献

林　幸彦他　1984『若宮遺跡』　佐久市教育委員会
花岡　弘　1985『宮ノ反』　小諸市教育委員会
花岡　弘　1983『曽根城遺跡』　小諸市教育委員会
森嶋　稔　1978『更級・埴科地方誌　第２巻　原始・古代・中世編』　更級埴科地方誌刊行会
神津淑祐他　1955『北佐久郡志　第１巻　自然編』　北佐久郡志編纂会
富沢恒雄　1976『長野県地質図・長野県の地質』　信濃教育会出版部
福島邦男　1981『新水Ａ・Ｂ遺跡』　望月町教育委員会
森嶋　稔・笹沢　浩他　1976「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌23・24』
会田　進　1971「押型文土器編年の再検討」『信濃23－３』
大参義一他　1984『栃原岩蔭遺跡発掘調査報告書』　北相木村教育委員会
福島邦男　1982『金塚遺跡』　望月町教育委員会
土屋長久　1970「長野県北佐久郡望月町吹上山の神古墳について」『信濃22－12』
福島邦男　1984『胡桃沢・瓜生坂Ａ・宮久保Ａ・布施山寺Ａ・岩井遺跡緊急発掘調査報告書』　望月町教育委員会
福島邦男　1983『後沖遺跡』　望月町教育委員会

図　　版

図版一　岩清水遺跡全景

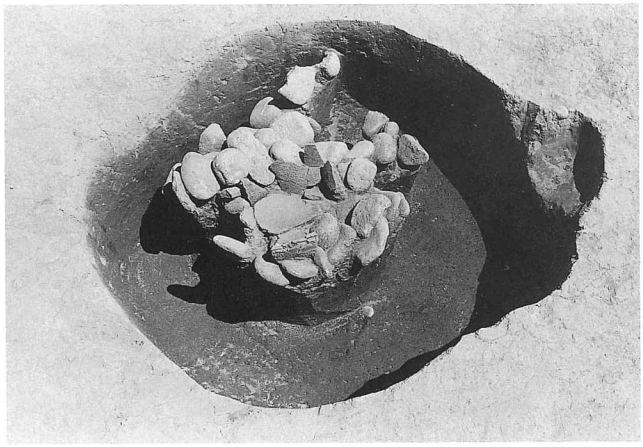
1．発掘調査地区及び周辺



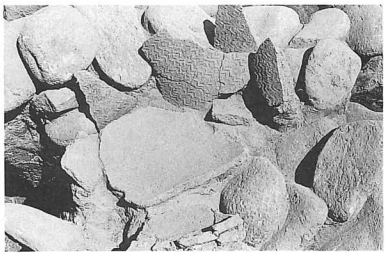
2．岩清水遺跡全景（○岩水）

3．岩清水遺跡に湧き出る「岩水」

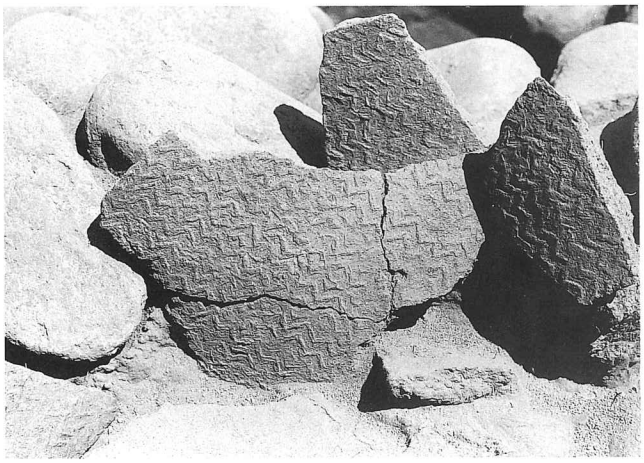
図版二　第一号土壙及び縄文式土器



1．第１号土壙

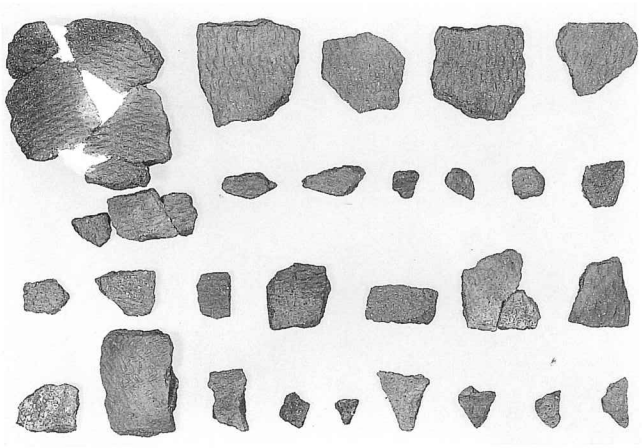


2．第１号土壙遺物出土状態



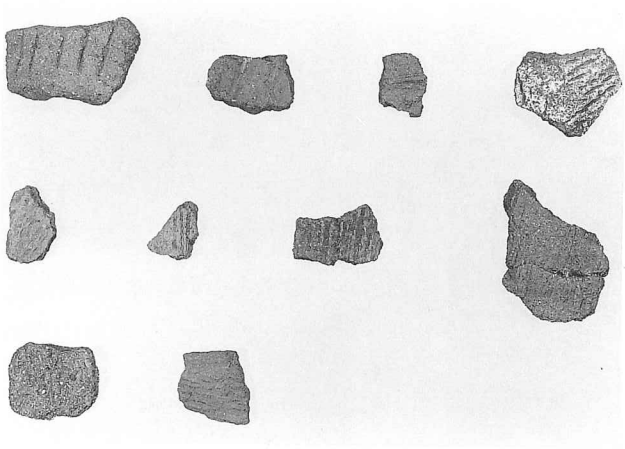
3．第１号土壙遺物出土状態

4．第１号土壙出土押型文土器

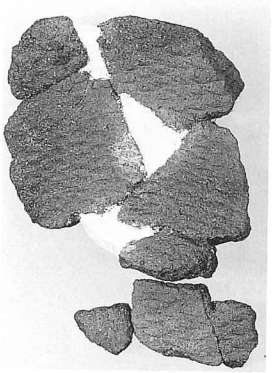


6．縄文早期土器

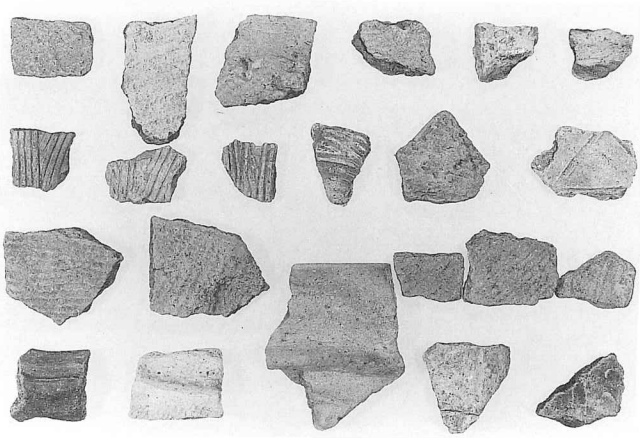
5．第１号土壙出土押型文土器文様



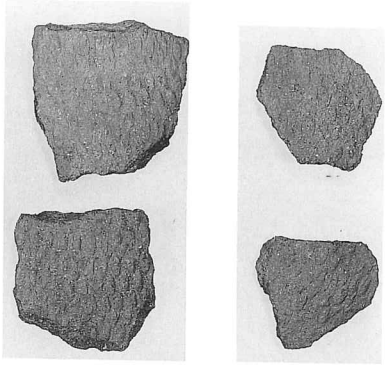
1．縄文早期土器



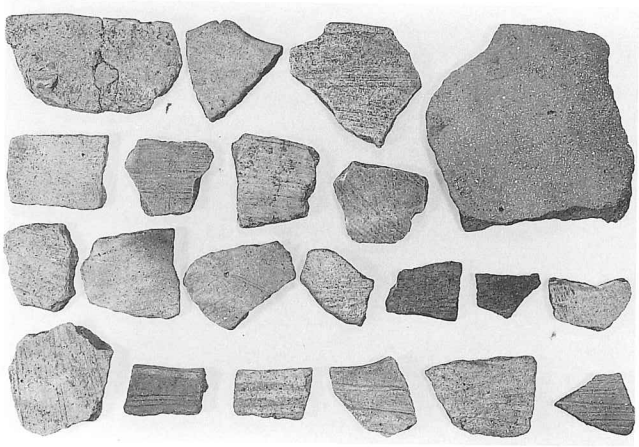
2．縄文早期土器（拡大）



4．縄文前・中期土器



3，縄文早期土器（拡大）

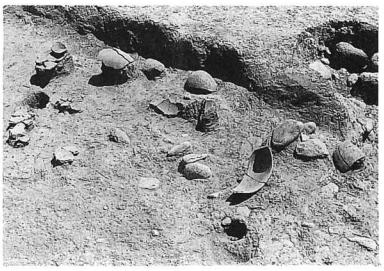


5．縄文後期土器

図版四　第一号住居址

1．1住全景

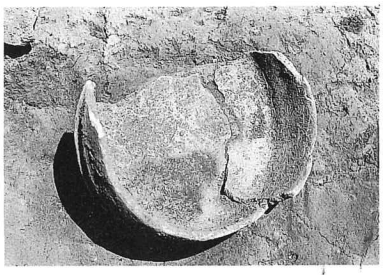
2．1住カマド



3．1住遺物出土状態

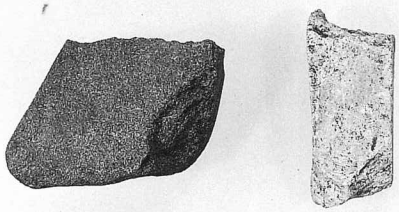
4．1住坏出土状態

5．1住坏出土状態



6．1住坏出土状態

7．1住坏出土状態



8．1住砥石

1．1住坏

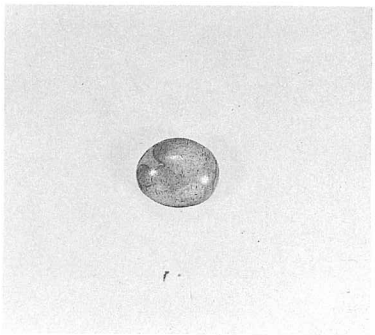
2．1住坏

3．1住坏

4．1住鉢

5．1住坏

6．1住こしき

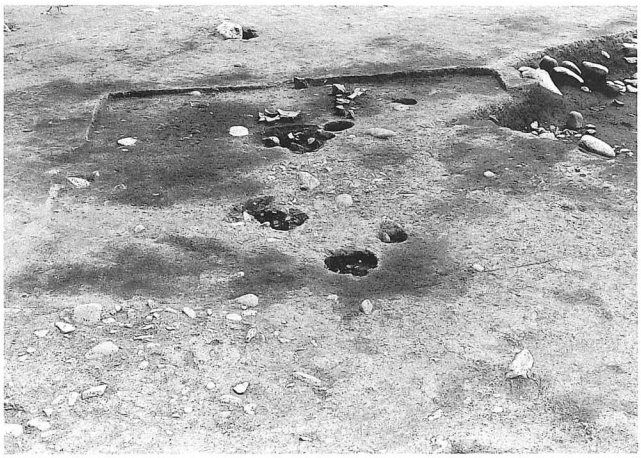


8．1住瑪瑙玉

7．1住甕

9．1住臼玉

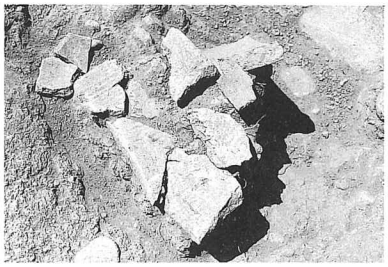
図版六　第二・三号住居址



1．2住全景

2．2住カマド・土壙

3．2住遺物出土状態

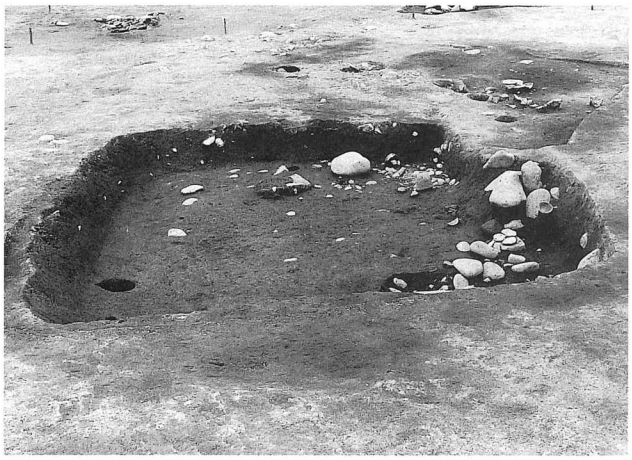


4．2住布目瓦出土状態

5．2住坏

6．2住坏

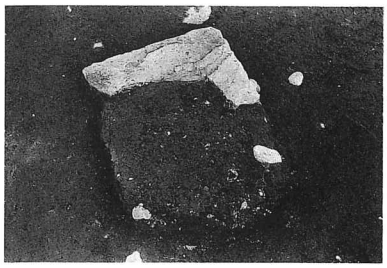
7．2住坏



8．3住全景

9．3住カマド

10．3住甕出土状態



1．3住塼出土状態

2．3住塼

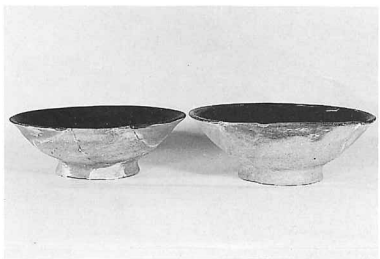
3．3住坏

4．3住坏

5．3住坏

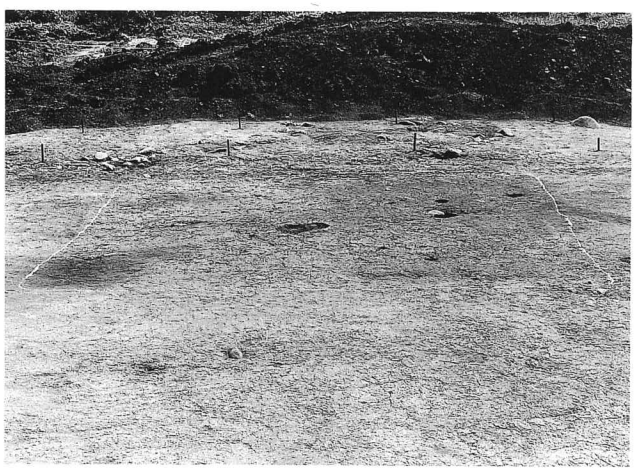
6．3住坏

7．3住坏



8．3住坏

図版八　第四・五・六号住居址

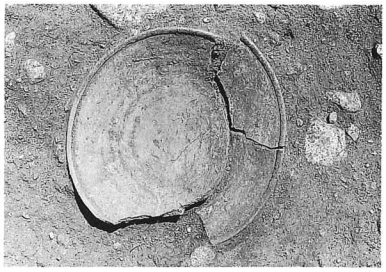


1．4住全景

2．5住全景

3．6住全景

4．6住カマド



5．6住坏蓋出土状態

6．6住坏蓋

7．6住坏

1．7住全景

2．7住カマド

3．7住配石

4．7住坏出土状態

5．7住坏

6．7住坏

7．7住甕

図版十　第八・九号住居址

1．8住全景

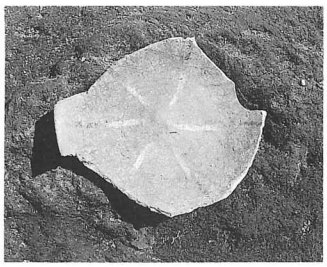
2．8住カマド

3．8住坏出土状態

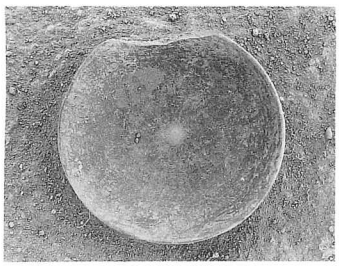
4．8住坏

5．9住全景

6．9住カマド



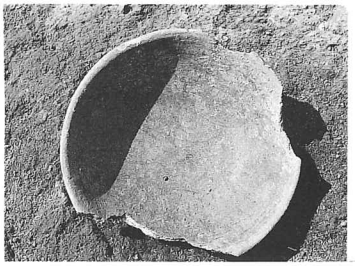
7．9住坏出土状態



8．9住坏出土状態

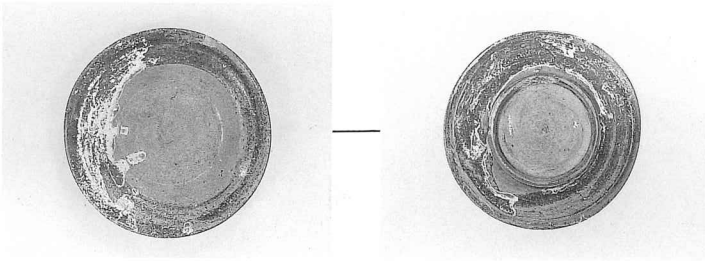
9．9住坏・灰釉陶器出土状態

10．9住坏出土状態



11．9住坏出土状態

1．9住坏出土状態



2．9住灰釉陶器

3．9住灰釉陶器、坏

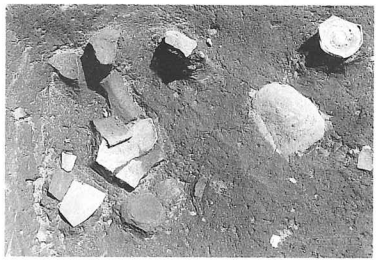
4．9住坏

5．9住坏

6．9住坏

7．9住坏

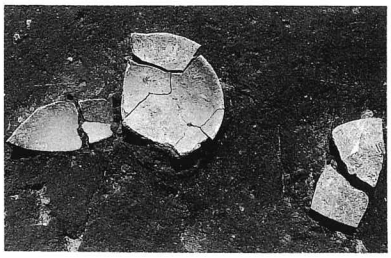
8．10住全景



9．10住遺物出土状態

10．10住遺物出土状態

図版十二　第十・十一・十二号住居址



1．10住坏出土状態

2．10住坏

3．10住坏

4．11住坏

5．11住坏

6．11住鉢

7．12住全景

8．12住カマド

9．12住坏出土状態

10．12住坏

11．12住坏

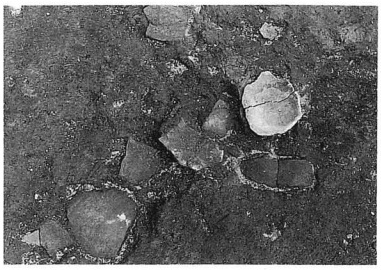
12．12住坏

1．13住全景

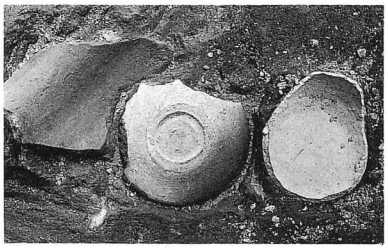
2．13住坏

3．14住全景

4．14住カマド



5．14住遺物出土状態



6．14住坏、甕出土状態

7．14住坏出土状態

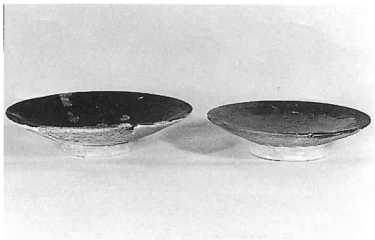
8．14住坏出土状態

9．14住紡錐車出土状態

図版十四　第十四・十五・十六・十七号住居址

1．14住坏

2．14住坏



3．14住皿

4．14住坏

5．14住坏

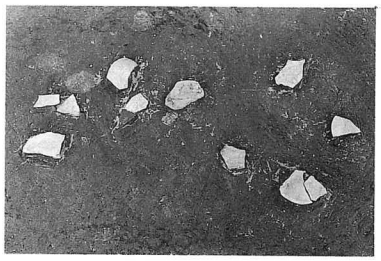
6．14住蓋

7．15住全景

8．16住、17住全景（手前16住、奥17住）

9．16住坏

1．18住全景

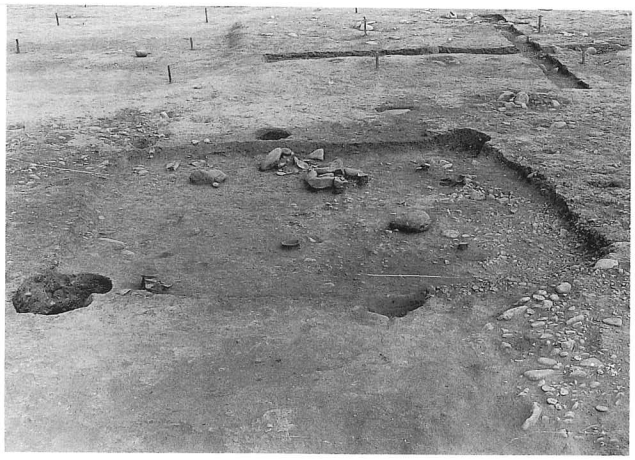


2．18住遺物出土状態

3．18住坏

4．18住坏

5．18住坏、皿



6．19住全景

7．19住カマド

図版十六　第十九・二十号住居址

1．19住坏

2．19住坏

3．19住坏

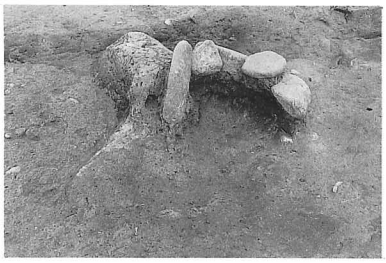
4．19住坏

5．19住甕

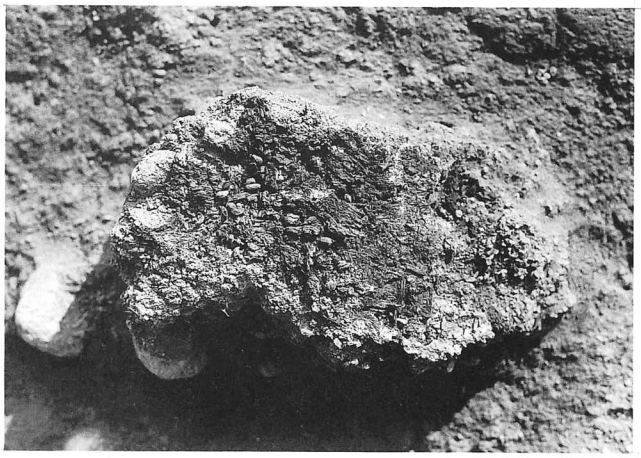
6．19住甕

7．19住鉢

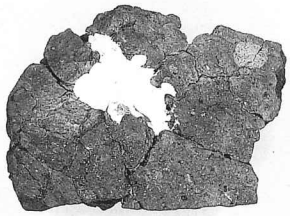
8．20住全景

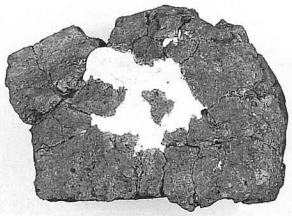


9．20住カマド



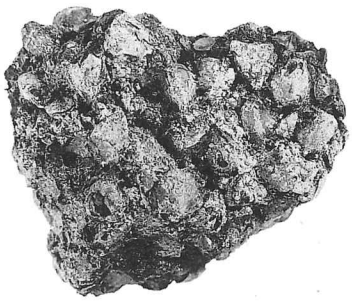
1．20住炭化物出土状態





2．20住塼

3．20住炭化米



4．20住炭化種子

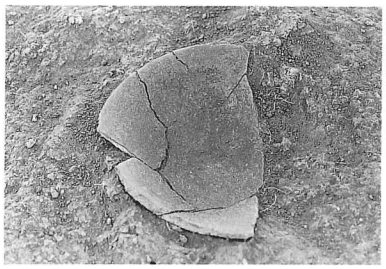
図版十八　第二十一・二十二・二十四号住居址

1．21住全景

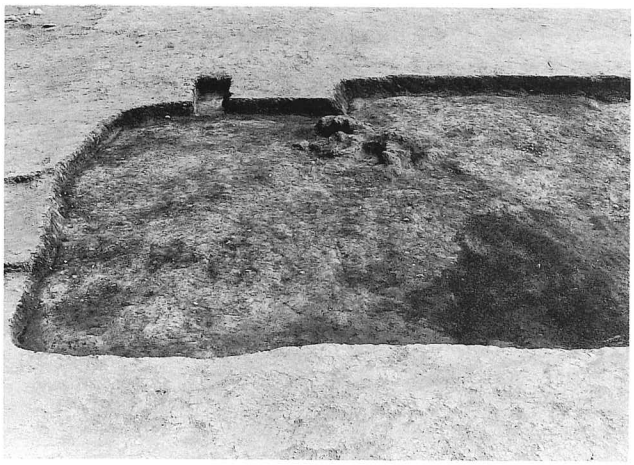
2．21住坏出土状態

3．21住坏

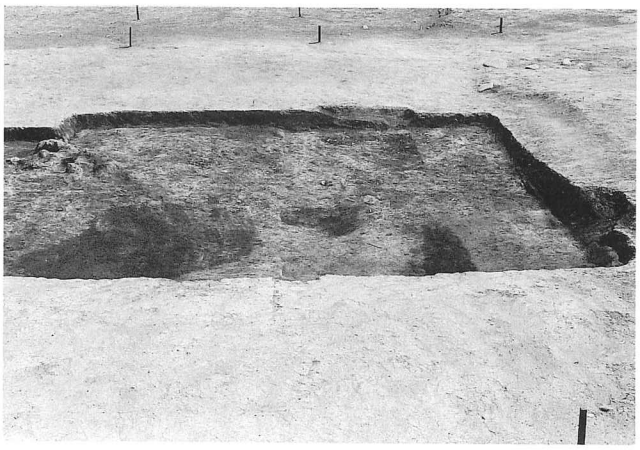
4．22住全景



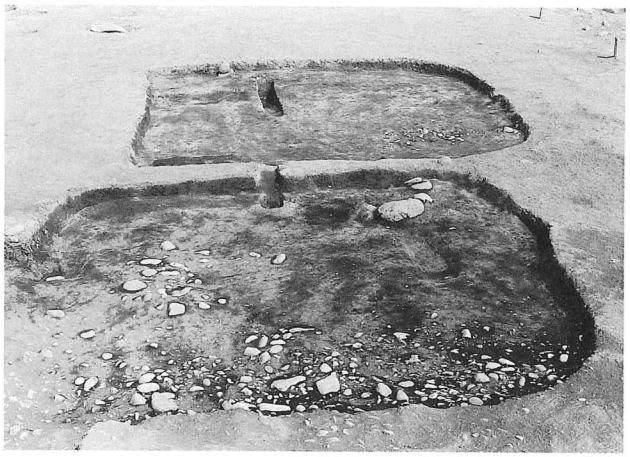
5．22住坏出土状態



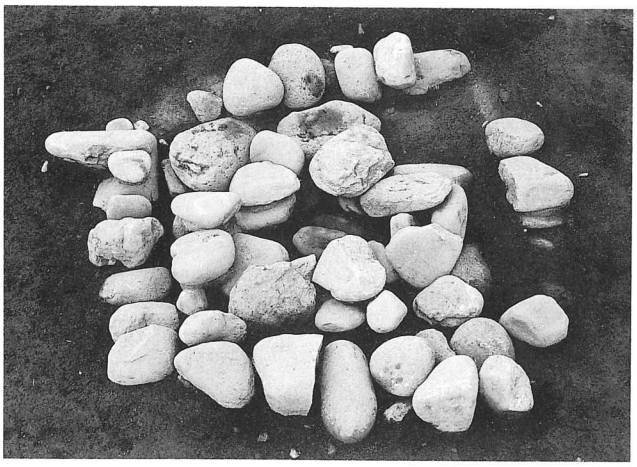
6．24住全景



1．25住全景

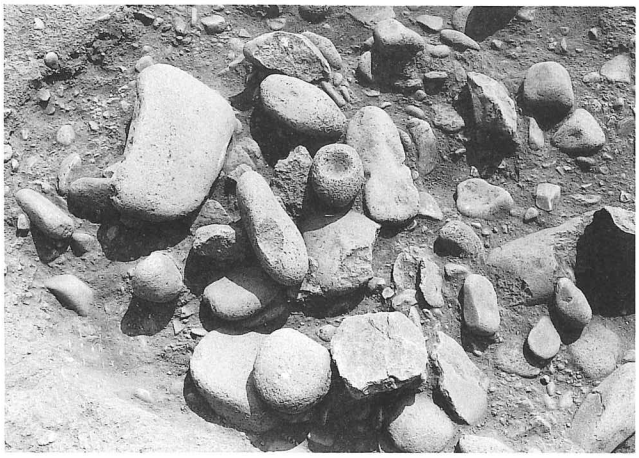


2．26住、27住全景（手前26住・奥27住）



3．1号配石址全景

図版二十　第二・三号配石址・その他の遺物



1．2号配石址

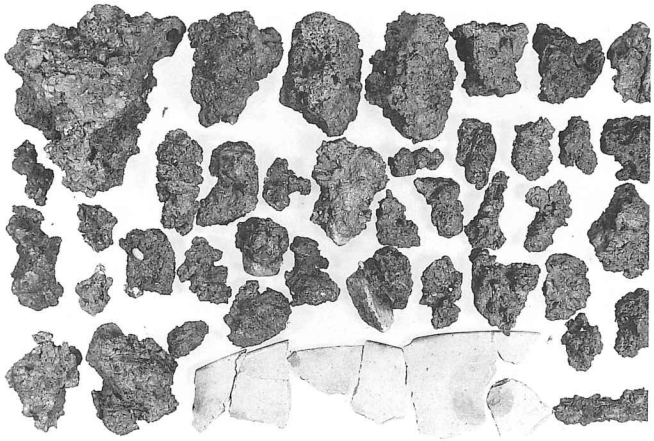
2．2号配石址石臼出土状態

3．2・3号配石址全景（南より）

4．2・3号配石址全景（西より）

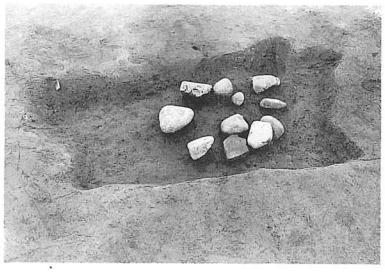
5．3号配石址

7．内耳土器出土状態



6．製鉄関係遺物（鉄滓・坏・刀子）

8．内耳土器

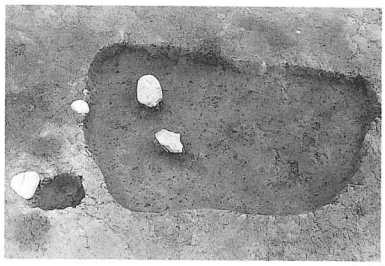


1．SK-02

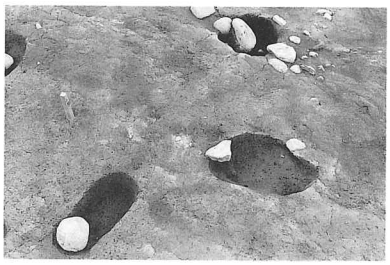
2．$P_{1\sim5}$付近

3．P_1・P_2

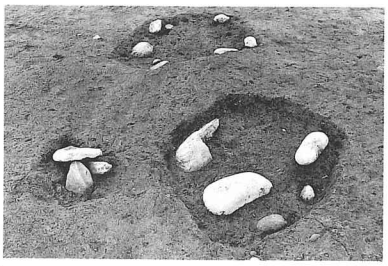
4．SK-03



5．SK-04

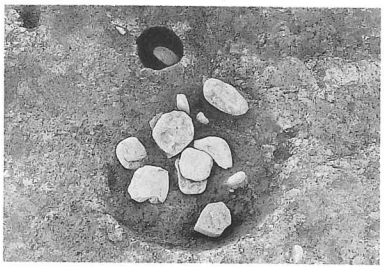


6．P_3付近

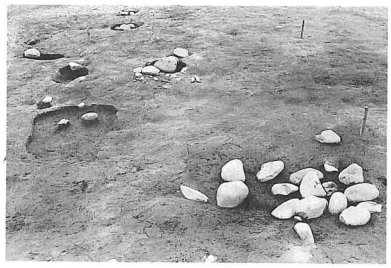


7．SK-10付近

8．SK-8



9．SK-6付近



10．SK-04付近

図版二十二　調査過程

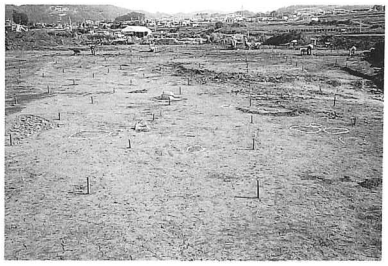
1．町長さんを迎えての結団式

2．試掘調査

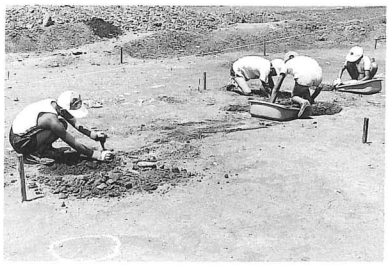
3．表土剝ぎ

4．調査風景

5．調査風景



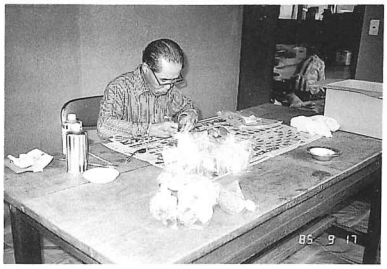
6．調査進行状態



7．親と子の歴史教室

8．親と子の歴史教室

9．親と子の歴史教室



10．整理風景

望月町文化財調査報告書　第16集

岩 清 水 遺 跡

――緊急発掘調査報告書――

発行日　1986 年 3 月 20 日
編集者　望 月 町 教 育 委 員 会
発行者　東信土地改良事務所
　　望 月 町 教 育 委 員 会
印　刷　ほおずき書籍株式会社